



発刊にあたって

現在、日本のろう者に関する書物は皆無といってもよい。特にそれはろう者達の母語である手話（一般には身振も含めて手真似といっている。）について甚だしい。大体、日本においてろう者のための教育というものが始められてから約九十年になるが、その教育が義務制になったのは昭和二十三年である。ということからしても一般の教育とはかなりへだたりのあることを感じさせるのである。しかもその教育は、ろう者たちが必然的に培った手話によるものではなく、口話教育といわれる「読話と発語」を中心にしたものである。この口話教育の利点は、従来、手話だけによって思想を構成し、思考していたろう者たちの世界を甚だしく拡大してそこに明かるい光りを与え、特にその手話の理論的、系統的なものへの発展を促進させてきたのである。

しかしながら、成人ろう者の世界はやはり手話であり、比較的口話の上手なものでもやはり手話であり筆談と口話の混用なのである。このように手話はろう者にとって必要欠くべからざるものでありながら手話に関する書物は昭和三十七年に私の書いた理論としての「手真似」という本が、日本における最初のものなのである。この点私は常に残念に思っていた。ところが、松永端氏の長年に亘る苦心がここに実を結んで、ろう者の日常会話の中で、もっとも多くつかわれてい

るもの二千二十三語、教訓十七語をもって「手話辞典」なるものが書かれた、ということはこの
ろうあ界のできごととして特に特筆すべきことであり、快挙といわねばならない。

この「手話辞典」を発刊するに当り、私はこの意義ある仕事にたずさわることができたことを
心から感謝しているものである。

昭和三十八年二月

尾山台にて

市 村

栄

推薦のことば

凡そ辞典と名のつくものの数は、実におびただしいものでありますが、手話に関する辞典といえは恐らくこれが最初のものではないかと思えます。

現在日本に、耳の不自由な方々が約十六万人おられますが、その多くの方が、実生活においては、眼で唇の動きをよむ談話のほかに、筆談や、身振りや、手真似を使ってその用を達しています。

ところが、これらの方法のうち、広範囲の方々に使用されている手真似につきましては、地域的にかなり違ったものであると聞いています。

この意味において、この辞典が全国の手真似の統一に貢献し、また、ろうあ者の福祉に携わる方々にとってのよき手引書となり、私どももまた、この辞典をひもとくことにより、手真似を通して少しでもろうあ者の意志を理解することができますならば、この面の福祉の向上に大いに役立つものと信じます。

ここに本辞典の公刊を心から祝し、広く推薦する次第です。

昭和三十八年四月

厚生省社会局長

大 山

正

序

文字以前に絵文字があり、絵文字以前に手真似があつたらうかという様な詮索は言語学者にお任せしておいて、実在として港間に手真似がサイン・ランゲージとして古くから使われて居り、言語発声器に障害のある聾啞者に於て広く使用されて来たことは蓋し自然の成り行きである。

そして、それが聾啞教育の進展に伴い手真似の範圍、つまり語彙増加乃至複雑化して来て居る事は否めない事実である。

目は口程に物を言うというが、手も亦口程に靈妙の作用をすることが、手真似の世界に分け入ると共に発見される。印度や仏蘭西の手の舞踊、基督教の手指似による表示等々、戦時中一時軍隊で使用した所謂サイン・ランゲージ等々、手真似に関する用途は過去は勿論現在及将来に於ても問題とする点が、音に聾啞者の世界のみならず一般社会に段々弘まって来るのではないかと慮われるのである。使えば航空機関係などで——現に魚市場や株式取引所などでも一種特定の数字文字を使用して居ることなども——

本書は極く平易簡単な、誰れにでも一見してそれと判るような語彙のみ約二千語ばかり選んで、その表現方法を解説々明したものである。

故に検索者に便するため五十音別に、普通の辞典の形式を採つてある。

近時、民官に於て、變態者と対話する場合が増加したようである。例えば作業所、事務所（社会福祉関係など）で、発声言語の充分目的を達しない場合、これが補助として手真似を使用することです。解する場合がなしとしない。

これ等用途を達成するための本書の価値は充分認めらるべきもので、文献としては我邦に於ては実に少いのである。

編著者松永端氏の苦心は洵に敬意を表するに足るもので本書によって得らるる便益の範圍は相当博いものである事を敢えて断言する。

昭和三十八年一月二十六日

全日本聾啞者連盟長

藤 本 敏 文

はしがき

最近各方面から手話に対する関心が持たれるようになったのか、方々から「手話の講演講習」に招かれることが多くなった。私はその講演の冒頭で必ず次のようなことを云うことになっている。

「手話と云いまして、即ち手まねなるものが快して皆さん（一般健聴者）にとつては外国語のようなものではないのであります。何故なら皆さんは日常絶えずそれを使って居られるのであります。」

事実、一般の人々は「駄目だよ」と云つては片手を横に振る。「困ったね」と云つては頭を掻く身振りをする。「親爺はいるか」と云つては親指を出して見せる。「満腹です」と両手で腹の大きさを表現する。「失業しました」と自分の首を切る真似をする。「昨日釣った魚はね」とその大きさを両手を開いて誇示する。

こうして人々は手まね身振りで意志感情の伝達の手段を心得ている。それは音声語の補助としてなされている場合もあろうが、実はそれは自然的な心理的表出なのである。

聾啞者の手話と云つても、快してそれとは別系統のものではないのである。即ち一般人々の常

に表現している身振り手まね同様な自然的に発生したものであるから一般の人々にとっては外国語のようなものでないのである。つまり、人間が共通に持つ表出過程によるものであると云う可
きか。

そして、聾啞者の手話と云う形式はこうした自然的心理的表出の身振表現を整理し、合理化し
視覚化しまたは規範化したものであると思えばよい。

さて、手話は身振言語とも云われ、またポピュラーな云い方では手まねと云われているのであ
る。

しかし、身振言語と云えば大きなダンスチャー遊戯のような全身的表现と思われ易いと云うもの、手話は手だけの運動表現では快してないのである。手話と云えども、全身が舞台となつて
いることを忘れてはならない。手話には重要な役割を演ずる場合もある。また上肢は勿論下肢の
運動もままある。しかし、手話は全身の身振りよりは集約整理されて、手そのものが主軸とな
り、尤もそれ自体が主演するのである。

以上手話について簡単に触れて、手話構成の理論的なことは省くことにする。

さて、この冒頭にも書いたように、一般の手話に対する関心が高まりつつあって最近の聾啞者
の職域が広くなり自然聾啞者の社会的進出がめざましくなるにつれ、一般社会に手話を習得した
いと云う人々がかなり多くあることを聞いている。そして、本辞典のような刊行を要望される次

第である。そこで、全日本聾啞連盟長藤本敏文氏がその要望に応じて本辞典の刊行に尽力されて来たのである。

米国等では既に以前からこの種の辞典が世に出ているのであるが、我国では簡単な手話の手引と云ったような冊子があったが、「手話辞典」としては初めての企であるだけに、本書の利用者の満足を得るには編者としては十分な自信を持っていないのであるが、後日改めて刊行される場合は、一般識者の指導を得て、本書の欠点を充足したいと思う。

尚、手話の様式は地方によっては多少方言的な相違があるが、嘗ては手話法教育の中心であった大阪の様式を主として本辞典に集録したのであることを了承されたし。最近聾啞者間では全国的に手話の統一を望む向きもあると聞いているが、本辞典がいくらかそれに寄与するところがあれば幸甚である。

最後に、本辞典の出版にあたって、都立大田聾学校教諭市村栄先生の並々ならぬ御援助を賜ったことを感謝する次第である。

編著者

松 永

端

凡 例

◎文中に指定した指以外の指は折畳まれたものとする。

例えば「指頭を上にした人差指と中指」とあれば、その他の親指、薬指、小指の三指は折畳まれている。

◎文中指定した指以外の指が伸ばして置く場合は（ ）内に但し書きがある。

例えば「親指と人差指の指頭をつけ合わせて丸く輪をつくる（但し他の三指は伸ばしたまま）」と。但し書きのない場合はきままって他の指は折り畳まれているものと注意ありたし。

◎片手または両手の運動については、その手話の手の姿態を解り易く説明する都合上「右の手」と指定してあるが、実は左右何れの片手を使ってもよいのである。

例えば、(一)「五指の指頭を上にし左に向けた右手の掌で同じ側の右頬を軽く叩く真似をする」とあれば、それは右手の運動に限ったことではない、五指の指頭を上にし、右に向けた左頬を軽く叩く真似をしてよいのである。

(二)「五指の指頭を前方にさし、右に向けた左手の掌に、五指の指頭を右にさし掌を内側にし、右手を直角につける」とあっても、左右両手の姿態を変えてもよい。

◎「彎曲させる」となどある場合以外の指掌はピンと張る。そうでないと手話が明確できれいに

見えない。

◎次の場合以外は五指の間を開かないでピッタリとつけて置く。

「式」「遠足」「憤る」「不安」(危い)「痛む」などの場合は五指の間を開いて置く。

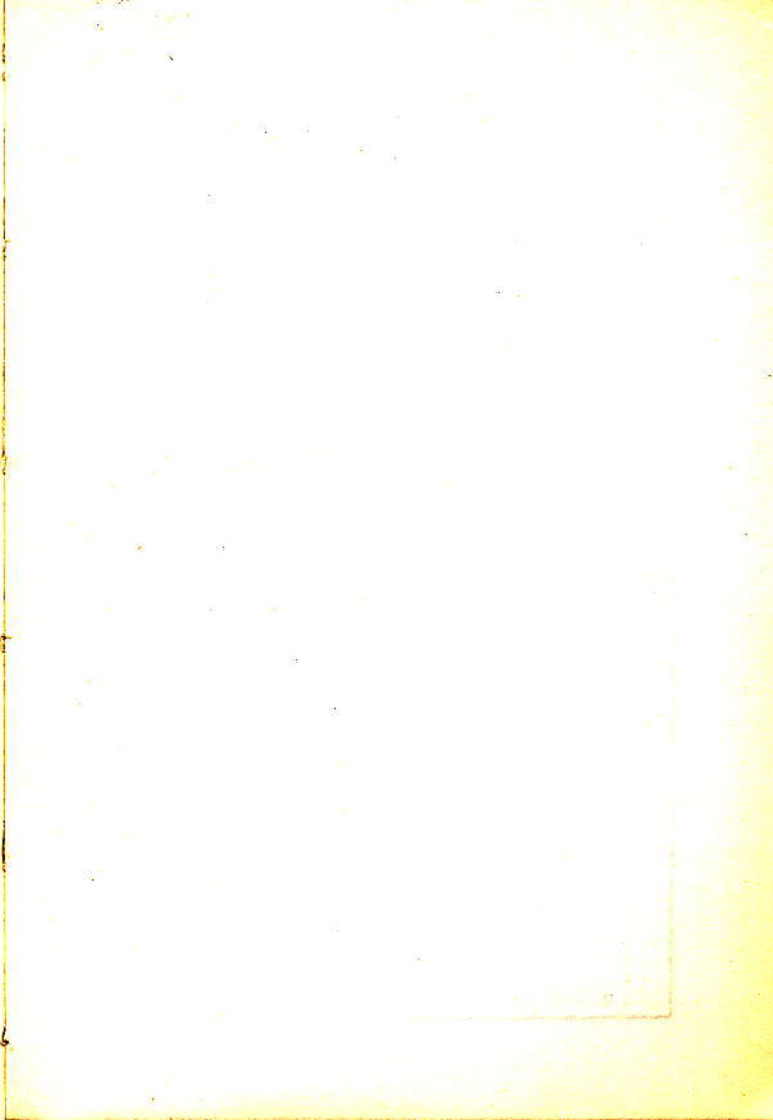
THE HISTORY OF THE
CITY OF BOSTON
FROM 1630 TO 1800
BY
JOHN H. COOPER
VOL. I
1847

総目次

発刊にあたって……………	一
推薦のことば……………	三
序……………	五
はしがき……………	七
凡例……………	〇
総目次……………	三
頂目一覧……………	一五
本文……………	七五
数詞……………	一三〇
指文字表……………	一三三

本文ページ一覧

ア	七五	イ	八四	ウ	九三	エ	九七	オ	一〇〇
カ	一〇七	キ	一七七	ク	一三三	ケ	一六六	コ	一三〇
サ	一六六	シ	一四〇	ス	一五二	セ	一四四	ソ	一六九
タ	一六一	チ	一六九	ツ	一七三	テ	一七七	ト	一八〇
ナ	一七七	ニ	一九〇	ヌ	一九九	ネ	一九九	ノ	一九九
ハ	一四四	ヒ	一九九	フ	二〇二	ヘ	二〇五	ホ	二〇六
マ	二〇九	ミ	二三三	ム	二二五	メ	二二六	モ	二二七
ヤ	二一九			ユ	二三二			ヨ	二三三
ラ	二三四	リ	二三五	ル	二三六	レ	二三七	ロ	二三七
ワ	二三六								



項目一覽

ア

愛(愛する).....	七五
相愛らず.....	七五
拶揆.....	七五
愛人.....	七五
愛情.....	七五
間柄.....	七五
曖昧.....	七五
会う(逢う).....	七五
相手.....	七五
青.....	七六
赤.....	七六
赤子(赤ちゃん).....	七六
崇める.....	七六

明るい.....	七六
秋.....	七六
商い(商う).....	七六
明らか.....	七六
諦らめる.....	七六
悪(悪い).....	七六
飽く.....	七六
厭く.....	七六
悪意.....	七六
悪口.....	七六
悪徳.....	七六
悪人.....	七六
明ける.....	七六
開ける.....	七六
憧憬れる.....	七六
朝.....	七六
敗く.....	七六
浅間しい.....	七六

味	ㄉ
明後日	ㄉ
明日	ㄉ
悪しからず	ㄉ
足駄	ㄉ
預かる	ㄉ
預ける	ㄉ
焦せる	ㄉ
遊ぶ	ㄉ
与える	ㄉ
あたりまえ	ㄉ
暖い	ㄉ
新しい	ㄉ
暑い	ㄉ
熱い	ㄉ
あつかましい	ㄉ
斡旋する	ㄉ
天晴れ	ㄉ

集める(集つまる)	ㄉ
あてはずれ	ㄉ
あてはまる	ㄉ
あてられる	ㄉ
後で(後から)	ㄉ
穴	ㄉ
侮どる	ㄉ
兄	ㄉ
兄嫁	ㄉ
姉	ㄉ
姉婿	ㄉ
暴れる	ㄉ
危ない	ㄉ
油(背)	ㄉ
溢れる	ㄉ
あぶれる	ㄉ
あべこべ	ㄉ
阿呆	ㄉ

尼	八二
甘い	八二
余る	八二
編物	八二
餡	八二
雨(雨降り)	八二
操つる	八二
怪しむ	八二
廻まち	八二
謝まる	八二
嵐	八二
争う(争い)	八二
改まる(改める)	八二
改めて	八三
凡ゆる	八三
在る(有る)	八三
主	八三
有難う	八三

有様	八三
歩く	八三
アルバム	八三
合わせる	八三
周章てる	八三
哀れ	八三
惻れむ	八三
案じる	八三
安心	八三
安全	八四
安内する	八四
イ	
医	八四
云い当てる	八四
云いつける	八四
許婚	八四
云いふらす	八四

委員	八四
医院	八四
云う	八四
云うな	八四
家	八四
以下	八四
鳥賊	八五
意外	八五
以外	八五
医学	八五
怒る(憤る)	八五
遺憾	八五
勢	八五
生きる	八五
生き返える	八五
行く(行け)	八五
戦	八六
いくつ(いくら)	八六

池	八六
いけない	八六
意見	八六
以後	八六
遺骨	八六
勇ましい	八六
意志	八六
意地	八六
石(岩)	八七
医者	八七
以上	八七
偉人	八七
椅子	八七
以前	八七
忙しい	八七
急ぐ	八七
悪戯	八七
頂く	八七

痛い(痛む).....	七
悼む.....	八
母.....	八
市場.....	八
一日(終日).....	八
一昼夜.....	八
一任(委任).....	八
意地悪る.....	八
一墨手.....	八
いつ.....	八
いつも(常に).....	八
一切.....	八
一生.....	九
一緒(一致).....	九
一生懸命.....	九
一層.....	九
一杯くった.....	九
一般.....	九

いつわる.....	九
移転.....	九
井戸.....	九
従兄弟(従姉妹).....	九
田舎.....	九
稲光.....	九
犬.....	九
猪.....	九
威張る.....	九
訝かる.....	九
今.....	九
意味.....	九
芋.....	九
妹.....	九
嫌や.....	九
違約.....	九
卑しい.....	九
以来.....	九

依頼	九二
苛立つ	九二
入日	九二
入用	九二
いろいろ	九二
色	九二
居る	九二
祝う	九二
云われる	九二
隠居	九二
印刷	九二
印紙	九二
淫売婦	九二
印判	九二
ウ	
飢える	九二
魚	九二

受合う	九三
兎	九三
牛	九三
失う	九三
嘘(嘘云う)	九三
歌(唄う)	九三
打合わせ	九三
内側	九三
団扇	九四
うっかり	九四
美しい	九四
写す	九四
うっとり	九四
腕利き	九四
腕前	九四
うどん	九四
鰻	九四
自惚れ	九五

馬……………五
 うまい……………五
 うまいことをした……………五
 生れる……………五
 海……………五
 産む……………五
 悔……………五
 敬まう……………五
 裏……………五
 裏返す……………五
 占い……………五
 恨らむ……………五
 羨やましい(羨む)……………五
 羨やましい(羨む)……………五
 売る……………五
 憂い(憂う)……………五
 嬉れしい……………五
 うったえる……………五
 噂……………五

運動……………六
 運動会……………七
 運命……………七
 工
 絵……………七
 映画(キネマ)……………七
 影響……………七
 営業……………七
 衛生……………七
 映写する……………七
 栄養……………七
 駅……………六
 枝……………六
 会得する……………六
 蝦……………六
 絵具……………六
 偉い……………六

王	甥	おしし	鉛筆	遠慮する	遠足	煙突	延長	縁談	演説	援助	演習	演劇	延期	宴会	選らぶ
.....
100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

オ

臆病	起きる	お経	おかしい	丘	横暴	往復	王妃	オートバイ	横着	応諾	皇子(王子)	大勢(多い)	狼	大袈裟	扇	大方	応援
.....
101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	101	100	100	100

贈物	一〇三
怠る	一〇三
行い	一〇三
憤る	一〇三
幼い	一〇三
啞	一〇三
伯父(叔父)	一〇三
教える	一〇三
惜しむ(惜しい)	一〇三
惜しいことをした	一〇三
和尚	一〇三
汚職	一〇三
遅い(遅くれる)	一〇三
恐れる	一〇三
落ちぶれる	一〇三
夫	一〇四
弟	一〇四
伽嘶	一〇四

一昨日 <small>おととい</small>	一〇四
男 <small>おとこ</small>	一〇四
一昨年 <small>おととし</small>	一〇四
大人	一〇四
劣る	一〇四
踊る	一〇四
衰える	一〇四
驚く	一〇五
同じ	一〇五
鬼	一〇五
各々	一〇五
伯母(叔母)	一〇五
憶える	一〇五
おぼつかない	一〇五
重い	一〇五
思い(思う)	一〇五
思いきる	一〇五
思い忍ぶ(思い焦れる)	一〇五

カ	温泉	一〇七
	女	一〇七
	恩人	一〇七
	音楽	一〇七
	恩	一〇六
	オルガン	一〇六
	終る(終り)	一〇六
	愚か	一〇六
	折々	一〇六
	親方	一〇六
	親	一〇六
	表向き	一〇六
	面白い	一〇六
	思いやり	一〇六
	思い出	一〇六
	思い違い	一〇六

介抱(看護)	一〇九
外套(オーバー)	一〇九
改心	一〇九
会場	一〇九
解釈	一〇九
解散	一〇九
悔恨	一〇九
蝨	一〇九
解決	一〇九
會計	一〇九
海軍(海兵)	一〇九
會議	一〇九
海岸	一〇九
快感	一〇九
開会	一〇九
貝	一〇七
会(会合)	一〇七
蚊	一〇七

会話	一〇九
買う	一〇九
却って	一〇九
帰える	一〇九
変える(変わる)(代り)	一〇九
鏡	一一〇
係員	一一〇
柿	一一〇
鍵	一一〇
鉤	一一〇
限り	一一〇
書く	一一〇
覚悟	一一〇
隠くす	一一〇
学識	一一〇
格別	一一〇
学問	一一〇
学力	一一〇

家業	一一〇
隠れる	一一〇
可決	一一一
掛算	一一一
過去	一一一
傘	一一一
笠	一一一
火山	一一一
家事	一一一
火事	一一一
風	一一一
舵(楫)(ハンドル)	一一一
賢い	一一一
過失	一一一
数	一一一
貸す	一一一
稼ぐ	一一一
風邪	一一一

固い	二二
敵打ち	二三
片付ける	二三
刀(刀劔)	二三
勝つ	二三
渴える	二三
がっかり	二三
合併	二三
家庭	二三
下等	二三
叶う	二三
悲しい	二三
必ず	二三
蟹	二三
金(金銭)	二三
鐘	二三
缸	二三
金持(富豪)	二四

金儲け	二四
鞆	二四
株式	二四
釜	二四
鎌	二四
かまわない	二四
神	二四
紙	二四
雷	二四
亀	二五
がめつい	二五
カメラ	二五
蚊帳	二五
火曜日	二五
空(空っぽ)	二五
辛い	二五
鳥	二五
ガラス	二五

仮りに	二五
借りる	二六
カルタ	二六
軽い	二六
枯れる	二六
川(河)	二六
可愛い	二六
変りなく	二六
考える	二六
関係	二六
看護婦	二六
頑固	二六
勘定	二六
感謝	二六
感心	二六
完全	二七
簡単	二七
寛大	二七

肝賢	二七
監督(監視)	二七
勘恣	二七
看板	二七
キ	
樹(木)	二七
黄色	二七
急に	二七
消える	二八
議員	二八
記憶	二八
気おくれする	二八
気をつける	二八
機械	二八
議会	二八
気兼ね	二八
期間	二八

北	二九
規則	二九
競う	二九
汽船	二九
疵	二九
キス(接吻)	二九
徽章	二九
記者	二九
汽車	二九
期日	二九
氣質	二九
岸	二九
氣候	二八
機嫌	二八
危険	二八
訊く	二八
効く	二八
聞く	二八

期待	二〇
汚ない	二〇
貴重	二〇
気違い	二〇
切手	二〇
屹度	二〇
切符	二〇
狐	二〇
忌日	二〇
絹	二〇
希望	二〇
牙	二〇
記念	二〇
昨日	二〇
きまり(決っている)	二〇
決める	二〇
着物	二〇
疑問	二〇

規約	三〇
客	二三
キャッチャー(捕手)	二三
給金	二三
休憩	二三
給仕	二三
急に	二三
清い	二三
今日	二三
器用	二三
教員	二三
兄弟	二三
許可	二三
協会	二三
教会	二三
協議	二三
行儀	二三
教室	二三

教授	二三
競走	二三
去年	二三
行列	二三
嫌い	二三
気楽	二三
錐	二三
キリスト(キリスト教)	二三
器量(技量)	二三
議論	二三
金	二三
銀	二三
近視	二三
金魚	二三
金庫	二三
銀行	二三
近所	二三
金屬	二三

国	嘴	癖	業	苦心(工夫)	鯨	臭い(腐る)	叢	草	官司	空想	空気	悔い	金曜日	勤務	勤勉
.....
一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四	一三四

ク

軍人	軍鑑	玄人	黒	車(車輪)	苦るしい(苦るしむ)	来る	繰上げる	栗	較らべる	暮す(暮し)	暗い	倉	雲(曇り)	蜘蛛	組合	工夫	首切り
.....
二二六	二二六	二二六	二二六	二二六	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五	二二五

ケ

毛	二毛
警戒	二毛
計画	二毛
警官	二毛
景気	二毛
経験	二毛
稽古	二毛
経済	二毛
警察	二毛
計算	二毛
刑事	二毛
揭示	二毛
芸者	二毛
軽蔑	二毛
下女	二毛
呑んば	二毛

結果(結局)	二毛
結婚	二毛
下駄	二毛
決議	二毛
月給	二毛
傑作	二毛
決算	二毛
月謝	二毛
月収	二毛
欠席	二毛
決して	二毛
決心	二毛
月賦	二毛
月曜日	二毛
下男	二毛
下品	二毛
獣	二毛
家来	二毛

粉	子	コ	俟約	顯微鏡	憲兵	拳斗	幻灯	劍道	建設(建築)	現在(今)	健康	研究	元氣	喧嘩	原因	けれども
.....
一〇〇	一〇〇		一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元	一元

皇后	孝行	攻撃	合計	工業	厚顔	交換	狡猾	合格	後悔	高価	講演	後援	公園	光荣	好運	恋	鯉
.....
一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇	一三〇

広告	三三
交際	三三
工作	三三
降参	三三
講習	三三
高尚	三三
皇族	三三
校正	三三
洪水	三三
工場	三三
講堂	三三
強盜	三三
コヒ	三三
工夫(鋌夫)	三三
幸福	三三
公平	三三
交替	三三
皇太子	三三

皇太后	三三
校長	三三
交通	三三
功名	三三
高等	三三
鈎物	三三
高慢	三三
効用	三三
誤解	三三
互角	三三
小刀	三三
故郷	三三
国際	三三
告白	三三
極楽	三三
心得	三三
試みる	三四

快よい	一三四
午前	一三四
乞食	一三四
故障	一三四
答え	一三四
答える	一三四
御馳走	一三四
誇張	一三四
滑稽	一三四
孤独	一三四
如く	一三四
殊に	一三四
言葉	一三五
好む	一三五
拒む	一三五
五分五分	一三五
胡麻化す	一三五
米	一三五

御免なさい	一三五
御免、御免(悪かった悪かった)	一三五
困る	一三五
恐い	一三五
こわれる(こわす)	一三五
殺す	一三五
こらえる	一三五
衣(法衣)	一三五
根本	一三五
サ	
サード(三塁手)	一三五
採決	一三五
最後	一三五
最初	一三五
裁判	一三五
財布	一三五
裁縫	一三五

採用	一
幸い	一
遮る	一
竿	一
坂	一
境	一
逆さ	一
探す	一
看	一
酒盛	一
詐欺	一
作業	一
咲く	一
桜	一
作家(文士)	一
作文	一
酒	一
避ける	一

池	一
尺	一
座敷	一
雑誌	一
砂糖	一
覚る	一
淋しい	一
座布団	一
差別	一
作法	一
サボル	一
様々	一
寒い	一
待	一
醒める	一
更に	一
去る	一
猿	一

朔	姑	思案	試合	死	シ	残念	算術	散歩	散髪	産婆	賛成	参詣	参観	散会	騒ぐ	竿
.....
一四一	一四一	一四〇	一四〇	一四〇		一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇

辞書	磁石	支出	事実	仕事	次女	地獄	試験	始業	式	時間(時刻)	叱られる	叱る	しかし	仕方がない	鹿	銃	塩
.....
一四三	一四三	一四三	一四三	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二	一四二

師匠	一四三
地震	一四二
静か	一四三
自然に	一四三
思想	一四三
地蔵さん	一四三
子孫	一四三
次第に	一四三
自重	一四三
室	一四三
実際	一四三
しっかり	一四三
失業(失職)	一四三
知っている	一四三
嫉妬	一四三
失望	一四三
質問	一四三
——してから(それから)	一四三

失恋	一四四
支店	一四四
自転車	一四四
自動車	一四四
忍ぶ	一四四
芝居	一四四
屢々	一四四
支部	一四四
自分自身(自分独り)	一四四
資本	一四四
次男	一四四
島	一四四
姉妹	一四四
しまった	一四四
自慢	一四四
事務	一四四
氏名	一四四
使命	一四四

ノ切	一四〇
閉める	一四〇
霜	一四〇
釈迦	一四〇
謝罪	一四〇
車掌	一四〇
写真	一四〇
喋べる	一四〇
謝礼	一四〇
自由	一四〇
周廻	一四〇
収益	一四〇
集合	一四〇
習慣	一四〇
週間	一四〇
宗教	一四〇
終始	一四〇
終日	一四〇

住所	一四〇
就職	一四〇
修身	一四〇
囚人	一四〇
修繕	一四〇
収入	一四〇
習得	一四〇
宿直	一四〇
祝日	一四〇
祝辞	一四〇
主人	一四〇
出張	一四〇
主任	一四〇
首領	一四〇
生涯	一四〇
小学校	一四〇
上機嫌	一四〇
昇給	一四〇

商業(商売).....	一毫
正午.....	一毫
証拠.....	一毫
招集.....	一毫
上手.....	一毫
正直.....	一毫
証書.....	一毫
少年少女.....	一毫
常人.....	一尺
小心.....	一尺
小説.....	一尺
醸造.....	一尺
招待.....	一尺
上達.....	一尺
冗談.....	一尺
承知.....	一尺
商店.....	一尺
商人.....	一尺

娼婦.....	一尺
勝負.....	一尺
丈夫.....	一尺
消防.....	一尺
書記.....	一尺
職業.....	一尺
職工.....	一尺
諸君.....	一尺
処女.....	一尺
書齋.....	一尺
除籍(除名).....	一尺
署長.....	一尺
ショット(遊撃手).....	一尺
書道(習字).....	一尺
書物(本).....	一尺
庶務.....	一尺
助力.....	一尺
上品.....	一尺

醬油	一五〇
知らない	一五〇
知る	一五〇
標 <small>しるし</small>	一五〇
白い	一五〇
城	一五〇
素人	一五〇
神経 <small>(神經質)</small>	一五〇
診察	一五〇
新參	一五〇
神社	一五〇
紳士	一五〇
信じない	一五〇
信ずる	一五〇
新戚 <small>(視類)</small>	一五〇
親切	一五〇
心臓	一五〇
新聞	一五〇

心配	一五二
審判	一五二
進歩	一五二
辛抱	一五二
新年	一五二
ス	
水泳	一五二
水瓜	一五二
水道	一五二
水夫 <small>(水兵)</small>	一五二
水曜日	一五二
数学	一五二
図画	一五二
好き <small>(好く)</small>	一五二
スキー	一五二
先腹 <small>すきはら</small>	一五二
過ぎる	一五二

優れる	一五三
直ぐ	一五二
少し(少い)	一五二
すし	一五二
鈴	一五二
涼しい	一五二
進む	一五二
ステッキ	一五二
既に	一五二
素的	一五二
ストライキ	一五二
素直	一五二
凡て	一五二
統べる	一五二
迂る	一五二
ズボン	一五二
住居	一五四
すまないことをした	一五四

済む	一五四
済ます	一五四
速やか	一五四
住む	一五四
相撲	一五四
炭	一五四
猾るい	一五四
刷る	一五四
坐る	一五四
税	一五四
誠意(誠実)	一五四
正確	一五四
性格	一五四
生活	一五四
精勤	一五四
生計	一五四

セ

成功	一五
政治(政府)	一五
性質	一五
聖書	一五
製造	一五
生存	一五
精神	一五
賢況	一五
成長	一五
晴天	一五
生徒	一五
政黨	一五
稅務署	一五
整理(整頓)	一五
生理日	一五
成年	一五
青年	一五
誓約	一五

西洋	一五
勢力	一五
世界	一五
悴	一五
席	一五
石灰	一五
石炭	一五
責任	一五
闕取	一五
絕緣	一五
絕交	一五
絕對	一五
絕望	一五
說明	一五
說教	一五
背広	一五
善	一五
鱒	一五

詮方なし	一五
選挙	一五
先月	一五
洗濯	一五
戦死	一五
専心	一五
前進	一五
潜水艦	一五
戦争	一五
全体	一五
宜伝	一五
センター	一五
船頭	一五
専門	一五
全滅	一五
象	一五

相違	一五
相応	一五
造花	一五
壮健	一五
相互	一五
葬式	一五
想像	一五
相談	一五
そうである(と云うことである)	一五
相当	一五
聡明	一五
僧侶	一五
草履	一五
即位	一五
賊	一五
そして	一五
祖先	一五
育てる	一五

鯛	田	損	算盤	それから	空	祖父母	祖母	祖父	傍 <small>そば</small>	蕎麦	その前(時間)	その上に	猜む	卒業	卒倒
.....
一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

夕

滞納	大休	怠惰	体操	大厩(大へん)	大切(大事な)	大臣	大丈夫(可能)	退職	退治	大根	大鼓	退屈	大工	体験	退却	大学	退学
.....
一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三	一三

代表	一六三
大部分	一六三
大砲	一六三
大役	一六四
太陽	一六四
代用	一六四
倒れる	一六四
互いに	一六四
沢山	一六四
——だけ	一六四
竹	一六四
竹籤	一六四
章魚	一六四
度し	一六五
足し算	一六五
黄持	一六五
尋ねる	一六五
戦う(斗う)	一六六

唯一つ	一六五
暈	一六五
忽ち	一六五
立つ	一六五
達人	一六五
脱走	一六五
建物	一六五
建てる	一六五
妥当	一六五
たとえ	一六五
——でも	一六五
例えば	一六五
頼む	一六六
煙草	一六六
足袋	一六六
旅	一六六
度々	一六六
多分	一六六
狸	一六六

多忙	一六
他人	一六
脱線	一六
騙ます	一六
騙まされる	一六
たまらない	一六
黙る(黙れ)	一六
玉	一六
卵	一六
為に	一六
駄目	一六
駄す	一六
足らぬ	一六
足る	一六
頼よる	一六
随落	一六
誰	一六
達磨	一六

タワァー	一六
戯れる	一六
短気	一六
団子	一六
短縮	一六
誕生日	一六
箆筒	一六
断然	一六
だんだんに	一六
談判	一六
談話	一六
反物	一六
鍛錬	一六
手	
血	一六
智恵	一六
遅延	一六

岸頭	一六九
地下鉄	一六九
近い	一六九
誓い	一六九
違う	一六九
力落し	一七〇
地球	一七〇
遅刻	一七〇
知事	一七〇
恥辱	一七〇
乳	一七〇
父母	一七〇
実験	一七〇
茶	一七〇
茶色	一七〇
注意	一七〇
中学校	一七〇
仲介	一七一

忠告	一七一
仲裁	一七一
中止	一七一
忠実	一七一
中斷	一七一
中途	一七一
註文	一七一
蝶	一七一
調印	一七一
調合	一七一
彫刻	一七一
弔辞	一七一
長所	一七一
頂度	一七一
長女	一七一
ちよっと	一七二
帳場	一七二
長男	一七二

帳面	一七三
著名	一七三
地理	一七三
沈黙	一七三
ツ	
遂に	一七三
就いて	一七三
通学	一七三
通勤	一七三
通訳	一七三
通用	一七三
杖	一七三
使う	一七三
使い	一七三
疲れる	一七三
使い果たす	一七三
月	一七三

机	一七四
造る	一七四
繕う	一七四
漬物	一七四
都合	一七四
拙い	一七四
鼓	一七四
綴方	一七四
土	一七四
恙がない	一七四
堤	一七五
常に	一七五
燕	一七五
妻	一七五
爪弾じき	一七五
つまらない	一七五
罪	一七五
詰襟服	一七五

冷たい	一六
露	一六
梅雨	一六
強い	一六
貫く	一六
釣	一六
均合う	一六
釣鐘	一六
鶴	一六
鸚	一六
テ		
出会う	一七
手洗い (トイレット)	一七
定価	一七
庭園	一七
庭球	一七
低級	一七

抵抗	一七
亭主	一七
体裁	一七
訂正 (添削)	一七
邸宅	一七
町重	一七
定例	一七
手落ち	一七
手を引く	一七
手紙	一七
手柄	一七
敵	一七
適中	一七
適度	一七
適當 (適する)	一七
手頃	一七
出来ない	一七
出来る	一七

手数	一七
出鱈目	一七
手伝い	一七
徹夜	一七
鉄砲	一七
手筈	一七
手本	一七
手毬	一七
手まね	一七
寺	一七
照らす	一七
テレビ	一七
田圃	一七
天気	一七
電気	一七
天狗	一七
天才	一七
天災	一七

電車	一八
電信(電報)	一八
伝染	一八
転宅	一八
転灯	一八
転覆	一八
転落	一八
展览会	一八
電話	一八

ト

と云う(とのこと)(——だそうな)	一八
戸(扉)	一八
塔	一八
遠い	一八
とうとう	一八
問う	一八
銅	一八

灯台	盗賊	銅像	同窓	当然	当選	同情	投手	党主	同時	同志	倒産	動作	峠	討議	統一	同意	答案
.....
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三

独身	読書	得意	毒	得する	徳	解く	時々	時々	時(時の流れ)	統領	同盟	透明	逃亡	動物	豆腐	当番	同輩(同僚)	盗難
.....
一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三	一八三

特別(特に).....	一八三
独立.....	一八三
時計.....	一八三
何処.....	一八四
所.....	一八四
登山.....	一八四
年.....	一八四
齡.....	一八五
齡寄り.....	一八五
どちら.....	一八五
土地.....	一八五
突然.....	一八五
とても.....	一八五
整う.....	一八五
とに角.....	一八五
賭博.....	一八五
寫.....	一八五
止まる.....	一八五

止める.....	一八五
友.....	一八六
供する.....	一八六
伴に行く.....	一八六
土曜日.....	一八六
当惑.....	一八六
虎.....	一八六
鳥居.....	一八六
鳥.....	一八六
取替える.....	一八六
取りきめ.....	一八六
取引.....	一八六
度量.....	一八六
徒勞.....	一八七
努力.....	一八七
泥棒.....	一八七
とんぼ.....	一八七
トンネル.....	一八七

名(名前)	一七〇
ない	一七〇
内密	一七〇
尚	一七〇
治る	一七〇
長い	一七〇
仲直り	一七〇
仲間	一七〇
仲悪い	一七〇
仲よし	一七〇
なくなる	一七〇
仲人	一七〇
渚	一七〇
泣く	一七〇
情	一七〇
情ない	一七〇

馴染み	一八八
何故	一八八
名高い	一八八
夏	一八八
捺印	一八八
なつかしい	一八八
納得する	一八八
納得いかない	一八八
何に	一八八
何程	一八八
生意気	一八九
波	一八九
涙	一八九
滑めらか	一八九
悩む	一八九
習う	一八九
激う	一八九
習わし	一八九

成る	一六九
竝らぶ	一六九
成程	一六九
難解	一八九
難儀	一八九
何度(何遍)	一八九
何月何日	一八九
二	
似合う	一七〇
賑やか	一七〇
憎む	一七〇
肉身	一七〇
逃げる	一七〇
虹	一七〇
賈物	一七〇
日限	一七〇
日常	一七〇

日没	一九一
日曜	一九一
日光	一九一
日当	一九一
二倍	一九一
二枚舌	一九一
荷物	一九一
入学	一九一
入費	一九一
似る	一九一
二墨手	一九一
庭	一九一
鶏	一九一
俄かに	一九一
認可	一九一
人氣	一九一
人間	一九一
人情	一九一

任務……………一九三

又

縫う……………一九三

盗人……………一九三

盗む……………一九三

主……………一九三

沼……………一九三

塗る……………一九三

ネ

値上げ……………一九三

値打ち……………一九三

願う……………一九三

猫……………一九三

ねずみ……………一九三

妬む……………一九三

値段……………一九三

熱……………一九三

熱心……………一九三

眠い……………一九三

眠る……………一九三

年賀……………一九三

年賀状……………一九三

年忌……………一九三

年中……………一九三

ノ

農業……………一九三

農夫……………一九三

ノート……………一九三

能力……………一九三

のがれる……………一九三

鋸……………一九三

残り……………一九三

除く……………一九三

後程……………一九三

馬鹿	羽織	敗北	売春婦	ハイカラ	パイオリン	配達	排斥	俳優	葉	ハ	暢気 <small>わんぱく</small>	逆せる	野原	延ばす(延びる)	長閑	——ので——
.....
一五五	一五五	一五五	一五五	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四	一五四

初の(初めに)	梯子	恥(恥じる)	橋	破産	鉄	箱	励む	化物	博覧会	白米	薄情	爆撃	博士	秤	袴	墓	葉書
.....
一七〇	一七〇	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九	一六九

針	林	晴れ	涙辺	省く	話	花	鳩	はっさり	罰金	罰	働く	畑	旗	はずれる	恥かしい	走る	始める
一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九

ピアノ	悲哀	火	日	七	叛乱	判明	煩悶	半分	犯人	反省	半身不随	判事	番号	反抗	叛逆	春
一九	一九	一九	一九		一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九	一九

冷える	一九八
光り(光る)	一九八
悲観	一九九
批較	一九九
ピール	一九九
悲運	一九九
ひがむ	一九九
引受ける	一九九
引算	一九九
卑怯	一九九
日暮	一九九
否決	一九九
飛行機	二〇〇
久しい	二〇〇
密かに	二〇〇
ひたすら	二〇〇
美談	二〇〇
筆談	二〇〇

人(人人)	二〇〇
ひどい	二〇〇
独り	二〇〇
ひねくれる	二〇〇
日延べ	二〇〇
必要	二〇〇
等しい	二〇〇
秘密	二〇〇
暇	二〇〇
病氣	二〇〇
病院	二〇〇
聞く	二〇〇
昼	二〇〇
日和	二〇〇
平等	二〇〇
貧苦	二〇〇

フ

不安	三〇二
不運	三〇一
笛	三〇一
風習	三〇一
夫婦	三〇一
風船	三〇三
部下	三〇三
深い	三〇三
不快	三〇三
不可能	三〇三
不機嫌	三〇三
福祉協会	三〇三
復讐	三〇三
不景気	三〇三
不潔	三〇三
不幸	三〇一
富豪	三〇一
不在	三〇一

不作法	三〇一
無事	三〇一
武士	三〇一
不自由	三〇一
不信	三〇一
無精	三〇一
不正	三〇一
防せぐ	三〇一
不相応	三〇一
不正直	三〇一
不思議	三〇一
不足	三〇一
普通	三〇一
普通人	三〇一
仏教	三〇一
ぶどう	三〇一
ふと	三〇一
布団	三〇一

不似合	三〇三
舟	三〇三
吹雪	三〇四
不満	三〇四
不名誉	三〇四
冬	三〇四
不用	三〇四
舞踊	三〇四
無頼漢	三〇四
不利益	三〇四
不良	三〇四
風呂	三〇四
不和	三〇四
憤慨	三〇四
文化(文明)	三〇四
文学	三〇四
紛失	三〇四
分數	三〇四

分配	一〇四
分類	一〇五
閉会	一〇五
平気	一〇五
平均	一〇五
塀	一〇五
平靜	一〇五
兵士	一〇五
平和	一〇五
平凡	一〇五
下手	一〇五
へっちゃら	一〇五
蛇	一〇六
部屋	一〇六
減る	一〇六
勉強	一〇六

偏屈……………二〇六

弁解……………二〇六

弁護する……………二〇六

弁護士……………二〇六

返事……………二〇六

便所……………二〇六

便利……………二〇六

ホ

ボート……………二〇六

ボーイスカウト……………二〇六

貿易……………二〇六

報恩……………二〇六

妨害……………二〇六

忘却……………二〇七

棒給……………二〇七

帽子……………二〇七

帽章……………二〇七

寶石……………二〇七

放送……………二〇七

忘年会……………二〇七

方法……………二〇七

報復……………二〇七

法律……………二〇七

亡霊……………二〇七

帆かけ船……………二〇七

朗らか……………二〇七

牧師……………二〇七

誇る……………二〇七

星……………二〇七

捕手……………二〇七

補助……………二〇八

螢……………二〇八

没落……………二〇八

仏……………二〇八

殆んど……………二〇八

参る	毎日	毎度	マ	ほんとう	凡人	本家	本気	本	亡ろぶ	惚れる	捕虜	ほら吹く	保養	ほほ	骨折り	焔
.....
三〇元	三〇元	三〇元		三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元	三〇元

真先き	末期	松	待つ	間違い	町(街)	まだ	亦	又	貧しい	益々	麻雀	真面目	優さる	真心(誠)	孫	負ける	任かす
.....
三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三二	三〇元	三〇元	三〇元

真直ぐ	三二
全く	三一
松茸	三三
まで	三三
的 <small>まじ</small>	三三
惑う	三三
免る	三三
真似	三三
学ぶ	三三
招く	三三
豆	三三
迷う	三三
稀れ	三三
万一	三三
満足	三三
慢心	三三
万年ペン	三三
満腹	三三

身内	三三
味方	三三
見切る	三三
見事	三三
未婚	三三
湖	三三
見知らぬ人	三三
水	三三
店	三三
未成年	三三
乱れる	三三
道	三三
未知	三三
道程	三三
皆	三三
孤児	三四

港	二四
見習	二四
見張り	二四
未滴	二四
土産	二四
身寄り	二四
明日	二四
未来(今後、以後)	二四
ミルク	二四
未練	二五

ム

無益(無駄)	二五
無学	二五
昔	二五
麦	二五
昔馴染	二五
報いる	二五

無効	二五
無罪	二五
虫	二五
嫉邪気	二五
矛盾	二五
無情	二五
息子	二五
娘	二五
無雑作	二五
無断	二五
無智	二五
無茶	二五
むつかしい	二五
無念	二五
無能	二五
無用	二五
村	二五
紫	二五

無理	二六
無理やり	二六
無論	二六
姪	二六
名士	二六
名所	二六
迷信	二六
冥土	二六
命日	二六
明白	二六
盟約	二六
名目	二六
名譽	二六
命令	二六
迷惑	二六
目方	二六

妾	二六
盲	二六
目覚め	二六
目下	二六
召使	二六
珍らしい	二七
目出度	二七
目上	二七
眩まい	二七
面会	二七
免職	二七
免除	二七
面識	二七
面倒	二七
面目	二七
儲ける	二七

モ

申訳	三六
燃える	三六
もう一度	三六
目的	三六
木曜日(木)	三六
模倣	三六
若しも	三六
悶える	三六
餅	三六
用いる	三六
勿論	三六
勿体ない	三六
最も	三六
もっとも(真)	三六
元	三六
専ら	三六
物語	三六
桃	三六

紅葉	三九
木綿	三九
貰う	三九
森	三九
漏れる	三九
門	三九
問題	三九
ヤ	
やがて	三九
野球	三九
役	三九
役員	三九
妬く	三九
厄介	三九
役者	三九
役所	三九
約束	三九

役目	三九
野心	二九
優しい	三九
安い	二九
易い	三九
休み	三〇
家賃	三〇
やっと	三〇
やつれる	三〇
宿替	三〇
宿屋	三〇
柳	三〇
野蛮	三〇
山	三〇
病	三〇
疼しい	三〇
開取引	三〇
やめる	三〇

やりくり	三〇
やれやれ	三〇
やわらかい	三〇
やんちゃ	三〇
ユ	
遺言	三一
夕方	三一
結納	三一
憂鬱	三一
有益	三一
遊郎	三一
勇気	三一
夕立	三一
輸出人	三一
遊蕩	三一
邸宅	三一
猶予	三一

有益	三三
優劣	三三
故に	三三
所以	三三
愉快	三三
雪 <small>ユキ</small>	三三
強請 <small>ヤク</small> る	三三
護る	三三
許す	三三
夢	三三

三

用心	三三
様子	三三
幼稚園	三三
養父母	三三
洋風	三三
ような	三三
予科	三三
予期	三三
預金	三三
翌日、月、年	三三
浴場	三三
慾心	三三
余計	三三
予算	三三
善し(良し)	三三
予習	三三
寄算	三三
予想	三三

予定	三三三
世の中	三三三
予報	三三三
読む	三三三
夜	三三三

ラ

雷雨	三三四
ライオン	三三四
来月	三三四
ライト(右翼手)	三三四
来年	三三四
楽	三三四
楽観	三三四
落第	三三四
落胆	三三四
落雷	三三四
ラジオ	三三四

リ

羅針盤	三三四
乱心	三三四
溢費	三三五
利益	三三五
理解	三三五
理解に苦しむ	三三五
利害	三三五
離婚	三三五
理屈	三三五
陸軍	三三五
陸地	三三五
力量	三三五
利己	三三五
利巧	三三五
理想	三三五
利子	三三五

律義	三三
立身出世	三五
立派	三五
立腹	三五
理由	三五
流行	三五
旅行	三六
了解	三六
漁師	三六
良心	三六
両方	三六
料理	三六
旅館	三六
旅費	三六
理論	三六
隣家	三六
悋気	三六
臨終	三六

倫理	三六
ル	
類	三六
ルール	三六
留守	三六
ルンペン	三六
レ	
例外	三七
礼儀	三七
冷酷	三七
例年	三七
礼拝	三七
零落	三七
伶俐	三七
歴史	三七
レフト(左翼手)	三七

恋愛……………三七
 連関……………三七
 連合……………三七
 連日……………三七
 連盟……………三七

口

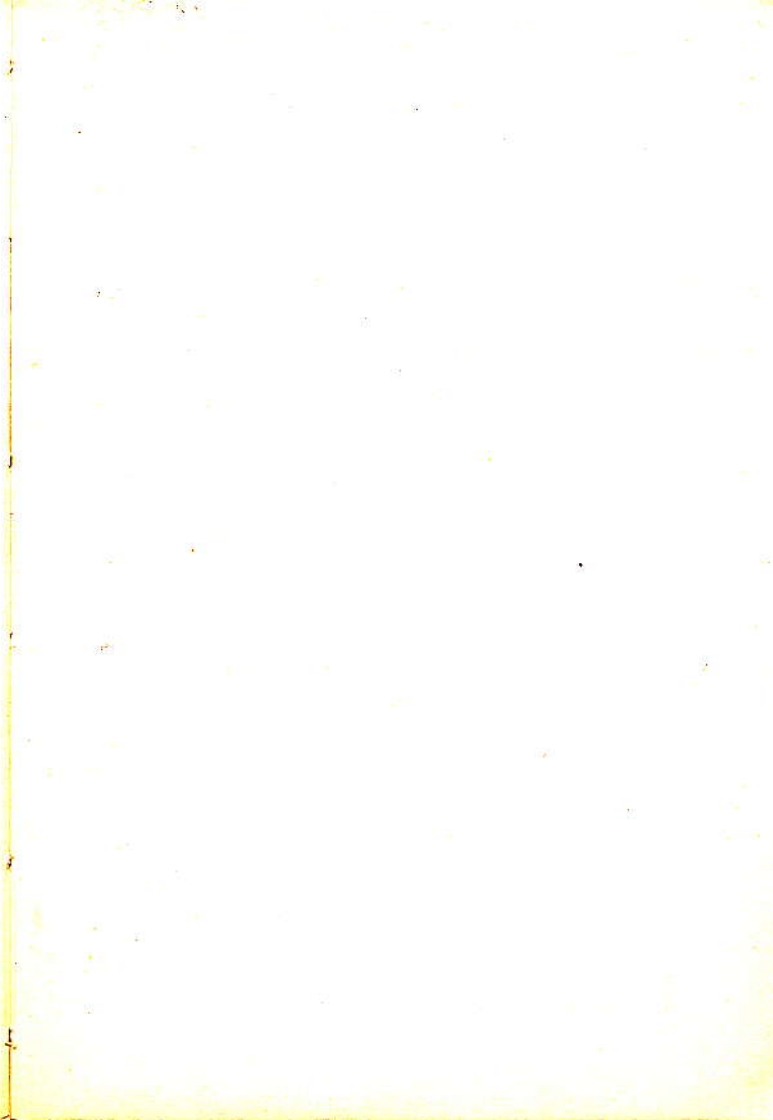
興啞……………三七
 労働組合……………三七
 老人……………三七
 浪人……………三八
 労力……………三八
 露店……………三八
 ロハ……………三八
 論文……………三八
 ワ
 狼せつなこと……………三八

賄賂……………三八
 和解……………三八
 若い……………三八
 我儘……………三八
 解らない……………三八
 解る……………三八
 訳……………三八
 分ける……………三八
 技……………三八
 災……………三九
 僅か……………三九
 忘れる……………三九
 和製……………三九
 綿……………三九
 詫びる……………三九
 和服……………三九
 笑う……………三九
 割算……………三九

割引	三九
悪い	三九
悪るかった	三九
悪賢い	三九
悪口	三九
悪るさ	三九
悪者	三九
数詞	三〇

本

文



愛 愛する 掌を下に向けてやや彎曲させた左手の手甲の上を右手掌で撫でまわす。子供の頭を愛撫する身振。

相変わらず 過去—同じ—同じ—同じ。過去を表わした手まね（右手掌を右肩越しに後方へ押しやる）から、その手の親指と人差指の指頭をつけ合わせては離し、つけ合わせては離しながら、手を前方へまっすぐに移動させて行く。親指と人差指の指頭をつけ合わせるのには「同じ」の意味。すなわち過去から同じ同じとつまり変わらぬこと。

挨拶 指頭を上にした両手の人差指を前対立させてから、両手をおじぎするように屈める。

愛人 思い忍ぶ 男性（或は女性）

愛情 (イ)愛—心。愛の手まねをして、右の人差指にて腹(心)を指示する。(ロ)愛—心—優しい。「優しい」は「やわらかい」の手まね。「やわらかい」は空気の少しぬけたフワフワしたゴムマリを片手「親指と他の四指で」持つ模倣身振り。

間柄 親指と人差指とで輪をつくったのを両手を（他の三指は伸ばしたまま）、鎖形に（遊び道具の智恵の輪のように）つなぎ合わせる。関連を意味する。すなわち人と人との関係、間柄である。

曖昧 五指の指頭を上にしたし掌を内側にした手の中指の指頭で鼻頭を叩くようにする。更に小首を傾げるもよい。

会う 逢う 指頭を上にした両手の人差指を左右から近づけて、胸の前辺りで合わせる。二人の音が出会う様。

相手 指頭を上にした両手の親指、右手

の方は前にさし出し、左手の方を胸前近くに
して、互いに対立させる。前にさした親指は
相手を意味する。

青 やや屈めた中指と人差指の指頭で舌の
上を掻くようにする。

赤 人差指を横にして、口唇の下を軽くこ
する。口唇の赤さを表わしたものを。

赤子（赤ちゃん） 五指の指頭を上にな
し、掌を前に向けた両手を肩の辺りに挙げ、左
右に振る。

崇める 親指の指頭を上になし、右手を、
左手の掌の上に載せ、目の上辺りまでさし上
げる。

明るい 指頭を上にして掌を前に向けた両
手を顔の前で合わせて、それを左右に勢よく
離す。「昼」の手まねと同じ。閉ざされた闇
が明け放れる感じを表わしたものを。

秋（涼しい） 軽く握った拳を前にさし出

した両手の肘を両腹脇にぴったりとつけ、全
身をこまかく身ぶるいさせる、肌寒さに身ぶ
るいすること。

商い 商う 親指と人差指で（他の三指は
伸ばしたまま）輪（金銭）をつくった左右両
手を胸の前で上下して、同時に互い違いに水
平に回転させる。

明らか 掌を内側に指頭を上になしして五指
をびんと伸ばした両手を胸の前で、僅かな間
隔をもってならべて、そのまま、右手を前へ



押し出し、左手
を内側に押し返
す。両手が前と
内側に明確に分
け隔てられた意
味を示している。
「はっきり」と
もなる。

諦める 「かまわない」の手まねをして(すなわち小指の指頭を下口唇を二三度叩く)次に五指の指頭を上になし掌を右向けにした右手を左胸上につけ、それをそのまま斜めに降ろして行く。胸にたたみ置くと云う心得。

悪(悪い) 指頭を上になした人差指を鼻頭の上を右から左へこすって通過させる。「善い」と云う手まねが鼻の上の掌を持って行って「天狗」を表わすのに対して、「悪い」の手まねはその「天狗鼻」を切る意味である。

飽く 親指の指頭を上になした手を胸にびったりつけ、折り曲げた四指を軸にして親指を下へ廻して降す。胸一杯つまっていやになつたと云う表情。

厭く 掌を胸にびったりつけてから、前へ弾ね返らせる。いやになつて胸が悪いと云う表情。

悪意 親指の指頭を上になした右の手を腹の右脇につけ、親指を曲げ伸ばしながら、腹の上を左へ移動させる。腹の中(心)がねじけている意地悪すなわち悪意である。

悪口 悪の手まねをして、指頭を上になした人差指を口唇にあてがってから、前へまっすぐにさし出す。言葉の口から吐き出す。すなわち「云う」の手まねである。

悪徳 道徳(修身、倫理)——はずれる(適しない)

悪人 悪意——人々(或は単数では男性、又は女性)

明ける 「明るい」と同じ手まね。

開ける 五指の指頭を上になし、掌を前向けた両手を左右にならべ合わせ(両手の親指ふつけ合わす)て、それを開き戸を開けるように、(両手の掌をクルリと内側に反転させて右に離して行く)。

あこがれる 思い忍ぶ（思い焦れる）と同じ手まね。

朝 寝るの身振から、「起きる」と頭をもたげる。

勢く 嘘一云う。

浅間しい 「悲しい」「なさけない」と同じ手まね。

味 「うまい」の手まねの例の二。

明日 「一つ一未来」を見よ。

悪しからず 悪い一ごめんなさい。「悪」の手まねをして、片手にて拜みあやまる身振りをす。

足駄 掌を下向けにした左手を足駄の台として、右手を足駄の南のつもりで、左掌の下に横直角に前そして後につける。

預かる 右手に物を受け取る動作（さし出した手を胸許に返す）をして、その掌を（五指をやや曲げて）右肩に被せるように置く。

右手掌を右肩に被せるように置くことを「負う」と云うことで、「責任を負う」ことになる。手もとに受け取って置いて責任を持つとのこと。

預ける 右手にて物を手渡す動作（胸もとから手を前へさし出す）をして、その掌を（五手を彎曲して）右肩に被せるように一旦置いてから、すぐにその手を前へさし出す。一旦肩に置いた手を前へさし出すのは、責任を渡す、即ち責任を先方に持って貰うと云うこと。手渡した物に責任をもって置いて貰うとのこと。

焦せる 下腹部の位置に、掌を上向け五指の指頭を左にさした右手。これも掌を上向け五指の指頭を右にさした左手。この両手を交互に上下する運動。心落ちつかぬ様。

遊ぶ 両手のそれぞれ指頭を上にした人差指を顔の両側にして、交互に前後に運動さ

せる。幼児が玩具を振って遊ぶことから来た手まねか。

与える 掌を上向けた両手を重ねて 前にさし出す。

あたりまえ 右手の人差指と中指をかぎに曲げて、左手の掌の上を一二度叩く。これは「規則」「決っている」と云う手まねにもなる。

暖いぬか 「春」と同じ手まね。

新しい 五指の指頭を集めて、眼の前に向けてと同時に、ぱっと五指を開く。「眼醒めるばかりの意。「珍らしい」の手まねともなる。次に「美しい」の手まねをつけ加える。(五指の指頭を上にし、掌を内側にした手で、鼻頭の上をさっと横に撫る)

暑い 「夏」と同じ手まね。

熱い 湯に手を手を入れて、或は物に手を触れて、その熱さに驚いてその手で耳朶をつ

まむ表情と身振りのそま。

あつかましい 親指と人差指でつくった輪を頬に直角にあてがう(親指の方を頬につける)と同時に弾くように人差指の指頭を前へ離す。面の皮の厚いのを表わしたもの。

幹旋する 指頭を上にした右親指を口許にして、それを右へまた口許へと二度ばかり往復運動をさせる。両者へ口を利くと云うこと。「通訳」「紹介」と云う手まねにもなる。

天晴れ 腕前——感心。

集める・集まる 五指の指頭を上にし、掌を互いに向かい合うた両手。五指を少しまゝに屈めて、左右から接近させて、胸のちようど前で合わせる。両手の五指を人々或は多くの物として、一カ所に集まる様。「会」

「会合」と云う手まねにもなる。
あてはずれ 五指の指頭を上にし、掌を

内側にした左手の中指の指頭で額を突き上げる。「頭打ち」のこと。即ちあてはずれ。

あてはまる 指頭を右にさし、掌を上向けた左の人差指の上第一節の上に指頭を前方にさし掌を下向けた右手の人差指の第一節を直角に十形に組む。嵌木組工の二つの木切れがちょうどあてはまる様。

あてられる 五指をまるめに彎曲した手の指頭を額の上につける。夫婦または恋人同志の仲のよいところを見せつけられて、「ダァー」と云って額に手をやるあれ。

後あとで 後から 事、動作の完了——未来。

右の掌を左の掌の上へ叩き降ろす。動作などが完了したこと。次に「未来」の手まね（右の掌を前へ押し出す）

穴 親指と人差指で輪（穴）をつくり（他の三指は伸ばしたままでよし）、その輪の中を口で吹く。穴の中のうつろさを見せる。

侮あはれる 崇めるとは反対に、指頭を上になした左手の親指を右手の掌で下へ圧えつける。

兄 肉親を意味する前提の手まね（「父母」の項を見よ）があつて、男性を表わす中指を稍々高目に（父母の場合ほど高くない）さし上げる。

兄嫁 兄—妻。兄（右の中指）に左手の中指を添わせる。

姉 兄の場合と同じ要領。肉親の手まねがあつて、女性を表わす薬指を稍々高目にする。

姉婿 姉——夫。「兄嫁」の要領。

暴あはれる 悪るさ——粗暴な動作。「悪るさ」の手まねをして、粗暴な動作、即ち両腕の肘を左右に張って、両手を握り拳にして、交互に前へつき出しては手前へ引く運動。

危あやない 五指を少し彎曲させてその指頭を胸の上に置く。この時、心持ち少し胸を屈め

るようにする。「不安」「心配」にも通じる手まね。胸騒ぎする、胸を痛めると云う内部表現。

油（膏） 頭髮を撫で降して、その手の親指に他の四指の指頭をつけては離しする。ねばっこい油を扱う手の表情。

溢れる 五指の指頭を前方にさし、掌を右に向けた左手を少しまるく彎曲させて、池の堤か或は器のふちを形どり、それにかこまれるように五指の指頭を左にさし、掌を上向けた右手を水面として、それを上へふくれ上がらせ、堤（器）から溢れ出る描写身振。

あぶれる（仕事に） 頸を手で切るように打って、両腕をだらりと下げて、両手を交互にぶらぶらさせる。首を切られて、仕事なくぶらぶらしていること。ルンペン、失業者ともなる。

あべこべ 両手の拳の一方を前額部に、他

方を後頭につけ、頭の周囲にそって、ぐるりと両手の位置をかえる。帽子を「あべこべ」に被ったこと。

阿呆 五指の指頭を上にはさし、掌を左に向けた右手の親指の指頭を鼻頭の上につけたまま、他の四指を交互に左右にこまかく動かす。これはサーカスのピエロがよくするふざけた身振りで、阿呆（馬鹿）と云うより、人に「阿呆よ」とからかう場合に使う手まね。

尼 「僧侶」の手まねを女性で表わせばよい。

甘い 手についた砂糖をなめる模倣身振り。即ち舌を出して、その上へ掌を持って行きなめるようにする。「砂糖」の手まねに通じる。

余る 五指の指頭を前方にさし掌を右に向けた左手に向かって、五指の指頭を直角にさし、掌を内側にした右手を接近させて、左手

の上を越させる。左手に向かつて直角に右手が突き当って止まるのは、「終止」を意味するが、それを行き過ぎして、左手の上を越えさせるのは、即ち「余分」に出たことになる。

編物 両手の人差指を編物の針になぞらえて、毛糸を編む指先の運動。

飴 舌を口の中でねじらせて、片頬をふくらませて、人差指と親指で輪をつくり（他の三指は伸ばしたまま）その頬にぴったりとあてがう。頬ばって飴玉、その丸い飴玉が頬のこのところにあると云うこと。

雨 **雨降り** 頭部のやや上辺りから、指頭を下に垂らした両手を下へ降す運動を二三度くり返す。雨の降る様を両手の指で表わしたものである。

操る 操り人形の糸を持つ心得で、交互に上下に操る両手の運動。

怪しむ 五指の指頭を上にし、掌を左に向けた右手の人差指を口唇に十字にあてがうと同時に、他の四指を折り畳み、小首をかしげ考える表情。「不思議」の手まね更に五指の指頭を集めた手で空間に？を書く。

過ち 間違ひ——悪るかった（御免御免）
謝る 悪い——御免なさい。

嵐 風——雨

争う (1) 両手の人差指を剣になぞらえて、打ち合わせる指の運動。「剣撃」「戦争」「闘争」の手まねともなる。

(2) 両手の人差指を一文字形に横にして、互いに指頭の先を向かい合わせ、或る間隔を置いて交互に槍で突き合うような指の運動。「口論」「論争」「議論」の手まねともなる。

改まる **改める** 五指の指頭を前方にさし、掌を上に向けた左右両手を接近させて腕を

×字に交叉させる。右が左へ、左が右へと入れ替わる。即ち改まるのである。「変わる」

「交替」「交換」の手まねにもなる。

改めて 手についた砂を払い落すように両手の掌を互いに上下に叩きすり合わせる。「やり直し」の身振り。

凡ゆる いろいろ——凡て（一切、みんな）

在る 有る 右手の五指の指頭を上にし、掌を右前方斜めに向け、空間をおさえるようにさし出す。「そこに在る」と自然にさし出された手。運動競技で「セーフ」と片手をさし出すのと同じ要領。

○「山がある」山の手まねをしたその位置の空間をおさえるように掌をさし出す。

主^{かまじ} 男性（親指）を少し高い目にさし上げる。

有難う 左腕（下胸部）を右手拳で叩いてから、片手で拝む。お骨折り（お世話）有難

うのことだが、一般に「有難う」と礼を云うのに通じる。

有様 五指の指頭を上にし、掌を前向けた両手で前方の空間に或る映像（状態形象）を模索する身振り。

歩く 指頭を下に向けた人差指と中指を両脚になぞらえて、交互に動かして、足を運ぶ両指の模倣運動。

アルバム 写真—帳

合わせる 五指の指頭を集めた両手を右左から接近させて、互いの指頭を付け合わせる。二つの物を附着すること。

周章てる 「焦せる」と同じ手まね。

哀れ 「悲しい」と同じ手まね。

憫れむ 哀れ——愛する。

案じる 「危い」「不安」「心配」と同じ手まね。

安心 胸に掌をあてて下へ撫で降す。「胸

をなで降す」と云うこと。

安全 危くはない—大丈夫。

案内する 左の首を右手で持って右へ引く。手を引いて案内すること。

イ

医 右手で左手の脈をとる真似。

云い当てる 「考え」の手まねをしたその右の人差指を、左手の人差指と親指とで（他の三指は伸ばしたまま）つくった輪に当てる。考えが適中したこと。

云いつける 指頭を上にした人差指を口唇にあてがい、真直ぐに前へ勢よく出す。

「命令する」「命ずる」である。

醉い嫌 結婚—約束（男性—或は女性。）

云いふらす 五指を集めて指頭を前方に向けた両手を口許につけると同時に、口を開い

て両手の指を開きながら、左右斜めに離して行く。広く云い伝える。「放送」ともなる。

委員 親指と人差指でコの字形にして、その指頭を胸、乳の上辺りにつける。委員（役員）が胸に徽章をつけていること。

医院 医—建物（洋館）

云う 指頭を上にした人差指を口唇にあてがって、前へ軽く出す。

云うな 指頭を上にした人差指を、固く閉じた口唇におしつける。一般に誰れもがする身振り。

家 掌を「く」の字形に屈めた両手を向かい合わせて互いの中指の指頭をつけ合せて、家を形どる。指の部分は屋根、下の手甲は壁。

以下 例えば「四以下」とすると、「四」の数を表わしたままの左手の上に、右手の掌を載せ、下へ圧え降す。

烏賊 いか 掌を内側にして、五指の指頭を下方にさした手の甲を顎の下につけ、五指をぶらぶらさせる。烏賊の脚を表現したもの。

意外 「怪しむ」と同じ手まね。但し？を空間に書くのを省く。「不思議」の手まねにもなる。

以外 掌を前に向け、五指の指頭を左にさした右手、掌を内側にし五指の指頭を右にさした左手、両手を互いの手甲で背中合わせにしてから、右手を前方へさつと離す。両のものをはっきり切り離れた意味。「別」の手まねにもなる。

医学 医——学問。

怒る いかむ 憤る いまい 五指を彎曲した両手の指頭を腹部左右に接触させ、腹部の上を掻き廻すように運動させる。腹の中が掻き廻されるような心の状態、怒る心理を表わす。

遺憾 いかん 五指の指頭を上にし、掌を左に向

けた右手で右側の頬を打つばかりに、頬と手との間に僅かな隙をおいて、手を忙わしげに左右にこまかく運動させる。「ああ、しまった。残念」と思わず頬へ手をやって、気分のおさまらぬ状態を表わしたもの。

勢 握り拳にした手の腕の肘を、力こぶを見せるように縦に曲げる。「力」を表わしたもの。

生きる 拳にした両手の腕の肘を横に曲げて左右に張り出す。(「丈夫」の手まね)。

生き返える 合掌した両手をそのまま横たえて(死ぬ手まね)から、すぐにもとの手の姿態(合掌)に戻らせて、「生きる」手まをする。

行く い 行け い 指頭を上にした人差指を前方、或は左右の何れかの方向に出す(行く)。(向) 下に垂らした手を、前方、或は左右の何れかの方向に出す。

戦いくさ イ「争う」の(イ)と同じ。口人差指一指だけでなく、戦う兵士の復数を意味させるため、五指を多くの剣になぞらえてかち合わせる。

いくつ いくら 親指から順次に五指を折って行く。

○「値代はいくらですか」。親指と人差指で輪はつくり(お金)、次に親指から順次に五指を折って行く。

池 掌を上に向け、五指の指頭を左にさした右手(池の水面)を囲むように、五指の指頭を前方にさし、掌を右に向けた左手を彎曲して(池の堤)右手(水面)の五指をかすかに波打たせる。

いけない 指頭を上にした右手の人差指を、右から左へ鼻の上をさっと切るようにする。「よい」は鼻高を表わすに対して、鼻高を切って表わす心得。

意見 人差指の指頭を、こめかみの上辺りに突き刺すようにつける。少し頭をかしげるがよい。頭の中に考えがあること、「考え」「思う」ともなる。

以後 「後ごで」と同じ手まね。

遺骨 白い布で(人差指で、齒を指し「白」を表わし)首にかけ、胸の前に捧げる身振り。

勇ましい 両肘を張り、両手を拳にして下に向け、胸の前で、交互に前方に往復させる。活発に動作する姿を見せたもので、「活躍」ともなる。

意志 人差指で腹部(心)をさしてから、その手の指頭を前方直角にさして突き進ませる。心の赴くところ、ひたりに進むとの意味。

意地 人差指で腹部(心)をさして、その位置でその手を拳に力強く握りしめる。「心」

をしっかり固く把握して動じない意味。

石 (1) 掌を上向けた手を拳に握りしめて、その手首の辺りを口で噛む真似をする。歯におえない石の固さを表現したもの。「固い」の手まねにもなる。(2) 左手の五指の指頭を前方にさし、右に向けた掌を、右手の五指の指頭で打ちつける。火打石の石を打ち合わせる動作により石を表わしたものの。

医者 医—男性(女医の場合女性)

以上 (1)「六以上」とするには、左手で「六」の数を表わしたので、右手の掌に載せ上へさし上げる。(2)「それまで」の意味の「以上」は「終わり」と同じ手まね。

偉人 偉い—名高い—男性(或は女性)

椅子 椅子 左手の人差指と中指を椅子の腰掛け台として、その上に、右手の人差指と中指を椅子にかける人の両脚として、曲げて載せる。以前 (1) 過去と同じ手まね。(2) 「その

以前」とする場合、五指の指頭を前方にさし、掌を右向けた左手に、五指の指頭を左にさし、掌を上向けた右手を接近させて、その五指を少し曲げて右へ引き返す。左手を「その」「その時」の線として右手を右へ引き返すのは、「その前」「それまでの時」を表わしたものの。

忙しい 「急^{いそ}げる」「周章^{しゅうしょう}てる」と同じ。

しかし、表情に相違がある筈。

急ぐ 「忙しい」と同じ。これも、その意味に添う表情を持つ。

悪戯^{いたづら} 「悪^{わる}さ」「やんちゃ」と同じ手まね

頂く 両手を重ね合わせて額へ頂く。貰う

受ける身振り。

痛い 痛む 掌を上向け、五指を彎曲しては伸ばす運動を二三度繰り返す。「わくわく」と痛む感覚を表現したもの。片手にても、両手を同時に使ってもよい。

手

悼む 哀れ（悲しい）——云う。
毒 五指を集めた指頭で、鼻頭をつつく。

赤い鼻をした人から想像した毒。

市場 高い店—店—店。「店」の手まね

を初めに右寄りで度わし、次に前に、そして左寄りと三度ばかり表わす。店の並んだ様。

一日（終日） 人差指と親指をまるく屈めて半円にした両手を間隔を置いて向い合わせで大きな一つの円（太陽）を形どり、それをそのままの姿態で右の腹の脇廻りから上へ弧を描いて胸の前を左へ移行させ、左の腹の脇廻りに落す。日出より日没までの太陽の移行。

一昼夜 一日（終日）の手まねで、左の腹の脇まで落した両手の運動を更に続けて下方へ弧を描いて右の腹の脇まで一周させる。太陽を地球が一周したこと、この他、「寝る一つ」と表わして一日（一昼夜）とするもよ

い。即ち腕を枕にして寝る身振をして「一」を表すればよい。

○三日四日と日数を表わすには、この様式で、夫々の数を表すればよい。

一任（委任） 左手の彎曲した五指の指頭を、右肩の上に被せるように置いて（責任）前へ五指を開いてさし出す。責任を先方に渡すの意味。

意地悪る 「悪意」と同じ手まね。

一曇手 掌を下向け五指の指頭を右にさした左手を胸の右脇前につけ、その手甲の上に五指の指頭を上になしし掌を左向けた右手の腕の肘を載せる。これは「司る」と云う手まねであるが、「一曇手」とするには、その姿態で右手の人差指一指だけを出して見せる。

いつ（何） 時間—いくつ。（何） 何月何日
いつも（常に） 「毎日」と同じ手まね
一切 「凡て」の同じ手まね。

一生 生まれる——としてから——死ぬ——まで
(終り)

一 緒 一 致 両手の指頭を上にかしたそれ



ぞれの人差指と親指の指頭を同時につけ合わす。二指を合わせるの、物の合致を示したものの。「同じ」の

手まねともなる。

一 生 懸 命 両手の五指の指頭を上にかした掌を平行に向かい合わせて、顔を両側で挟み、次に両手をそのまま前方へ真直ぐに出す。馬車馬の目かくしを表わしたものの。他を顧みもせず、ひたすらに進むの意味。

一 層 左手の人差指を胸の前に一の字に横たえてその下に、右手の人差指と親指でコの

字形にしたのを持って行き、次にコの字を一の字の上に置きかえる。更にその上に重ねるの意味で、つまり「一層」となる。

いとこ (従兄弟) 伯父 (叔父) V 息子 (娘)

伯父叔父 (伯母叔母) の手まねから、生れる

一 男性 (中指) 或は女性 (薬指)

一杯くった 掌を上向けて五指を指頭がその指のつけ根につく程に曲げた手を顎の下に直角に手首のところにつけてから、そのまま下に落す。顎がはずされたと云う身振り。



一 般 (1)「普通」

と同じ手まね。(2)

掌を下に向けた右手を左胸脇から前へ弧を描いて前へ。「みなさん」「御一同」と演説者がする

動作。

いつわる 「欺く」「嘘」と同じ手まね。

移転 胸の前に「家」を表わした両手をそのまま、左方、或は右方に移す。

井戸 左右の人差指と中指を組合わせて「井」形をつくる。

田舎 掌を下に向けた左右の手を前後にして、五指を屈めて、土を掘り返えす身振り。

○農業を表わす。

稲光 左右の人差指を指頭で山形に合わせ、それを左右に離して、稲妻の形を描く

犬 左右の親指の指頭を、左右のこめかみにつけ、他の四指を下に垂らして、こまかく動かす。犬の垂れた耳を表わしたもの。

猪 五指を彎曲した手の甲の方を鼻頭につけて、猪の突き出た鼻を表わし、次に牙を表わすつもりで、両手の曲げた人差指を口の両

側につける。

威張る 五指の指頭を集めて、鼻頭に持つて行き、鼻をつまみ伸ばす心持ちで、前方へ引き出す。鼻高を意味し、「自慢する」ともなる。次に胸を張り、両肘を左右に張る。昂然とした態。

訝^どかる 「怪しむ」と同じ手まね。

今 「現在」と同じ。

意味 握り拳にした左手の手首のちょうど下を、指頭を前方にさした右手の人差指を錐をもむようにして斜め下に突き降して行く。「意味」をほじくること。「研究」の手まねにもなる。

芋 五指をまるく彎曲した指頭を額の横に、次に頭の上にと置いて見せる。額や頭に出来た瘤をたとえて芋のでこぼこの形状を表わしたもの。

妹 肉親の前提手まねあって女性（葉指）

腹部前に下げる。

嫌いやや (4)「嫌いやらい」と同じ手まね。(4) 掌を胸にあてると直ぐに強く前方へ弾ね返らすように離す。「胸くそが悪い」の意味。

違約 左手の曲げた小指に、右手のこれも曲げた小指を下からかけて(約束)から、次に右手の小指をはずして下へ落とす。「約束を破る」のである。

卑いやしい 左の掌の上に、指頭を上にした右手の親指を載せて、そのまま両手を下へ下げる。身分の低いこと。

以来 として一から。「しして」は「何々して」「何々があつて」と動作、事の完了、即ち左手掌の上に右手掌を叩き降す。「から」は「時(時の流れ)」を見よ)

○「結婚来して以来」とするには、結婚して一時の流れ。

依頼 任かせる一お願い。任かせるは、一

任と同じ手まね。お願いは、左手の腕を右手の拳で叩いて、その五指を開いて拜む。

苛い立つ 「焦せる」「周章てる」と同じ手まねであるが、この場合両手の運動を一層激しく速やく。

入い目 掌を下向けて五指の指頭を右にした左手を地平線と見なして、右手の親指と人差指をまるく曲げて半輪を形どり、それを太陽として、左手の前すれすれに下へ落して行く。日没の光景。「夕方」の手まねにもなる

入用 必要一金。

いろいろ 胸の前で指頭を左にした親指と人差指をコの字形に開いた右手掌を下に向けて、上向きに反転させては下に向ける運動を繰り返しながら肘を右へ引いて行く。人差指と親指と交互に「これも」「それも」と指示した身振りから、集約された手まねと見てよい。この手まねは「事」「物」の意味にも

転化する。

色 赤―青―いろいろ。「赤や青など」の意味である。

居る 握り拳にした両手をそれぞれ左右頭の両側に掲げてから、両腕の肘を下へ引き降ろす。どっしりと居坐る身振り。

祝う めでたい―云う。

云われる 「云う」の受身。五指の指頭を集め合わせたのを、自分の顔に向けて、ぱつと五指を開く。先方の言葉が自分に向かって放ち送られたこと。

隠居 腹の前で掌を内側にした両手の五指を下に垂らしてから、次に胸もとに上へ引き寄せる（仕事事業から手を引く意味）。そしてその両手の掌を上向けて、両脚の上に載せる。何にもしない両手を膝に置いている姿。

印刷 五指の指頭を前方にさした左手の掌の上を右手の掌で前方に刷る。手刷り印刷の

動作。

印紙 人差指と中指の指頭を舌の上に持つて行き、唾をつける真似をして、次に左手の掌の上に右手の二指で印紙を貼りつける真似
淫売婦 片目で指頭を上にした中指と人指の間から（掌は前向き）覗き見る真似をして女性（小指）を差わす。店の格子の間から外を覗いて遊客を待つ娼婦。

印判 五指で印判を持つ態で、口もとに持つて行き、口の息で印判に残っている印肉を温める真似をして、左手の掌の上に印判を押す身振り。

ウ

飢える 五指の指頭を下方にさし掌を内側にした両手で腹を圧さえ、そのまま下へさすり降して行く。腹の皮が背につくばかりの空

腹の狀態

魚 五指の指頭を前方にさし、掌を左に向けた右手を魚の休として、その手をくねらしながら前方へ進ませ、魚の水中游泳を表現する。

受合う 責任を負う。五指を彎曲して掌を下に向けた右手を、右肩の上に被ぶせるように置く。「引受け」の手まねともなる。

兎 両の肘から手先までを兎の耳として、頭の両側に腕をあてがう。(肘が前方、手は後方)

牛 両手の人差指を牛の角形に曲げて、頭の両側に置く。

失う 握りしめた右手を腰の右脇につけて、五指を開いて下を落す。

ズボンのポケットから、物を落したと云うように。

嘘(うそ)(嘘言うそう)

「欺く」「いつわる」と同

じ。即ち、口の中で、舌をねじらせて、片頬をふくらませて、その頬を人差指の指頭で叩く。

歌 唄う 声が散るのを防せぐように、五指の指頭を上になしし掌を右に向けた左手を口の左脇にあてがい、右手指頭を上になしした人差指を口唇につけてから、その指を前方へリズムのつもりで上下に波を描きながら進ませる。

打合わせ 両手の指頭を上になしした親指を胸の前で対立させて、折り曲げた両手の四指の背を打ち合わせる。

顔を(親指と親指)をつき合わせて談合すること。「相談」「会議」の手まねともなる。

内側 左手の五指の指頭を右になしし掌を内側にして、右手の人差指で左手掌(内側)をさす。

團扇 前の空間に両手の人差指で一つの円を描いてから、右手で身体を煽ぐ身振り。

うっかり 五指の指頭を上にしし掌を内側にした右手を顔の前で右から左へさっと素早く通過させる。眼の前を速く通過したので、うっかり見なかったこと。

美しい 五指の指頭を上にしし掌を内側にした右手で鼻頭の上を右から左へさっと二、三度撫でる。鼻頭の滑めらかなことから、「美しさ」を暗示したもの。

写す (イ) カメラに写す。「カメラ」の手

まねで、レンズになぞらえた左手の前方少し離れたところから、五指の指頭を上にしし掌を前に向けた右手を、さながら、ものを吸い込むように五指の指頭を集め合わせながら左手の下に引き寄せる。前方の対象をレンズにおさめること。(ロ) 文章或は絵図を写す。左手の上に向けた掌の上に、掌を下に向け五指を

屈めた右手を、前方から引いて来て、五指の指頭をつける。前にあるものの物をそのまま紙(左手掌)に写し取る意味。

うっとり 「一杯くった」と同じ要領でする手まね。但し、この場の手の運動はスローです。

腕利き 拳にして手甲の方を上にした左手の腕に掌を下向けた右手を叩たき降す。「腕」そのものを指示強調した身振。

腕前 「腕利き」と同じ手まね。

うどん 掌を上向けて五指を少々屈めた左手をうどんの鉢として、右手の人差指と中指を二本の箸として、長いうどんを口にもって行く動作身振。

鰻 両手の掌を下に向けて五指の指頭を左右夫々の頬に直角にさし、中指の指頭を頬につける。それを鰻の耳として、軽く両手をそのまま上下に動かす。

自惚れ 「威張る」を参照。鼻高の手まねをする。

馬 五指の指頭を上になし掌を向い合せた両手の手首のところで頭の両側につけ、こまかく動かして馬の耳を表わす。

うまい うまい(美味)。

(一) 右手の五指の指頭を左になしして、上向けた掌で顎の上を拭うようにする。食べた物がうまいので、涎を拭うこと。(二) 手の甲を右に向けた右手拳で、顎の下をこする。この手まねは「味」と云う意味にもなる。

(三) うまい(上手)。「腕前」「上手」と同じ手まね。

うまいことをした 手甲を右に向けた右手の拳で、顎を下から一、二度打つ。

生れる 五指の指頭を前方になし掌を向い合せた両手を腹の夫々左右両脇につけてから、両手を斜め下方に突き出し降す。腹から

出る身振り。

海 小指の指頭を舌頭でなめる真似(塩からさ表わす)をして、五指の指頭を左になし掌を上向けた右手を海の水面を表わすつもりで、五指をこまかく波打たせながら、肘を右へ引いて行く。

産む 「生まれる」と同じ手まね。

梅 右手の指頭を左になした人差指と中指の二指を(掌を内側に)下顎に平行にあてがい、次にその二指の指頭をこめかみの上辺りにつける。指を口唇にあてがうのは「赤」を意味し、こめかみの上辺りにつけたのは、頭痛の時梅汁を頭にぬることから出来た手まねであろうか。

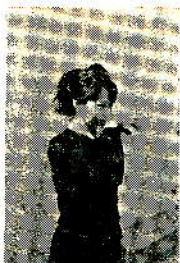
敲たたまう 左手の掌の上に、指頭を上になした親指の右手を載せて上へ頂くようにさし上げる。

裏 「内側」と同じ手まね。

裏返す 五指の指頭を左にさし掌を下向け
た右手を上向けに反転させる。

占い 右手で筮竹を持ったつもりで、左の
掌の上に置き、易者がするように筮竹を廻わ
す真似

恨らむ 「怒る」の手まねをして、拳を顔
の前に突き出す。



羨やましい(羨やむ) 五指の指頭を前方に

さし掌を下向け
たその手の手甲
の手首よりのと
ころを鼻頭につ
けたまま五指を
上下に動かす。

売る 五指の

指頭を右にさし掌を上に向けた左手の前方の
位置に、右手人差指と親指で(他の三指は
伸ばしたまま)輪をつくり(金銭)その輪

即ち金銭を胸もとに引き寄せると同時に左手
を前方へさし出す。左手は商品、右手の金
銭と交換に先方に渡す。即ち「売る」であ
る。

憂い 憂う 「案じる」と同じ手まね。

嬉れしい 五指の指頭を左にさし掌を内側
にした右手を胸にあて、上下に快よさそうに
さする。胸の中の晴々した状態を表わしたも
の。

うるたえる 「周章てる」と同じ手まね。

噂 五指の指頭を集め合わせた両手を或程
度の間隔を置いて向い合わせてものを放つよ
うに交互に両手の五指を開き合う運動を二度
ばかり繰返す。この指の運動は、言葉即ち話
を交わされる様を表わしたもの。

運動 (4) 体育を意味する運動

(一) 拳にした両手を前へ同時に突き出して
は、肘を胸の両脇に引く。即ち体操の真似。

体操、(1) 五指の指頭を下にさし掌を互に向
い合わせた両手を交互に前に出しては後方へ
引く。つまり「走る」時の両手の運動。「競
走」の意味。

(2) 政治運動とかその他活躍する意味の運
動。両の肘を左右に張って拳にした両手を交
互にて前に突き出しては引き寄せる。大いに
活動すると云う身振り。

運動会 運動(1)——会合
運命 「占い」と同じ手まね。

エ

絵 左手の五指の指頭を右にさし、上に向
けた掌をカンバスか両用紙として、右手の掌
を上に向け指頭を左にさした五指の背で絵具
を塗る仕草をする。

映画 キネマ 五指の指頭を左にさし掌を

内側にした右手、五指の指頭を右にさし掌を
内側にした左手、この両手をすれすれに合わ
せて交互に上下の運動させる。スクリーンに
映える光線の瞬きの感覚を表わしたもの。

影響 「関係」と同じ手まね。

営業 「商い」と同じ手まね。

衛生 左の掌を胸にあてがうばかりにし
て、その手甲の上を右手で愛撫する。身体を
大切に愛するの意味。

映写する 「写す」の(1)とは反対の手ま
ね。即ち、この場合、映写機のレンズになぞ
らえて五指の指頭を集め合わせて輪(穴)に
した左手の前に、これも五指の指頭を集め合
せた右手の手甲をつけ、レンズから光線を放
つように、右手の五指をばって開いて前へさ
し出す。

栄養 健康——適する——食べる——物(いろい
ろ)

眼 汽車（電車）― 停る― 所。五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を電車或は汽車になぞらえて、右から左へ上下に振動させながら移動させ程よき位置に停めて、「所」の手まね（掌を下に向け五指を彎曲した手を、停車したその位置の上に小さく円を描いて圧えるようにして置きとめる。）

枝 指頭を上にした両手の人差指をV字形に組み、そこから右手の人差指を斜め上方に伸びるように上げて行く。木の枝の形を模写したもの。

会得する 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を胸にあてがい、さっと腹まで撫で降す。腹にのみ込めたと云う意味。「理解する」「解った」の手まねともなる。

蝦 右手（手甲は上向け）の指頭を左にさした人差指と中指を曲げては伸ばししながら右へ移動させる。蝦の游泳の姿態を模写した

もの。

繪具 「色」と同じ手まね。

偉い 「腕利き」と同じ手まね。

○「偉い人」腕利き― 人（男性或は女性を表わした手を上へさし上げる）。

選らぶ (1) 両手の夫々の人差指と親指の指頭を合わせて、胸の前で物をつまみ上げるように、交互に上へ引ける。前にある数多い物の中から選んでこれと思う物をつまみ上げること。(2) 掌を内側に五指の指頭を上にした左手を胸の前にかざし、その上に、右手の人差指と指頭を合わせたのを持って行き、左手の五指の中の何れか一指を選び出すように、つまみ上げる身振。

宴会 会合― 酒盛。

延期 下にさした五指の指頭を集め合わせた両手を胸の前に間隔を置いて左右にならべて、そのまま、両手の位置を胸の左の方へ置

きかえる。「事」を先き（左方は未来）に置きかえること、即ち「延期する」「日延すべし」となる。

演劇 手甲を前に向けた左手の拳を頭の左横にかざし、右手も拳にして（手甲は上向け）その腕の肘を右へ張る。そして、左手の拳をくると廻わして手甲を後向けに、同時に右手の拳を前斜めに突き出す。歌舞伎俳優が舞台上で見得を切る形式から来た手まね。

演習 拳にした両手で胸板を同時に二三度打つ。相撲取りが兄弟子の胸板にぶつかって行く稽古を表わしたものか。或は、拳で胸板を打つのは、技術を「胸にしまい込む」と云う意味か。「稽古」「練習」と同じ。

援助 指頭を上にした親指の右手を、五指の指頭を上にしたし掌を前に向けた左手で前に押し出すような運動を二、三度繰返す。人（右手親指）を後押しをすること。「後援」



「応援」の手まねともなる。
演説 「政治」と同じ手まね。政治と演説の不可分な関係から、この両者を

同じ手まねで表わすものか。

縁談 結婚—相談。

延長 五指の指頭を集め合わせた両手を左右に互の指頭でつけ合わせて、紐をつまんで引き出し右手で紐を伸ばすような身振り。

煙突 五指をまるく屈めた両手を上下にして円筒の形をつくり、次に何れかの手を煙として一方の手（円筒様に五指を屈めたまま）下から中をくぐらせて上に出し、五指を開いて横へ流して行く。

遠足 五指の指頭を上にしたし掌を左に向け

た右手。これも五指の指頭を上になしし掌を左に向けた右手。この両手を前後にならべて、人が一列にならんだ形を表わし、そのまま前へ進ませる。人が列をつくって行進する様遠慮する。「案じる」「憂れい」と同じ手まね。但し、夫々の意味にそう表情で區別する。

鉛筆 右手の人差指と親指で、物を持つように指頭を合わせ、それを口もとに持って行き、次に下に戻して字を書く真似をする。鉛筆の先をなめることによって鉛筆を表わした手まね。

オ

甥 兄(弟) 姉(妹) V 息子。兄弟姉妹の何れかの手まねをして生れる男性(中指)

おいしい 「うまい」の(一)と同じ。

王 指頭を上にしたした親指の右手(男性)を左の掌の上に載せ、眼の上になしし上げる。

「天皇」「皇帝」ともなる。

応援 「援助」と同じ手まね。

大方 掌を下に向け五指の指頭を前方直角になしした両手を左右につけ合わせ(両手の親指がつく)てから、両手を左右に離して何れも下へ弧を描いて降して行き(自然に両手の掌が上向きになる)再び下で両手がつけ合う(両手の小指がつく)、以上は、「凡て」「一切」「みんな」の手まねになるが、「大方」とするには両手が下方で合わせる手前で少しの間隔を置いて停止させる。「凡て」では両の手で一つの完全な円を描くが「大方」は、一部が欠けた不完全な円となる。つまり、もう少しで完全な円となる即ち凡てでなく「大方」なのである。

扇 五指の指頭を上になしし掌を内側にした

左手。これも五指の指頭を上にしし掌を前向けた右手。この両手を掌でぴったりつけ合せてから、互の手指を軸にして、ぴったりつけたまま扇を開くように右手を左へ、左手を右へ傾ける。次に右手で扇を持つ姿態で煽ぐ身振り。

大袈裟 五指の指頭を右にしし掌を下に向けた左手の手指の下を、掌を前に向け五指の指頭を集め合わせた手をくぐらせて前にさし出すと同時に五指を大きくひろげて開く。

右手を下から出して大きくひろげて見せるのは——大きく見せる——即ち「大袈裟にする」のである。

狼 五指の指頭を前方にさし掌を下に向けた右手の手甲（手首寄り）を口もとにつけると、そのまま五指を斜め上に向け、ひらひらと動かす。飢えた狼のあえぐ舌を表わす。

大勢 多い 掌を内側に五指の指頭を上

にした両手をそれぞれ左右胸の前にして、五指を前後にいそがしく動かしながら両手を引き寄せる。両手の五指によって数を意味し、せわしげに五指を動かして引き寄せて、応接にいとまなしと云うほどの「多敷」を表わしたものと思えばよい。「多い」「沢山」の手まねともなる。

皇子（王子） 左手の掌の上に指頭を上にした中指（男性）を載せ上へさし上げる（王、天皇と同じ要領）



応諾 解った

（「会得」——引受ける）

横着 五指の指頭を斜め上にした右手の手甲を反対側の左の

頬につけ、斜め上下にこする。

オートバイ ハンドルを持つ両手の姿勢。
両腕をこまかく振動させて、エンジンの響きを暗示する。

王妃 指頭を上にした小指の（女性）右手を左手掌の上に載せ、眼の上にしたさし上げる。「女王」、「皇后」ともなる。

往復 指頭を上にした。人差指の手を、前に出し（往）て、次に引き返えさせる（復）

横暴 「暴れる」と同じ手まね。

丘 掌を下に向け五指の指頭を左にした右手で、なだらかな丘陵の線を空間に描く。

おかしい 掌を内側にした右手の指頭を反対側の左頬につけ口を被いかくすようにして笑いの表情

お経 左片手で拝み右手人差指で木魚或は鉦を叩つく真似をして、次に両手で「書物」を表わしてから両手の掌を下に上にと反転させながら左右に離して行く。これはお経の本

が大抵折本（長く紙を一枚に綴り合わせ折り畳んだ本）を表わしたものを。

起きる 右腕（或は拳）を枕として、頭をつけ寝る真似をしてから、頭をもたげてもとにもどす。

臆病 腹が小さい（小心）一憂う。腹が小さいは、人差指と親指で半円形をつくった両手に向い合わせて、腹の上につけ、そのまま、互に接近させて、最後に指を重ね合わせて小さい輪につくる。腹の中（心）が小さく縮まったと表現したもの。次に、「憂う」「案ずる」の手まねをする。

贈物 胸の前で水引を結ぶ真似をして両手に物を捧げる風にして前にさし出す。

怠る なまける。人差指と中指の二指で、鼻の下から斜め下に頬を撫で降す。鼻から二本棒を出した怠け者のことか

行い 拳にした両手の腕の肘を左右に張り

上体を左右に動かしながら、両腕を交互に上下に運動させる。

憤る 「怒る」と同じ手まね。

幼い 「赤子」「赤ちゃん」と同じ手まね

啞 右手の掌で耳を塞ぎ、左手掌で口を塞ぐ。

伯父 父（或は母）の兄として表わす。

父（或は母）を手まねして、その親指（或は小指）に添えて左の男性（中指）をそれより少し高い目上げる。

叔父 父（或は母）の弟。

父（或は母）に添えて男性（中指）をそれより少し低い目に下ろす。

教える 胸の前で右手の指頭を下にさした人差指を前へ二、三度往復させる。書物の文字の行を棒で追って教えることからか？指図の身振りか？

惜しむ（惜しい）五指の指頭を上にした

右手の掌を反対側の左頬に向け、忙しげに打つ（頬に触れぬように）真似をする。はらはらとした表情。「大切」「大事」にするの手まねにもなる。

惜しいことをした 「遺憾」と同じ手まね

和尚 片手で拝みながら、もう一方の手の人差指で木魚か鉦を叩つく真似をして一男性。

汚職 右手の人差指と親指で輪（金銭）をつくり、それを、左手の手首の下辺りから腕に添って下へ降して行く。袖口から金を袖に入れる身振り。「収賄」「贈賄」である。

遅い（遅れる）右手の指頭を下に向けた親指と人差指をまるく屈めて半円の形をつくり、それを胸の前左から右へ上に弧を描いて降して行く。遅々とした日足（太陽の動き）。恐れる 「案じる」と同じ手まね。

落ちぶれる 指頭を上にした親指の右手

を下降させて下腹部の前で左手の掌の上に置く。人の身分の下落した事。

夫 「夫婦」の手まねをして、男性(親指)を残しておいて一方の人差指で指す。

弟 「兄」と同じ前提があつて中指を腹部前辺りに下げる。

伽嘶、幼い——適する——話。

一昨日 「昨日」の要領で、二の数(中指と人差指)を超越しに後方へ押しやる。または「寝る——二つの過去」。

男 男性を表わす指は主として親指である。時には中指(この場合指の背は相手に；即ち掌は内側)で表わす場合がある。

「男たち」と複数で表わすには、両手の親指(指頭が上をさす)胸の前辺りで合わせ、両手の手首をクルクル動かして左右に離して行く。

一昨年 年——一つ——過去。

大人おとな

(イ) 掌を下に向けて五指を屈めた右手を右肩の上にかぶせるようにし、その手を上へ上へ上げて行く。背丈の高さを表わす。

(ロ) 「大」の文字を右手人差指で空間に書き、次に左手人差指と右手人差指を「人」の文字の形に組み合わせる。

劣るだだ (イ) 指頭を上にした親指の両手を前と手前に少しの間隔をおいて対立させ、両方をくらべるように互に上下に動かして、最後に手前の方の手を下にぐっと下げる。くらべて手前の方が劣ると云うことになる。(ロ) 「負ける」と同じ手まね。

踊る 両手を交互にしなよく動かして踊る身振りをすればよい。

衰える 握り拳をした手の腕の肘を、力こぶを見せるように曲げ(「勢」「力」の手まね)てから、その腕をぐんやりと力なく下に垂らす。

驚く 掌を内側にして五指の指頭を上にした手を（親指と人差指の間をV字形に開く）胸の下部辺りにあてがい、そのまま、上へ首もとまですり上げる。驚いて腹の臓腑が上へ激動するばかりと云うこと。

同じ 「一緒」と同じ手まね。

伯母 父（或は母）の姉。

父（或は母）に添えて左の女性（薬指）をそれより少し高い目にする。

叔母 父（或は母）の妹。

父（或は母）に添えて、女性（薬指）を少し低い目にする。

鬼 指頭を上にした人差指の両手を頭の上左右につけて鬼の角を表わす。

各々 人差指の指頭を胸下部に直角につけ、そのまま指頭を上へすり上げてから、その指を前にさし出す。

これは「自分一人」と云う手まねである

が、これを左右両手の人差指で交互に手まねすると、「自分一人自分一人」となって、即ち「めいめい」「各々」「夫々」と云うことになる。

憶える 右手を頭右上で何にか掴むように、しっかりと五指を握りしめる。頭の中にしっかりと把握したこと。

おぼつかない 親指と折り曲げられた他の四指の間に同じ側の頬を挟みつまみ、思案げに顔を少し傾ける。「むづかしい」「出来ない」の手まねともなる。

重い 下腹部の前辺りから、両手で物を持ち上げようとして、重さで持ち上げかねる身振表情。

思い（思う） 人差指の指頭を頭（こめかみの上辺り）につける。

思いきる 「諦める」と同じ手まね。

思い忍ぶ（思い焦れる） 掌を前に向け五指

の指頭を上にした右手の親指の指頭を頭右上こめかみの上につけてから、五指をこまかく波打たせながら、右上へ斜めに手を離して行く。次に両手を交叉して胸

にあて小首を傾しげ思い忍ぶ表情。

思い違い 五指を集め合わせた両手で左右それぞれの眼をつまむようにして、次に左右両手を交叉して夫々の手の位置を切替える。眼(手)の位置を替えるのは間違ったことになる。

思い出 「思い忍ぶ」の第一次の手まね。両手を胸に当てる身振を省く。

思いやり 五指を集め合わせて下に向けた両手を間隔をおいて前後一直線に並らべてから、同時に両手をそのまま左右に廻わして、両手の位置を逆に置き替える。対手の心を自分の心に置きかえる。と云うこと。

面白い 「嬉れしい」と同じまね。

表向き 掌を内側にして五指の指頭を右にさした左手の手甲(表)を右手人差指でさす。

親 「父母」と同じ手まね。

親方 「主」と同じ手まね。

折々 「時々」と同じ手まね。

愚 掌を前に向け五指の指頭を上にした手の親指の指頭を頭の上に(こめかみの上)につけると同時に他の四指を折り曲げる。頭脳が塞さがっている。

終る(終り) 五指の指頭を前にさし掌を右



に向けた左手に五指の指頭を左にさして掌を内側にした右手直角につける。オルガン 両手でオルガンの

下を交互に踏む真似をしてから、その両手でオルガンのキーを叩たく手振り。

恩 掌を内側にした両手をX形に重ね、右肩前辺りから胸もとに引き寄せる。

音楽 右手の人差指で、タクトを振る真似をして、リズムカルに運動させる。

恩人——恩人（男性或は女性）

温泉 指頭を上にした人差指中指薬指の三指の右手（掌は内側に向け）を、五指の指頭を右にさし掌を内側に向けた左手の親指と他四指の間に挟み、右手の三指をこまかく動かす、温泉マーク形をつくる。

女 女性を表わす指は主として、小指、時には薬指（指の背を相手に——即ち掌は内側に）を表わす。

「女たち」と複数で表わす場合、「男たち」と同じ要領で両手の小指を合わせてから、両

の手首をクルクル動かして左右に離して行く。

力

蚊 頬を人差指の指頭で突いてから、掌でその頬を打つ。蚊に刺されて、その蚊を叩たきつぶすこと。

会（会合） 掌を左側に向け、指頭を上にした五指を少々屈めた右手、これも掌を右側に向け、指頭を上にした五指を屈めた左手。その両手を左右から接近させて、手首のところでは付け合わず。両手の五指を多数の人々として集り会うこと。

貝 指のつけ根に夫々の指頭がつくばかりに五指を折り曲げた両手の（右手の掌は下向け、左手の掌は上向け）手首を上下につけ合わせて二枚の貝の蓋として、その貝の蓋を閉

じるように両手をびったりと合わす。

開会 会——開ける（開らく）

快感 先づ、「嬉れしい」（面白い）と同じ手まねをして、次に五指の指頭を上になした掌を頬すれすれに向け、中指の指頭でこめかみをもむように上へ伝い上らせて行く。スーと神経がこめかみを走る官能的な快感を味わしたものだ。

海岸 掌を下向け、五指の指頭を右になした左手（陸地と見なす）。掌を上向け、五指の指頭を前方になした右手（海面と見なす）を、その五指をこまかく動かして（波打たせる）左手の指先から五指の背の上を這り上げて行き右へ引き退げる（波が打寄せては引く「海岸」「渚」「浜辺」の表現）。

会議 打合せ（相談）——会（会合）

海軍（海兵）セーラー服の襟を表わす。即ち、両手の人差指と中指の指頭を下になし

て、左右夫々胸の上にびったりとつけ、同時に上へ斜めに撫で上げ肩越しに後へ出す。二本の線で縁取られた襟、「海員」とも同じ。

會計 掌を上に向け五指の指頭を右になした左手を算盤と見なし、その掌の上に右手の五指の指頭をつけ、算盤の珠を弾く真似をする。「勘定」「計算」の手まねともなる。

解決 左手の上に向けた掌の上に、拳にした右手の手甲の方を叩きたき附す。そうだ、「それだ」と思わず手を叩たく自然な身振から来たものだ。「決めた」となる。

蚕 小指をまるく曲げて、その指頭を口もとにして、そこから糸を引くように前に出して行く。小指を曲げるのは虫を表わし、口から糸をつむぎ出す「蚕」。「絹糸」「絹」の手まねともなる。

悔恨 悪るかった——遺憾。

解散 先ず「会（会合）」の手まねをしてから、その両手を左右に分離して、掌を前方斜めに向きかえて、更に左右に離して行く。

解釈 意味——説明

会場 会合——所

改心 悪るかった——御免御免——心変える。

外套（オーバー） 掌を下に向け、五指の指頭を斜め下にさした左手の手首の上に、掌を上に向けた右手を十字にのせたまま、くるとその掌を下向けにする。外套の袖口がダブルに折返しになっているのを表わしたものだ。

介抱（看護） 匠（右手で左手の脈をとる）

愛——（可愛がる）

会話 五指の指頭を集め合わせた両手を向い合わせて、交互にぱつと五指を開いて、手の中から何にかを放なち合うようにする。両手を対坐した二人として、口から互に「言葉」を放なし合う様。

買う 「売る」と逆の運動。即ち掌を上に向け五指の指頭を右にさした左手（商品）。その手前に「金銭」を表わした右手。その右手（金銭）を前にさし出すと同時に左手（商品）を胸もとに引き寄せる。

却って 五指の指頭を上にした両手を背中合せに（手甲を合わす。即ち親指をのぞいた四指の背を合わす）してから両手を左右に離す。「反対」の手まねともなる。

帰える 指頭を上にした人差指を前方から胸もとへ引き寄せる。

○「家に帰る」

胸の前で先ず「家」の手まねをして、左手をそのまま残して置いて、右手の指頭を上にした人差指を前方から左手に引き寄せらる。

変える（変わる）（代り） 人差指の指頭を前方にさして、掌を上に向けた両手。右手を

左へ左手を右へと移動させて、腕を交叉させる。右のものが左へ、左のものが右へと「交わる」のである。

鏡 左手の五指の指頭を上にしし掌を顔に向け（手鏡を見るように）右手の五指の指頭を上にしし掌を前向けて後頭部にかざす（後の髪具合を鏡で見る）。合せ鏡を表わす。

係員 (イ)「委員」と同じ手まね。(ロ) 責任——男性（或は女性）

柿 まるい物（果物）を掴むように五指を彎曲した右手を口もとに持って行き、噛じる真似。

鍵 五指の指頭を上にしし掌を前向けた左手甲の上で、右手で鍵をねぢる真似。

鉤 人差指をカギ形に曲げる。
限り (イ)「終る」と同じ手まね。
(ロ) 「以下」とも同じ手まね。

書く 右手で、筆かペンなどを持つようにして、字を書く身振りをすればよい。

覚悟 諦^{あきら}める——決心。

隠くす 左手を少し挙げて、その脇の下に右手をさし込むようにする。袖の下に物を隠くす身振り。

学識 研究——識^しる（賢い）

格別 拳を下向けにした左手の腕下膊部の上に、右手の親指と人差指の指頭を合わせたので、下から人形を描く。昔（明治時代）の日本陸軍の特務曹長の制服の袖の上に逆V字の印しがあったことから、この「特」を象したもの。即ち「特に」「特別」「格別」の手まねになった。

学問 「学識」と同じ。

学力 学問——腕利き。

家業 家——高い（或は「仕事」）
隠れる 上体を右斜めに屈がめ、両手で顔

を被い隠くす身振り。

可決 賛成——決定。賛成は、誰れもがするよう右手を挙げて賛意を表する身振り。決定は、「決決」と同じ手まね。

掛算 両手の人差指で×字形に交叉して、掛算の符号を模写する。

過去（昔、以前） 五指の指頭を上にしし掌を内側にした右手を右肩越しに後方へ押しやる。体より後方を過去とする。



傘 傘の柄を 持ってさすように拳にした両手を上下に重ね、上になった手を

傘を開らくために、まっすぐに上げて行く。

笠 頭の上で、両手掌を向い合わせ互の中指の指頭をつけ△形をつくり（笠の形）次

に、両手夫々の五指の指頭を集め合わせて左右夫々の頭から頬を伝い降して、顎の下で、顎紐を結ぶ真似。

火山 胸の前で掌を下に向けた手で山の形を描いて（片手にても両手にても可）、次にその山の頂上の位置の空間に、掌を右に向け、指頭を前方にさした五指をまるく彎曲させた左手（火口）の中を下から右手の拳をくぐらせて上に出すと同時に拳の五指をぱつと開いて更に上へ上昇させる。火口から火を噴き出した描写。

家事 家——仕事

火事 家——火（燃える）

風 五指の指頭を上にしし掌を前向けにしした両手を右肩辺りか、斜め左下へ掌を下に向けながら掃き降す。風の吹き降す様。

舵（槳）（ハンドル） 丸ハンドルを両手で廻わす真似。或は枝ハンドル（自転車ハン

ドル)を握って左右に操つる真似。

賢い 指頭を前方にさした親指と人差指を合わせた手を頭の上稍横寄りに置いてから両指を開く。頭脳が開いていること。即ち「賢い」「棟功」である。「知る」「知識」ともなる。

過失 「過まち」と同じ手まね。

数 「いくつ」と同じ手まねで表わす。即ち、親指から順次に五指を数えるように折って行く。

貸す 「少し」の手まねをしたその手を前へさし出す

稼ぐ 働く——金儲ける。

風邪 左右何れかの集め合わせた指頭を咽喉につけ咳を出す表情。

固い 「石」の如く同じ手まね。

敵打ち 親指と人差指の指頭を上にし、掌を内側に向けた両手。右手を左へ、左手を

右へと腕で交叉して、夫々の親指と人差指の指頭を合わせる(これまでは「互い」の手まねを同時にそのまま両手の二指の指頭を下に向ける。

片付ける 五指の指頭を前方にさし掌を左に向けた右手。これも五指の指頭を前方にさし掌を右に向けた左手。この両手を胸の前後寄りに間隔を置いて平行にならべてから、そのままの両手を少しばかり上げて左へ移しては下げてはまた上げては左へ移して下げる。これを三度ばかり繰返して行く。物をきつしりと並らべて置く身振り。「整理整頓」でありまた「計画」「準備」ともなる。

刀(刀剣) 左脇腹のところ、左手に刀の鞘を持ち、右手で刀の柄を持つ真似をして、右手で刀を抜く身振りをすればよい。

勝つ 鼻頭の上に拳を持って行って、「鼻高」即ち「天狗」(「よし」と云う手まね)

を表わし、右手を上げて見せる。一軍配が上
がった。

渴^かえる 五指の指頭を上にしし掌を内側に
向けた手で、咽喉の上を軽く叩たく。咽喉が
からからに乾き切ったのを訴える表現。

がっかり 五指を彎曲した両手の指頭を左
右夫々の胸に軽くつけてから、両手を下にす
り落す。がっかりとした表情で肩を落す身振
を伴う。

合併 「合わせる」手まねをして更に両手
五指を開いて掌をびったりと合わせる。

家庭 家―肉身―人々。家を表わした両手
のうち左手をそのままにして置いて、右手で
「肉身」を即ち、人差指と親指で頬を軽くつ
まみ或は人差指だけでその指頭で頬を撫で降
す。次に「人々」を左手(家)の下に表わ
す。家の中の肉親の人々。

下等 「卑しい」と同じ手まね。

叶う 「あてはまる」と同じ手まね。「適
当」「適度」の手まねにもなる。

悲しい 人差指と親指の指頭を合わせたの
を眼の下から頬を伝わらせて降して行く。涙
が頬を流れ落ちる様。

必ず (イ)「決っている」と同じ手まねを強
く表わす。(ロ)「約束」の手まねを強く指に
を入れて表わす。

蟹^{かに} 掌を下に向けた両手を互の親指をまげ
てつなぎ、共に他の四指を曲げ伸ばししなが
ら、横に移動させる。蟹横遣いの表現。

金(金銭) 人差指と親指で丸い輪をつくる
(他の四指は伸ばしたまま)

鐘 (イ) 吊鐘、檀木から垂れ下った網を両
手で持って鐘をつく身振り。(ロ) 洋式の鐘。

鉦 網を引いて鳴らせる身振り。(イ) 掌を
右側に向け、指頭を前方にさした五指をC形
に彎曲させたのを鉦とみなして、右手の人差

指でそれを叩たく真似。

金持 (富豪) 「金」を表わした手をそのま
ま肩の辺りまで上げ(金が多く積まれてあ
る)。次に「家」の手まねをしたまま、両手を
上へそらして、家の屋根を大きく見せる。

金儲け 「金」を表わしてから、次に、掌
を前向け指頭を上にした五指を彎曲させ
て、その手をぐっと手前へ引き寄せる。

靴 (イ) 左脇で靴を抱える真似(抱え靴)
(ロ) 右手で靴を掲げる真似(掲げ靴) (イ)

人差指と親指の二指の指頭を右肩につけ、そ
のまま胸から下へ斜めに降して肩にかけた靴
の紐を表わす(かけ靴)

株式 指頭を上にした人差指と中指の両
手を夫々頭の左右にして交互に前後に運動さ
せる。

釜 両手で右左夫々の耳の上をつまみ、上
へつり上げるようにする。

頭部全体を釜として、釜の縁(両耳)を持
ち上げる表現。

鎌 一束の草をつかんだように拳にして左
手の下で、右手の曲げた人差指(鎌)を左へ
弧を描いて手前へ引いて草を刈り取る身振
り。

かまわない 小指の指頭で、下口唇を二、
三度軽く叩たいて見せる。

神 人差指で上(天)をさす。「天にまし
ます神」である。

紙 「白」の手まねをして(人差指の指頭
で歯をさす)次に、両手の人差指で空間に口
形を描く(両手の人差指の指頭を合わせてか
ら左右に離し次にそのまま同時に平行に下
降させ、また両指を相寄らして指頭を合わ
す)

雷 「稲光」の手まねをしてから、いそい
で両手で左右の耳を塞ぐ

亀 掌を左側に向け指頭を前方にさした五指のうち親指を残して他の四指を折り曲げた右手の上に、五指の指頭を右にさし掌を下に向けた左手を被ぶせ右手の親指を外にのぞかせる。親指は亀の頭、その指頭をびくびく動かせる。被ぶせた左手は亀の甲。

がめつい 人差指と親指で輪にしたのを、口にくわえるようにして（斉ちんぼの手まね）掌を下に向けて五指を屈めた両手で物を掻き寄せる身振り。

カメラ 掌を下に向け五指の指頭を右にさした左手。その五指の指頭をまるく集め合せて輪（空洞）をつくる。それをカメラのレンズとして胸の前にして、掌を内側に向けた右手をシャッターとして、左手の輪の穴（レンズ）を塞さぎシャッターを切るように下へ落とす。

蚊帳 蚊帳の吊り手を結ぶ真似を左右に二

度ばかりくり返して、蚊の裾をさばいて頭をくぐらせ入る身振り。

火曜日（火） 焰が燃え上るのを表現する心持で、掌を上に向けた両手の五指を集めては伸ばし集めては伸ばししながら、両手を交互に上昇下降させる。

空（空っぽ） 五指の指頭を右にさし下に向けた左手の掌の下に、右手の親指（他の四指は指頭を前方にさしている）の指頭を軽くつけたまま、他の四指を左右に振る。左手の下（物の内部）に何にもないと四指を振ったこと。

辛い 掌を内側に向けた五指の指頭を上にしてやや曲げたので、開いた口の舌の上を掻き廻わす真似。

鳥かみす 黒い——鳥

ガラス 「鏡」と同じ手まね。

仮りに 口の中で舌をねじらせて片頬をふ

くらませて、そのところを親指と人差指で二度ばかりつまんで見せる。

借りる 「少し」の手まねをしたその手をそのまま胸もとへ引きよせる。

カルタ 左手の掌の上で、右手で札を繰る真似。

軽い 下腹部の前で物を両手で軽々と持ち上げる身振りと表情。

枯れる 木（或は草、花）——死ぬ。

川（河） 掌を上に向け五指の指頭を左にさした右手。五指をこまかく波打たせながら右へ移動させて行く。川の流れを横写したものは可愛い 「愛する」と同じ手まね。

変りなし 「相変らず」と同じ手まね。

考える 「思う」と同じ手まね。この場合

人差指に力を入れ考える表情があつてよい。

関係 「間柄」と同じ要領の手まね。しかし、親指と人差指で輪にしてつなぎ合わせた



両手を少しばかり左へ移行するがよい。

看護婦 医

（右手で左の脈をとる）——女性

頑固 人差指

で腹部をさして「心」を表わし、その位置で五指の指頭 集め合せた両手を左右に互の指頭を強く着け合わせて僅かに下に下げる。固く結びついている様。

勘定 「会計」と同じ手まね。

感謝 「有難う」と同じ手まね。

感心 右手の親指と人差指の指頭を合わせ、その指頭を右頬につけ、上へこめかみのところまでもみ上げるように手を僅かにくるくる動かしながら伝い上げる。「快感」とよく似た要領であるが、頬からこめかみへする

指の運動は「感ずる」意味のものである。

完全 全く一致し。

簡単 右手の人差指の指頭をちよつと口唇につけてから、上に向けた左手の掌の上を一つ打つ。

寛大 人差指と親指をまるく曲げて半円を形どった両手を左右に腹の上にびったりつけて、一つの円をつくる。それから両手を左右に引き離し大きい円を表わすつもり。腹(心)の大きさを示す。

肝腎 五指の指頭を上にした右手の掌を反対側の左の頬にすれすれに向け、軽く頬を叩たくように(頬にあたらぬ)こまかく左右に動かせる。手に触れるのも、はらはらとする思いをする程「大切」な「大事」な「肝腎」など云うことである。

監督(監視) 人差指と中指を曲げたその指頭を眼の先に持って行き、こまかく左右に動

かせる。左右に眼を配って「監視」「見きわめる」を表わしたもの。

堪忍 掌を下に向け五指の指頭を左にさした右手、その掌を僅かにまるく彎曲さして腹につけ下腹部に押え降す「腹の虫を押える」の意味。

看板 「揭示」「宣伝」と同じ手まね。

キ

樹(木) 握り拳にした両手の腕をV字形に交叉したまま拳をぐるりと一回転させる。樹木の幹の股のねじれた様態。

黄色 掌を左側に向け指頭を上にした右手の人差指と親指、その親指の方の指頭を額につけ、人差指の方をこまかく動かせる。

急に 「時間の流れ」を表わす手まねの途中その人差指の指頭を急に上にさし上げる

(掌は内側になる)

消える 五指の指頭を前方にさした両手の掌を向い合わせ、共に五指を徐々に曲げながら左右から接近させて両手が会う所で五指が全く握られて上下に重ね合わせる。映画の絞りの手法を真似たもの。(次第に周囲から円を締められて画面が消えて行く)

議員 政治—議論—委員。

記憶 「憶える」と同じ手まね。

気おくれする 「恐れる」と同じ手まね。

気をつける 監督—しっかりする。

機械 夫々人差指と中指を前方にさした両手を胸の前で平行にして、交互に前方から下へと丸く回転させる。

議會 政治—議論—會

気兼ね 「遠慮」と同じ手まね

期間 何月何日から(時の流れ—何月何日—まで(終り))

聞く 人差指の指頭で同じ側の耳に向って投げつけるように指す。耳に入れる。即ち聞くのである。

効く 薬—適する。

訊く 五指の指頭を前方にさし掌を左側に向けた右手を前へさし出して行く。「どうなの?」と相手に手をさし出して訊く身振り。「尋ねる」「何に」「どう」との疑問詞的に使われる手まね。

危険 「危い」と同じ手まね。

機嫌 (イ) 機嫌が悪い。親指と人差指の指頭を左右の眉の間につけるばかりにして、皮膚をつまむように二指の指頭を合わせる。機嫌の悪い時に、眉間に皺を寄せることを表わす。(ロ) 機嫌がよい。「機嫌が悪い」とは反対に、眉の間にした親指と人差指の指頭を合わさずに、二指の間を広く開く。

氣候 寒い—暑い—いろいろ。

岸 掌を上に向けて五指の指頭を左にさした右手を「水面」として表わし、その前に掌を下に向け五指の指頭を右にさした左手で、なだらかな丘陵を描いて岸を表わす。

氣質 心——癖

期日 「何月何日」の手まねでよし。

汽車 先ず煙突の手まねの要領で煙を表わして、掌を内側に向け五指の指頭を左にさした右手を汽車の車輻として、こまかく上下に動揺させながら左へ移行させる。

記者 新聞——「作家」と同じ要領の手まね。

徽章 人差指と親指でつくった輪を領の上につける。即ち、帽章を表わしたもの。

キス（接吻）人差指と親指で輪をつくった両手を二人の口唇になぞらえて、二つの輪を口の前でつけ合わす。

疵 赤（血）を表わしてから、人差指で頬

（或は疵したところ）を切る真似。

汽船 (4) 煙—船

(4) 片手「船」の形にして、その手首のところで、もう一方の五指を集めた手をスクリーンを表わすつもりでぐるぐると廻す。

競う 指頭を上にした両手の親指を胸の前で対立させ交互に上下させる。

規則 右手の人差指と中指をかぎに曲げたので左手の掌の上を叩たく。

北 指頭を上にした両手の人差指を併立させてから、夫々左右に「」を描く。即ち「北」の文字の輪郭を表わしたもの。

期待 未来^大楽^しい^待つ

汚ない 指頭を上にした人差指で鼻梁横を上下にこする。油じみて鼻梁のふちのよこれを表わす。

貴重 「惜しい」「大切」と同じ。

貴遠い 五指の指頭を集めた両手を頭の右

側に持って行き、互の爪先きをつけ合わせ
て、ねぢる。そして次に、両手で虚空を掻き
むしる真似をする。頭の中がねぢれて、狂っ
た様。

切手 右手の人差指と中指の指先を口許に
持って行き、唾をつける真似をして、左の掌
の上に切手を貼りつけるように、二指を置く
屹度 「必ず」(何)と同じ手まね。

切符 (何) 右手の人差指と中指で缺とし
て、掌を上に向けた左手を缺で切る真似。(何)
両手で切符を持って、もじり切る真似。

狐 影芝居で狐を見せるのと同じ、親指の
指頭に中指と薬指の指頭をつけ、人差指と小
指を立てる。

忌日 死んだ——月日

絹 「蚤」同じ手まね。

希望 未来——幸せ——あこがれる——楽しい
牙 指頭を前方にさした人差指を曲げた両

手を口の両脇につけ、牙を模倣する。

記念 「憶える」と同じ手まね。

昨日 手の甲を前に向け指頭を上にした
右手の人差指を(一の数)を右肩越しに後方
へ押しやる。「一つ過去」のこと。または、
「寝る」の身振をして「一つ過去」とする。
きまり(決っている)「規則」と同じ手ま
ね。

決める 「解決」と同じ手まね。

着物 掌を内側に向け五指の指頭を上にした
した両手を同時に、右手は右肩から左へ斜め
下に左手は左肩から右へ斜め下に降り、着物
の襟を表わす。

疑問 「怪しむ」と同じ手まね。

規約 掌を上に向け五指の指頭を右にさし
た左手を下に、掌を下に向け五指の指頭を左
にさした右手を上にして、共に親指を除く他
の四指を曲げて両手をつなぎ合わせます。



客 斜め右寄

り前に、右手で男性或は女性を表わしてから、掌を上向けた両手で受けるようにして「さあ、

どうぞ」とばかり招じ入れる身振り。(両手を左胸脇へ引き寄せる)

キャッチャー(捕手) 前方から飛んで来る球を受け取るように、前に出した右手掌(球)を引き寄せて、左手(ミット)の掌の中におさめる。——男性。

給金 親指と人差指で輪にして金銭を表わした手を額の上に頂いて、胸もとに引き寄せ

休憩 両手の掌を上に向けて、夫々左右の膝の上に置く。手を休める形。

給仕 下腹部の前で、共に指頭を斜め下に向け掌を向い合わせた両手をV字形に指頭で合わせて、男性或は女性を示す。上司や来客の前に、かしまって出る時の両手の姿態を表わしたものの。

急に 右手の掌を下に向け指頭を前方にさした人差指を右から左へ直線を引いて行く(時の流れ)、その途中急にくると人差指の指頭を上にはさし上げる(従って掌は内側になる)

清い 「美しい」と同じ手まね。

今日 「現在」と同じ手まね。

教員 教える人女性 (或は人々)

兄弟 肉親を意味する前提があつて、(この場合これを略してもよい) 指頭を上にはさした両手の中指を胸の前の位置に平行にならべ、何づれかを少し下に位置させる。下に位置させた方が弟と云う心得。即ち兄と弟を同

時に表わすわけである。

許可 かまわない——捺印



協会 左右の

人差指をまげて互に左右に掛け結ぶ。そして、両手を左右に引き合う。連続すると云うこと。

「連盟」「同盟」ともなる。

教会 キリスト—建物。

協議 「打合せ」(相談)と同じ手まね。

行儀 (イ)「行儀よい」「行儀よくしなさい」

五指の指頭を上にした両手の掌を向い合わせ顔を左右に囲み、そのまま両手を少し前に出す。馬車馬の眼かくしを表わしたのから来た手まね。よを見しないで行儀のよいこと。(ロ)「行儀悪い」。行儀——適する——ない。

教室 教える(或は習う)——部屋(室)

教授 大学—先生

競走 「運動」の(イ)の手まねをして次に指頭を上にした両手の親指を対立させ、交互に前に出しては戻す。前になり後になりする競走を表わしたものの。

去年 年—つ—過去

行列 「遠足」と同じ要領で表わす。

嫌い 顎の下で上にさした親指と人差指の

指頭を一旦合せてから勢よく両指を開く。

「好き」の手まねの逆にしたもの。

気楽 休憩——楽しい。

錐 両手の掌で錐の柄を挟んで、錐をもむ真似をすればよい。

キリスト(キリスト教) 両手の人差指を十字に交叉する。十字架を表わす。

器量(技量)「腕利き」(腕前)と同じ手まね。議論 指頭を左にした右手の人差指と指

頭を右にさした左手の人差指を僅かな間隔を置いて互に突き合うようにする。鎗で突き合う動作をかりて、意見をたたかわせることを表わしたものだ。

金 黄色——光る。

銀 白——光る。

近視 掌を内側に向けた掌を眼に近く持ったとき、近視の人の物を見る真似。

金魚 掌を下に向けて、指頭を左にさした右手の人差指中指薬指の三指を曲げては伸ばししながら右へ移動させる。三指は金魚の尾鰭

金庫 金属—扉を閉じる—鍵

扉を閉じるは、指頭を上にした掌を内側にした両手を前で少しの間隔を置いて左右に並らべてから、両手の掌を同時にくりと前向けにして、両手をびったりと扉を閉じるように合わす。鍵はその左手をそのままにして

その手甲に右手で鍵をかける真似。

銀行「金銭」を表わした両手を胸の左右脇にどっしりと置くようにする。銀行に充分な金が積み備えられていること。

近所 「近い」と同じ手まね。

金属 「金曜日」と同じ手まね

勤勉 一生懸命——仕事（働く）

勤務 仕事——責任。

金曜日（金属）右手の親指の指頭を口もとに、上歯の下辺りにかざす。噛んで固い表情。「金属」の手まねともなる。

ク

悔い 悪かった——遺憾

空気 人差指と中指の指頭を鼻腔に向け前方から引き寄せては、前へ返えず（鼻で空気を吹くこと）そして、掌を下に向けた手を、

胸の前の空間を一渉り廻わして見る。

空想 「思い出」と同じ要領の手まね。

官司 柏手を打つ真似をして、男性を示す。

草 「青」を表わして、掌を内側に向け指の間を開いた五指の指頭を上にした両手を腹の前で左右に並らべて、そのまま僅かに上へ伸び上らせる。地上から生え上った草。

叢 五指の指頭を上にして掌を内側にした両手を前に並らべて交互に上げ下げする。草の生え繁った様。

臭い(腐る) 「空気」と同じ要領で、人差指と中指の指頭を鼻腔に向け、顔をしがめて、不快な表情をする。或は鼻をつまむ。

鯨 後頸に握った手をやってから、五指をパツと開きながら、上へ上げる。(鯨の背から水を吹く)次に魚を表わす。

苦心(工夫) 右の握り拳で、頭の右側を叩いて(頭を悩ます)から左の腕を叩たく。

(手間をかける)

薬 右手の薬指の指頭で左手掌の上をこまかくかき廻わす。他の四指は開いたまま

癖 掌を下に向けた左手の手甲の手首近く



の上で、右手の人差指と親指で輪をつくったのをのせ、(人差指の方をつける)、輪を開いて、人差指をま

っすぐに伸ばす。

嘴 上にさした親指の指頭の上に、隣りのまげた人差指をかぶせると嘴の形になる。それを口許につける。

国 五指の指頭を右にさし掌を内側に向けた右手。五指の指頭を左にさし掌を内側に向けた左手。この両手を左右に互の中指の指頭

でつけ合わせてから、左右に離し内側に夫々円を描いて最後に両手を手首で合わせる。即ち円形を造ったわけで、境界で開んだ国の意味。

首切り 誰れもがするように、手で自分の首を切る身振り。

組合 「協会」(連盟)と同じ手まね。

工夫 考える―骨折―考える。

蜘蛛 五指の指頭を上にし、掌を前に向けた両手を互の親指でつなぎ、他の四指を曲げ伸ばししながら、上へ移動させて行く。

四指は蜘蛛の脚となぞらえて、糸をつたせて上へ上る蜘蛛の模写運動。

雲、曇り 顔の前上で、五指の指頭を上にしし掌を前向け(稍々斜め上向け)て五指を彎曲した両手で、もくもくと立ちこめた雲を描くつもりでかきまわす。

倉家―いろいろ―入れる―扉を閉じ

る。家を表わした両手の左手をそのままの形に残して置いて、右手で「いろいろ」を表わし、左手の下に物を入れる真似をして、扉を閉じる手直似(金庫と同じ要領)

暗い 「夜」と同じ手まね。

暮す(暮し)の「一昼夜」の手まねを三度繰り返えす。

○暮して(生きて)行くは、生きる―暮す、較らべる 両手の指頭を上にした人差指を胸の前で、対立させ、交互に上下させる。

「競う」の同じ要領。

栗 五指を曲げて、その指頭で顎の下を突く。かたい男の顎の無精ひげから、栗のいががした感触を連想したもの。

繰上げる 「延期」と同じ。

来る 指頭を上にした人差指を前方から、胸もとへ引寄せる。

苦るしい(苦しむ) 掌を内側にして五指を

曲げた両手を胸にあて、掻きむしる身振り。
車（車輪）掌を下に向けた両手の夫々の親指と人差指で輪をつくり、前へ廻転させるようにする。

黒 掌で頭の上から横へ撫で降す、髪の色を表現したもの。

玄人 「腕利き」と同じ手まね。

軍艦 (イ) 大砲—汽船。(ロ) 戦争—汽船。

軍人 銃を持った手つきをした両手を上下に間隔を置いて、胸の右側につける。「捧げ銃」の第一節の動作。

ケ

毛 親指だけを折って、他の四指の指頭を上にした右手を、左腕の上に載せて、手甲辺りまで移動させる。腕に伸びた毛。

警戒 人差指と中指を曲げて、その指頭を

眼の前にもって行き、僅かに左右に動かせる、「監督」の手まねと同じ要領。眼を左右に配る表情。

計画 「かたづけ」の手まねと同じ。

警官 帽章（徽章）——男性。警官の制帽の大きい徽章が印象的なことから、象徴されたもの。

景気 (イ) 景気がよい。商い——よい。(ロ) 不景気。商い——悪い。

経験 掌を内側に向けて五指の指頭を左にした右手。掌を内側に向け五指の指頭を右にした左手。先ず右手掌を左手の手甲にびたりとつけ、次に左手掌を右手の手甲にびたりとつけてはまた右手掌を左手の手甲にと二三度繰返す。つまり両手を横に重ね合わせる訳である。事を重なり重ねた即ち経験となる訳である。

稽古 「演習」と同じ手まね

經濟「商い」と同じ要領で表わす。

警察 「警官」の手まねの「男性」を表わすのを省いて——建物。

計算 「会計」と同じ手まね。

刑事 掌を内側にした左手の人差指と中指の指頭を右にさし、それに掌を前に向けた右手の人差指と中指の指頭を上にしたのを組み合わせ、「刑」の文字の扁をつくる。

揭示 五指の指頭を上にしたし掌を前向けにした左手の掌の下部に、指頭を上にした右手の人差指の指頭をつけて、少し上へさし上げる。左手掌は揭示板、右手の親指は揭示板につけた柄(脚)と見るがよい。プラカードなら更に頭の上辺りさし上げる。「看板」「広告」「宣伝」「名高い」の意味にもなる。

芸者 両手で三味線を鳴らす身振をして、「女性」を示すがよい。

輕蔑 左手で表わした「男性」(或は「女性」)の指頭の上を右手の掌で下へ押し下げる。「敬う」の反対の身振。

下女 「給仕」と同じ手まねで「女性」
吝^ぢんぼ 「金銭」を表わしたその輪を口にくわて軽く噛む真似。

結果(結局) 「終り」と同じ手まねで表わす

結婚 「夫婦」を見よ。

下駄 「足駄」の手まねの要領で掌を下向けにした左手を下駄の台として、右手の拳を縦にしたのを下駄の函として、左掌の下に前そして後につける。

決議 会議——決める。

月給 月——給金。

傑作 優れる——絵(或は小説、彫刻など)

決算 終り——計算。

月謝 習う——月——お礼——お金。

月収 月——お金。お金を表わしたままの手を、胸もとに引き寄せる。

欠席 「居る」と同じ手まね。即ち、家に居て、出ないこと。

決して 「必ず」と同じ。

決心 心——決める。

月賦 「月」を表わし、五指の指頭を右にさして掌を上に向けた左手の上に、五指の指頭を前方にさし掌を左側に向けた右手を宛ら組の上で物をほうちようで小さきさみにする動作してから、右手で「金銭」を表わして前にさし出す。小さきさみに分けて支払うこと。

月曜日 「月」の項ゆと同じ手まね。

下男 「給仕」と同じ手まねをして「男性」

下品 左手の掌の上に「男性」を表わした右手をのせ、そのまま低く下へ下げる下等な人物の意味。

獸けもの 掌を下向けて五指を鋭く屈めた両手を胸の前で、前後梢々斜めにならべる、獸の前肢の鋭い爪の表現。

家来 「男性」を表わした右手に、それより少し低い目に後にこれも「男性」を表わした左手を添える。その時左手の「男性」(親指)を少し屈める。「供の音」「部下」ともなる。

けれども 五指の指頭を前方にさし掌を下に向けた手を、くると掌を上向けに反転させる。



原因 「意味」と同じ手まね。

喧嘩 五指の指頭を集め合わせた両手を左右に互いの指頭で突つき、ねじり合わせる。

元氣 拳にした両手の腕を横に曲げて肘を左右に張る。

研究 「意味」と同じ要領の手まね。握り拳にした左手の手首の下を、指頭を前方にさした右手の人差指を鎌をもむようにして斜め下に突き降して行く。事物をほじくって行くこと。つまり研究となる。

健康 「元氣」と同じ手まね。

現在 (今) 腹の前で、掌を下向け五指



の指頭を前方面角にさした両手を左右に僅かな間隔に並らべて、空間を下へ押えるように降す。「ここ今」

と云う気持で、自分の軀の位置を現在とする
建設 (建築) 「建てる」と同じ手まね。

剣道 両手で刀の柄を握り、青眼の構えをして打ち込め身振り。

幻燈 五指の指頭を上にしし掌を内側に向けた左手をスクリーンとして、それに向って光線を当てるように五指の指頭を集め合せた右手をパツと開く。

拳斗 両手の拳で構えて、対手を打つ拳斗そのまゝの身振り。

憲兵 腕章——兵士。腕章は、右手の親指と人差指を少々広く開いて、その指頭で左腕の上に横に腕章を描く。

顕微鏡 五指の指頭を集め合せて、丸くした両手を上下に重ねて、顕微鏡の筒を形どり、上の方の手をぐるぐる廻らすようにしながら、(ピントを合わすこと) それに眼を近づけて伺く。

儉約 右手で「金錢」を表わしたのを右腹脇の前に位置させ、それを前から左手の掌で

囲むようにして、身体に引寄せらる。

」

子 「息」或は「娘」で表わせばよい。

粉 五指の指頭を集め合せて下向けに郭れた両手。その夫々の五指の指頭を互にこすり合わせる。手の中の粉を指先から撒き落す身振。

鯉 ひげ一魚。鯉のひげは、人差指の指頭を前方にさした両手（掌は向い合う）を鼻の左右両脇にあてかかって両指を共に曲げて、かすかにふるわせながら、前に出して行く。

恋 (ハ) 指頭を下方斜めにさした両手の人差指を指頭で付け合わせ、指頭を上稍々斜めにさした両手の親指を指頭で付け合わせると一つの菱形になる。これを丸めにするるとハ一

ト形になる。それを左胸にびったりとつける
(ハ) 「思い忍ぶ」「思い焦れる」と同じ手まね。

好運 運命↑幸福。

光栄 指頭を左にさした右手の人差指、これも指頭を右にさした左手の人差指。この両指をかなりの間隔を置いて向い合わせて、そのまま両手を肩の高さまで引き上げて行く。

公園 胸の前で、五指の指頭を上にした両手の掌を向い合わせて、同時に左右から相寄らしめて、行き違いにする。そして、両手をもとに戻らして、前に内側になって手の方を今度は外側にして行き違いにする。多くの人々が行き交う状景を描写したもの。人が集る処、即ち公園。

後援 「応援」と同じ手まね。

講演 「演説」と同じ。「講義」ともなる

高価 金銭を表わした手を高くその価格の度合いでさし上げる。

後悔 「悔い」と同じ。

合格 よい——適している（あてはまる）

狡猾 右手の手甲（五指の指頭を上斜か後方にさす）を左の頬にあてがい、前後にこする。

交換 五指の指頭を右にさし掌を上に向け、た左手を前の方にし、五指の指頭を左にさし掌を上に向けた右手を胸もとにして、同時に左手を胸もとに引き寄せ右手を前にさし出す。自分のもの（胸もとの右手）と先方（左手）のものとも取り替えること。

厚顔 「あつかましい」と同じ手まね。

工業 指頭を前方にさした人差指と中指の両手を胸の前に平行にして、宛らピストンのように両手を同時に交互に上下に回転させる。「機械」「工場」ともなる。

合計 集める——計算

攻撃 五指の指頭を上にはさし掌を前に向けた両手を左右にならべて、同時に前に勢よく突き出す。前軍が前へ突進する。

孝行 親を表わした右手の側面を左手で撫でさするようにする。親を大切にすの意味。

皇后 左手掌の上に、女性を表わした右手を載せ、目の上の位置にさし上げる。

広告 「揭示」と同じ手の姿態をしてそれを左右に運動させる。

交際 左右両手の握手で表わす。

工作 鑿などの工具を握った姿態の左手の拳（たて）の上を、これもまた何にか植のよいうな工具を握った風にした右の拳（たて）を二三度打ちつける。

降参 (ハ) 両手を頭に持って行き、兜を脱ぐ身振りをする。(ヘ) 五指の指頭を上にはさし掌を前に向けた両手をさし上げる。

講習 習い——憶える。

高尚 掌を下に五指の指頭を左にさした右手を鼻の下につけ(ちようど人差指の側面がつく)まっすぐに、それを右へ引く。

皇族 天皇——親族

校正 左掌の上に(印刷のゲラ)右手の人差指で、二三度位置を変えて短い線を引く。

(誤植を消す)

洪水 左手の五指の指頭前方にさし、右向けた左掌(堤防)に、五指の指頭前方にさし掌を上向けた右手(水面)をつけ、その水面を上へふくれ上るようにし、左手(堤防)を越さして外へ出す。

工場 「工業」と同じ手まね。

講堂 「講演」「演説」と同じ手まね。

強盗 両手で覆面をする身振りをして、右手の人差指(兇器)を突き出す。

コーヒ― 五指の指頭を前方にさし掌を右

側に向けた左手をまるく彎曲してコーヒの茶碗を形どり、右人差指をスプーンとして、茶碗の中をかき廻わして、飲む身振り。

工夫(鋸夫) 鶴嘴を振り上げて、打ち降す身振り——男性

幸福 五指の指頭を上をさし掌を内側に向けた手の親指と人差指の間を開いて顎を下から挟み撫で降す。二度ばかり繰返す。

公平 指頭を前方にさした人差指(上に)と親指(下)の間をかなり開いて両手をびったり合わせてから、左右に両手を離して行く。人差指と親指が二本の平行線を描くわけである。「平均」「普通」の手まねともなる交替 「変わる」「変える」と同じ手まね。

皇太子 男性(中指) 右手を左の掌にのせ、眼の上辺りにさし上げる。

皇太后 天皇——母

校長 学校——主あそび

交通 「公園」と同じ手まね。

功名 腕前 —— 名を挙げる（「揭示」と同じ手まね）

高等 (イ) 高等学校。白線の帽子—学校。

白線の帽子は、白（人差指の指頭で歯をさす）を表わして、人差指と中指の二指で額の上を横に線を描く。(ロ) 高等（下等に対する）「高尚」と同じ手まね。(ハ) 高等（智的な）考え—高い（掌を下向けた手を肩の辺りから高く上にあげる。）

鉱物 石—いろいろ（物）

高慢 五指の指頭を集めたのを、鼻頭につけてから、前へ引き出すようにする。即ち天狗。

効用 「適する」と同じ手まね。

誤解 思い—間違い。

互角 掌を内側に人差指と親指の指頭を下方にさした左右の手を下に重らし、両腕を×

形に交叉させて、同時に両手の人差指と親指の指頭を合わせる（「同じ」の手まねの要領）

小刀 (イ) 折り曲げて鞘におさまった小刀を鞘から伸ばして出す両手の身振り。(ロ) 左の人差指（鉛筆など）を右の人差指（小刀）でけずる身振り。

故郷 生れる—処（或は国）

国際 国—国—關係。（胸の前後寄り）に「国」の手まね、更に左よりに「国」を表わす）

告白 (イ) 正直—云う。(ロ) 五指の指頭を上にかし掌を上向けた右手を口許から前にさし出す。口から吐き出すこと。

午後 「正午」の場合の二指を右へ傾ける。或は二指を前方に落す。

極楽 仏—国

心 人左指で腹部をさす。

心得 憶えしっかり。

試みる 握り拳にして手甲を上に向けた両手を手首のところをX形に交叉して、同時に両手の手甲を下向けにねじる。その時小首を少し傾しげる顔の表情。

快よい 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手をびったり胸につけ、上下にさすり上げ降しする。胸がせいせいした表情。「嬉れしい」「面白い」と同じ。

午前 「正午」の場合の二指を左へ傾ける
乞食 右手で鈴を振り鳴らす真似をして、左手掌を上向け、物を乞う身振り。

故障 (1) 機械の故障。「機械」を表わす手をとめて、小首を傾しげて——「悪い」の手まね。(2) その他の故障。(1) 忙しい——むつかしい。(2) 用事——ある——むつかしい。

答え——右手の指頭を上斜め左にさした人差指と指頭を左にさした親指。左手の指頭を上

斜め右にさした人差指と指頭を右にさした親指。この両手の互いの人差指の指頭と、互いの親指の指頭をつけ合わして、△形をつくる。これは算数での問題の「+」「-」で示したことだから来たと思えばよい。

答える 答え——云う。

御馳走 うまい(美味)——いろいろ。

誇張 両手で螺貝を持つ手つきをして(螺貝の螺旋の輪郭を表わす心持ちに両手を動かす)口で吹く身振り。

滑稽 おかしい——おかしくて、腹が痛い(拳で脇腹を叩たく)

孤独 独り——淋しい。

如く 掌を左側にして指頭を前方にさした人差指と中指を上下に振る。

殊に 五指の指頭を集め合せた右手のその指頭で、左手の腕、下膊部に手首の辺りから上へ△形を描き降す。「特に」「特別」の手

まねと同じ。

言葉 「言う」と同じ手まね。

好む 指頭を上にした親指と人差指の間をV字形に開いて、顎を下から挟むようにしてから、下へ引き降すと同時に両指の指頭を合わせ閉じる。(掌は内側)

この手まねの位置が顎にあるので、食物の好みから出たものと思われる。即ち、「おいしくて肘がはずれる」程で「好む」「好き」となったものか。

拒む (イ) 首を振り、腕を曲げて肘を横へ張る(肘鉄砲の形)(ロ) 五指の指頭を上にして掌を前に向けた両手を左右に並らべて斜め前方に突き出す。受けつけないと云うこと
五分五分 掌を内側に親指と人差指の指頭を下方にさした両手を左右に×形と交叉して両手の二指の指頭を合せ閉じる。「同じ」手まねと同じ要領。

胡麻化す 「狡猾」と同じ手まね。

米 右手人差指で歯をさし(「白」の手まね)、その人差指(指頭を左にさし)を左手の親指と人差指で輪にした上(他の四指は伸ばしたまま)最中にさしわたすように置く。

御指免なさい 「謝まる」と同じ手まねをすればよい。

御免御免(悪るかった悪るかった)五指の指頭を上にしたし掌を左側に向けた右手の親指を下口唇につけ、他の四指を波打たせる。「すまないことをした」「拙いことをした」の意味の「御免御免」である。

困る 誰れもがするように、頭を掻く身振
恐い 「恐れる」「恐ろしい」と同じ手まね
こわれる(こわす) 両手で一枚のせんべい
か何にかを持って二つに裂き破る身振。

殺す 左手の、対象が男性なら親指、女性なら小指に、右手の人差指で突き刺す身振を

して——「死ぬ」の手まね。

こらえる 五指の指頭を左にさし掌を下に向けた右手を僅かに彎曲させて、腹上部にびったりとつけて下へ圧えるように降す。腹の虫を圧えること。

衣（法衣）僧——着物。

根本 「根」と同じ手まね。

サ

サード（三墨手）「司^{つかさど}る、（政治と同じ手まね）の手まねの姿態のまま、右手（腕を立てた方）で、「三」の数を表わす。☞

採決 会議——決める。

最後 「終り」と同じ手まね。

最初 「初め」と同じ手まね。

裁判 指頭を上にした両手の親指を左右に対立させ、交互に上下させる（批駁の手ま

ね）、考える表情をして——見きわめる（「監視」と同じ手まね）

財布 左手の掌を右側に向け、指頭を前ににした五指を曲げて、親指と他の四指でコの字形をつくり、財布の口を形どり、右手で「金銭」を表わしたのを、その財布の口にさし入れ、その手で財布の口についているとめ金をねじってしめる身振をする。

裁縫 両手の夫々人差指と親指の指頭をつけ合わせて、一方に針を一方に布を持った心得で、両手の手首を動かし左へ移動させる。物を縫って行く身振。

採用 男性或は女性を表わした左手の指の少し上で、右手の指頭を下にした五指を集めてものをつかむようにして、同時に両手を胸元に引き寄せる。

幸い 「幸福」と同じ。
遮る 身をかばうように、左手を右胸脇に

びったりつけ、五指の指頭を上にしし掌を内側にした右手を腕の肘を軸にして、宛う、踏切りの遮断機を降すように、左へ降す。

竿 人差指と親指で輪に（他の三指は開いたまま）した両手（左手の掌は内側向き、右手の掌は前向き）を胸の前で或間隔を置いて斜めに（左手は少し下に）竝らべて、同時に両手を区切るように少しづつ停止させながら離して行く。竿（竹）の節を表わす心得。

坂 「道」の手まねの両手の運動を斜め上に向ける。

境 「遮る」と同じ手まね。

逆さ (4) 上向けた左の掌の上に、右手の指頭を下にさした人差指と中指を一旦載せて（人の立つ姿）すぐに、人が逆立ちするよう二指の指頭を上に向け変えて再び左掌の上に乗せる。

(4) 右手の拳を手首のところへ額につけ、

左手の拳を手首のところへ後頭部につけてから、同時に両手をぐるり頭をめぐらして、その位置をとり変える。前後を逆さにする。 (4) 掌を下に向ける五指の指頭を集め合せて物をつまむようにした左手。その下に少しの間隔を置いて掌を上向け五指の指頭を集め合わせた右手の位置をぐるりと上下に反転させる。上のものが下に、即ち逆さになること。

探す 人差指と親指で輪をつくった手（他の三指は上に伸ばしたまま）を眼の前近くに持って行き、その輪をぐるぐると上下左右に廻わす。眼を皿にして辺りを見廻すこと。

酒盛 人差指と親指で猪口を持った姿態にした両手を交互に前に出しては手前へ引き寄せ、（献盃）、酒を飲む真似。

詐欺 騙す——金銭——盗む。

作業 「仕事」と同じ手まね。

咲く 掌を上に向けた手の五指の指頭を集め合わせ手をぱっと花咲くように開く。

桜 掌を上向け五指の指頭を右にさした左手の手の首の上に、掌を下向け五指の指頭を左にさした右手の手の首を重ね、互の手の首を軸にして両手をねじって回転させ両手の位置が上下に変わる。

作家（文士） 掌を上向け五指の指頭を右にさし指の間を広く開いた左手の上に、これも掌を上向け五指の指頭を前方にさし指の間を広く開いた右手を重ね、両手の五指で原稿用紙の枘形をつくり、右手で字を書く身振。次に人（男性或い女性）を表わす。

作文 (4) 「作家」の手まねの「人」を省く。(5) 掌を内側に向け指頭を右にさした左手の親指と他の四指を曲げてコの字形をつくり（封筒の口）それへ掌を内側にした右手の五指を指頭からさし入れる。封筒に手紙を封

入する身振り。この手まねは、「手紙」を表わすものであるが、「作文」「綴方」「文章」にも通ずるようになった。

酒 人差指と親指で猪口を持った姿態にして飲む真似をして、掌を横に顎の下を撫で（或は軽く叩いて）その掌で額を一つ軽く叩たく。顎に掌をやるのは、「うまい味」を意味し、額を叩たくのは、ほろ酔いの人がよくする手の身振から来たものか。

避ける 拳にした両手の腕の肘を立て胸の前に併立させて肘ごと左胸脇の方に引き寄せると共に上身体を左に傾ける身をかかわす身振である。

匙 人差指と親指の指頭をつけ合わせ匙の柄を持った心得で物をすくう真似をすればよい。

尺 尺を持った手つきで、三十センチ位の間隔をおいた両手を、左へそのまま、物の長

さをはかるような身振りをする。

座敷 畳——どうぞとばかり掌を上向けた

両手を前斜めから引き寄せ——室

雑誌 月刊(月—刷る—本) 週刊(週—刷

る—本)

砂糖 「甘い」と同じ手まね。

覚る 「知る」と同じ手まね。

淋しい 額の生えぎわのところ、人差指

と親指の指頭を合わせて、一本の髪の毛をつ

まんで、前へ引き出すようにする。所在なく

淋しさに髪の毛を一本つまみ出し考え込む姿

座布団 両手の人差指で小さな四角形を描

いて坐るの手まね。

差別 「別」と同じ手まね。

作法 指頭を上にした両手の人差指を胸

の前で向い合わせて、同時に両指をかぎ形に

曲げる。人がお辞儀し合ってる様を模写した

もの。

サボル 「怠け」と同じ。

様々 「いろいろ」と同じ手まね。

寒い 「冬」を見よ。

侍 掌を下に向け、指頭を前方にさした人

差指と中指の手を頭の上に置く(ちよんまげ)

次に両手の人差指を左腰脇に交叉してつける

(刀の二本差し)

醒める 掌を前に向け指頭を前方にさした

人差指と親指を閉じ(指頭をつけ合わず)て

眼の横につけて、両指をパツと開く。眼が開

いたこと。

更に 「一層」と同じ手まね「その上に」

とか「重ねる」とか倍にす」とかの意味。

去る 「行く」の(向)と同じ手まね。

猿 左手の手甲の上を右手で搔く、猿の習

性を表わしたもの。

策 掌を上に向けて、五指を少し彎曲した

左右両手を斜めに重ねて、籠の編目をつく

り、両手を左右に離して共に上へまらく籠の形を描く。

騒ぐ 掌を前に向けた手の甲を口もとにつけ、五指の指頭を集め合せては開き、開いては集める運動をくり返す。「わめく」こと。

散会 「会」の手まねをして、両手で左右に「去る」手まね。

参観 「探す」と同じ手まね。見て廻ることを表わす。

参詣 寺神社を拜む。

賛成 右手を挙げる。

産婆 生む一介抱一女

散髪 ジャッキを持った手つきで、髪の上を刈る身振り。

散步 指頭を下にさした両手の人差指を前にならべて、足を運ぶように交互に前に徐うに進ませる。

算術 人差指中指薬指で三の数を表わして

指頭前方に掌を上向けた両手を左右からかち合わせて（互の掌の脇がつけ合う）は、左右に離す運動を二三度くり返す。互の数（三）を合わせては離す加減算術。

残念 「遺憾」と同じ。

シ

死（死ぬ）合掌した両手をそのまま、横たえる。

試合 「競う」と同じ手まね。

思索 両腕を胸に組み、「考える」の手まね。

週間 左の手で数の「七」を表したのを、右の手の人差指を、その「七」の周りをぐるりと一周させて、「一」の数を数わすと一週間となる。週間なら、二週間一二。

○一週間を、寝る一七としてもよい。二週

間ならば、寝る七一―。

姑 夫―(或は妻)―母

甥 夫―(或は妻)―父

塩 白―辛―砂

銃 両手で銃を持ちかまえて、右手の人差

指で引金を引く身振。

鹿 頭の上右寄りに、左右両手を上下にし

て鹿の角の枝形を模写する運動。

仕方がない かまわない―諦める。

しかし 五指の指頭を前方にさし下に向け

た掌をくると上向けに反転させる。

叱る 指頭を上にした親指を前に押しつ

けるように突き出す。

叱られる 「叱る」の親指を自分の額の上

に押しつけるようにする。「叱る」の受身の

形をする。

時間(時刻) 右の手の親指と人差指。そ

の親指の方を(左の手に握らせて(左手の親

指と人差指の間に右の親指をさし入れ姿た

態)時計のネジを巻くように握られた親指を

軸にして人差指を廻転させる。右の人差指は

時計の針の廻る心得。「時計」の手まねにも

なる。

「今何時ですか」今―時間―いくつ。「い

くつは、右手の親指より順に五指を折って行

く。

「今は三時です」今―時間―三

式 掌を前に向け五指の指頭を上にした

両手を胸の前で前後に並らべて同時に五指を

曲げる。列席者が一同敬礼する様を模写した

もの。

始業 (イ) 習う 始める。(ロ) 仕事―始め

る。

試験 「試みる」と同じ手まね。

地獄 鬼―国

仕事 掌を上向け、五指の指頭を左にさし

た右手、掌を上向け、五指の指頭を右にさした左手。この両手を腹の前で或間隔を置いて左右にし、同時に両手を左右に忙しげに往復させる。

事実 「ほんとう」と同じ手まね。

支出 「金銭」を表わした手まねを前へさし出す。

磁石 左手の拳（その手甲は左側に向ける）の上に、指頭を前方にさした人差指の右手をのせ、その人差指を磁石の針の動くように左右に微妙な運動をさせる。

辞書 「本」の手まね（合掌の両手を本の形に開く）を、辞書の部厚さを表現するため合掌の手を横にねかして、右手（表紙）だけを重々しく開く。

師匠 「先生」と同じ。

地震 五指の指頭を前方にさし、掌を下向けの両手を左右にびったりつけて、前後に揺

さぶる。

次女 第二―生れる―女性（葉指）。「第二」は第一（初め）と同じ要領で掌を下に向け五指の指頭を左にさした右手を右へ引くと同時に中指と人差指を残して他の三指を折り畳む、即ち二の致。

静か 掌を下に向け五指の指頭を左にさした右手を胸の下部辺りにつけ静かに下に圧え降して行く。心の静まる様。

自然に 「時の流」の手まねで、指頭を前にさした右手の人差指を右から左へ線を描いて移動して行く途中、静かに自然な調子で人差指の指頭を上をさして上げて行く。

思想 「思う」「考え」と同じ手まね。

地藏さん 石―仏―と手まねして、首にはたき掛けをつける身振り。

子孫 「祖先」（参照）の場合とは反対に左手の男女を徐々に下降させて行く。

次第に「少し」の手まね（即ち人差指の先僅か下に親指の指頭をつける）をして、徐々に親指の指頭を人差指の根元にずり下して行く。

自重 握り拳の両手を下腹部辺りに、たてに上下に重ね、そのまま上へ引上げる。押をしめること。「しっかりする」の手まねにもなる。

室 掌を内側にして五指の指頭を左にさした右手。これも掌を内側にして五指の指頭を右にさした左手。この両手をかなりの間隔を置いて平行に前後に並らべ二形をつくり次に両手の五指の指頭を前方にさし互に掌を向いわせて前と同じ位の間隔を置いて「」形をつくる。即ち一次二次の両手の姿態で□形を造るわけで、**室**、部屋の仕切り壁を表わす。

實際（実に） 「ほうとう」と同じ手まね。

「しっかり」「自重」と同じ手まね。

失業（失職） (ハ) 誰れもがするように、自分で自分の首を切る真似をして、両手をふらぶらさせる。(ロ) ルンベンの「ル」の指文字（親指と人差指、中指の三指で片仮名のルの形にした）の手をぐるぐる廻わす。

知っている 拳にした片手で胸を叩く。即ち、「胸にある」「胸におさまって知っている」こと。

嫉妬 人差指と中指の指頭で鼻頭の上を交互に打つ。更に両手の人差指で頭に角を表わしてもよい。

失望 「がっかり」と同じ手まね。

質問 「訊く」と同じ手まね。

してから（それから） 上向けた左手掌の上に、右手の掌を叩き降して未来の手まね。即ち右手の掌を前方へ押し出す。左手の掌の上に右手の掌を叩き降すのは「事」の完

了。

失恋 「恋」の巾の手まねをして、そのハ
ート形をつけた左側に、右手の人差指を突き
刺す。

支店 店——支部

自転車 両手で枝ハンドルを操作する身振
をして、指を前方にさし掌を下に向けた両手
で交互にペダルを踏む真似。

自動車 円まハンドルめ操作する身振。

忍ぶ 「こらえる」と同じ手まね。

芝居 「演劇」と同じ手まね。

屢々 「時々」のと同じ手まね。しかし、
この人差指の運動の間を短くし度数を多くす
る。

支部 五指の指頭を集め合わせた両手を左
右にその指頭でつけ合わせ、左手をそのまま
残して、右手を前へ糸を引き出すように出し
てとめる。

自分自身（自分独り）「私」と人差指で自
分の鼻をさして、その人差指の指頭を胸につ
け、その指頭で胸を上へすり上げて、自然に
指を離して、前に出す。

資本 商い——初める——金銭。但し、この
「金銭」は右胸脇で、積み重ねるように下か
ら上げて行く。

次男 第二——生れる——男性（中指）

島 左手の掌を下向け、五指をまるく彎曲
して、それを島として、一方上向けた右手
の掌を海面として、左手の周囲を巡ぐらせ
る。

姉妹 「兄弟」と同じ要領で両手の薬指を
胸の前で平行にならべ一方を少し下げる。

しまった 下手——残念（遺憾）

自慣 鼻頭を五指でつまむようにして、そ
のまま手を前へ引き出す。鼻を高くすること
事務 左手肘を机につけた姿態をして、そ

人差指で円を描く。(同) 掌を下に向けた右手を左肩辺りから前へ弧を描いて右へそれから後へ廻わして自分の体の周囲を意味させる。

収益 収入―儲うけ。

集合 「集まる」と同じ手まね。

習慣 毎日―習わし。

宗教 仏―キリスト―神―いろいろ―教え

終始 初め―から(時の流れ)―終り

終目 「一昼夜」と同じ手まね。

住所 「家」の手まねをして、左手の方をその姿態のままに残して置き、右手は五指の指頭を前方にさし、掌を左側に向けて、左手の指頭すれすれに上から下へ切り降すようにする。

就職(就任) 左手掌の上に右手の五指の指頭を集め合わせたその指頭をつけ、そのまま前にさし出す。契約に調印した書類をさし出

す意味か。

修身 掌を上に向けて拳にした両手を左右から二度ばかり打ち合わせる。

囚人 掌を下向けて拳にした両手を手首のところで交叉させる(両手をくくられた姿態)―男性(或は女性)

修繕 こわれる―造る

収入 「金銭」を表わした手を胸もとに引き寄せる。

習得 五指の指頭を上になし掌を前に向けた手を前方から頭の方へ引き寄せながら五指を握りしめ、頭の上につける。習得すべきものを頭に引き寄せ覚え込むと云うこと。

宿直 監視―寝る―当番

祝日 五指の指頭を上になし掌を内側にした両手を胸の前で手首のところでX形に交叉する。

国旗を交叉した模写、即ち「旗日」であ

る。

祝辞 祝う——云う

主人 家——男性（少し上へさしあげる）

出版 印刷——書物

主任 責務——男性（女性）

首領 「親方」と同じ。

生涯 生れて——から（時の流れ）——死ぬ

——まで（終り）

小学校 指頭を上にした右手人差指を、

指頭を前方にさした左手の人差指と中指の二

指の間に、隙間を置いて挟さむ「小」の形を

つくる——学校

上機嫌 「機嫌」の(ウ)

昇給 「給金」を表わして、胸もとに引き

寄せた「金銭」の手を上へ顔の前辺りにあげ

る。

商業（商売商い）と同じ。

正午 顔を時計の面として、人差指を時



針、中指を分針として、この二指をびったりとつけ合わせて、鼻筋の上に置く。正午の時の位置。

証拠 「揭示」と同じ要領で表わす。明らかに見せられたものと云う意。

招集 ——招く集める

上手 右手掌で左手腕を下へ撫で降す。

正直 四指を集め合わせた両手を腹の上で

指頭で左右につけ合わせ、一方の手を下方

へ、他の方を上方へとまっすぐに離して行

く。心がまっすぐである意味。

証書 紙——印判——頂く

少年少女 (ウ) 指頭を上にした右手の人

差指を、左手の指頭を向にした中指と人差指

を広く開いてさし狭さむようにする（各指の

間に間隔がある）即ち「小」の字を形どり

——男性（又は女性）(何) 齡——低い（下に

向けた掌を下へ降す）——男性（女性）

小心 「寛大」の手まねと反対、即ち、腹

の上で両手の人差指と親指で円を形どつたの
を、その円を小さく縮める。

常人 (何) 變態者に対する有聴者（普通人）

左手指頭を上にした人差指を口もとから

前にさし（出し物云う）、右手指頭を上はさし

た人差指を耳もとから右方へさし出す（聞え

る）この両手の運動は同時に行う。

(何) 一般の常人。普通——人々

小説 「作文」の(何)——話

醸造 酒（或は醤油）——造る

招待 掌を上向けた両手を右方斜め前にさ

し出し「さあ、どうぞ」とばかり、両手を引

き寄せる。

上達 「上手」「うまい」の(何)の手まね

で、右手で左手の腕を下へ撫で降す運動を徐

々に行う。次第に上手になるの意。

冗談 五指を集めた両手を上下にして互の

指頭でにつつき合わせる。

承知 (何) 承知した。「解つた」の手まね

(何) 承知している。「知っている」の手まね。

商店 商い——店

商人 商い——人々

娼婦 人差指の爪の上に隣りの中指の指頭

をつけて、穴をつくつたのを眼にもって行

き、のぞき見るようにする。——女性、昔の

遊廓で格子の間から又は風穴から娼婦が外を

のぞいて、遊客を待っていたことから出来た

手まねか。

勝負 指頭を上にした親指の左右両手を

胸の前で対立させ、交互に上下にあげ降しす

る。

丈夫 「健康」と同じ。

消防 「火事」の手まねをして、両手でポンプのホースの筒先を持って左右に水をかける身振。

書記 事務——男性（或女性）

職業 「仕事」或は「商い」

職工 工場（機械）^{男性}（女工）

諸君 掌を下向けに右手を左肩辺りから前の空間を右へ弧を描いて運動させる。誰れもがする満堂の聴衆によびかける身振り。

処女 結婚——まだ——若い——女

書齋 本——見る——字を書く——部屋

除籍（除名）左手掌の上に、右手の五指を集めた指頭をつけ、その手を手前の方へ、払い除くように引き離す。「就職」「就任」の反対の運動。

署長 警察——主人

シヨート（遊撃手）野球の遊撃手の「遊」

をとって、即ち「遊ぶ」の手まねをすればよい。

書道（習字）左手肘を机につけた姿態をして、その左手の手甲の上に右手の手首をのせ、文字を書く身振り、これは「事務」と同じ要領の手まねであるが、文字を書く身振表現は大きくすること。

書物（本）合掌した両手を書物の形に開く

庶務 左掌の上に、右手の人差指の指頭で二三行ばかりの線を書く。いろいろな事務の書類に線を引いて片づけて行くと云うこと。

助力 骨折り（掌を下に向けて拳にした左手の腕の上を右手拳で叩たく）——与える（右手掌を上向けて前にさし出す）

上品 「高尚」と同じ。

醬油 小指の先を僅かになめて見る。人が醬油の味を見るように。

知らない (4) 右胸脇に右手の五指の指頭をつけ、胸の上の埃を払い落すように上下に

運動させる。(何) 全く知らないと強調する場合
合は片手の掌で両眼を被う。

知る 「賢い」と同じ手まね。

標しるし 「揭示」と同じ手まね。

白い 人差指で自分の歯を指さす。歯の
「白さ」を示したものの。

城 指頭を上にした人差指をまるめに曲
げて両手を左右に向い合わせる。城の鯨を描
写したものの。

素人 掌を下に向けた左手を拳にしたその
腕の上に(手首に近いところ)に右手の人差
指を一の字につける。昔の軍隊の袖の一本筋
の新兵から来たもの。

神經(神經質) 指頭を上にした右手の人
差指を右頭のこめかみ辺りに横づけして、そ
の人差指を曲げ伸ばししながら上の方へ通わ
せて行く。神經質な表情にはこめかみ辺りに
青い動脈の筋が走ることから。

診察 脈をとり(自分の左手の脈を右手で

とり)——聴心器を耳につけ、患者の胸にあ
てる身振——小首を傾け考える表情。

新参 「素人」と同じ手まね。

神社 左右両手を家形に合わし、五指を互
の指の間に入れて交叉し、凡ての指先を上
に出し、神社の建物の形をつくる。

紳士 高尚——男性。

信じない 指頭を上にした親指と人差指
(人差指以下四指は折り曲げられてある)の
間で顎の下を挟むように支え顎を上へ突き上
げる。「一杯喰う」の手まねでは、顎がはず
れる身振をするのに対して、その逆の意味を
表わすために、顎を上へ突き上げる訳である
信ずる (何) 委かせる——大丈夫(ことが出
来る)——思う (何) その人(男性或は女性)
——云うこと(いろいろ)——嘘——ない——大丈夫
——思う。(何) 信心すること。伝(神)——心——

拝む。

親戚（親類）唯に親戚の者を表わすには、肉親一人々（或は単一に男性、女性）

但し、右頬を人差指と中指で、軽くつまんで肉親を表わしてから次の人々（或は単一の男性なり女性）を示すには、頬からかなり長く離してする。即ち、頬と人々を示す位置とは距離を置くこと。

親切 心—やさしい—愛する

心臓 心臓の位置の胸の上に右手をあてがい、心臓の鼓動のリズムに五指で胸を打つ

新聞 掌上向けて拳にした左手を、右腹脇につけ、これも拳にした右手の腕を立ててその肘を左手拳の上に載せると同時に両手の拳をぱつと開く。

心配 「恐れる」「不安」と同じ手まね。

審判 勝負—監督。

進歩 (イ)「上達」と同じ手まね (ロ) 賢い

「知る」の人差指と親指を開くのを徐々にする。少しづつ、知恵が開けて行くこと。

辛抱 「こらえる」と同じ手まね。

新年 「一月一日」で表わす。

ス

水泳 両手で泳ぐ身振り。

水瓜 半弧の水瓜を両手に持って、食べる

身振りそのまま。

水道 水道の蛇口の上の栓をねじる身振り。

水夫（水兵）「海軍」と同じ手まね。

水曜日（水） 掌を上に向け、胸に平行に五指をこまかく波打たせながら、水の流れを表現する心持で横へ移動させる。

数学 「算術」と同じ手まね。

図画 「絵」と同じ手まね。

好き（好く）「好む」と同じ手まね。

スキー 両手にスキーのストックを持って後方に突く身振り。

空腹 五指の指頭を下にさし掌を内側にした両手で腹さすり降す。腹の皮がべちゃんこになった空腹。

過ぎる 「終り」の手まねでは、即ち五指の指頭を前方にさし掌を右側にした左手に向って、五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を直角に接近させ突当らせたのを右手を左手の上を乗り越させると「過ぎる」の手まねとなる。

優れる 左手の五指の指頭を上にし、前向けた掌に、右手の指頭を上にした人差指をつけてから、その人差指を上へすり上げる。左手の五指より、右手の人差指が上に即ち頭角を現わしているということになる。

直ぐ 「既に」と同じ手まね。

少し 掌を上に向けて、中指薬指小指の三



指を折り曲げて、指頭を上にした人差指の先僅か下に、親指の指頭をつける。

僅か（少し）見せている。即ち「僅か」、「少し」である。

すし (イ) 巻きすし、掌を下向け、丸い物を掴むように五指を曲げて左右に両手をならべて、前へ物を巻くようにする。巻きすしを巻く身振り。(ロ) 握りすし、左手の上向け掌の上に右手の人差指と中指をたたき降すと、左手の五指で、その二指を握り次に握った飯の上（左手掌）に看をつける身振り。

鈴 掌を下に向け五指を少し曲げさせた手

を耳もとで左右に振る。

涼しい 「秋」を見よ。

進む (イ) 隊列が進む。「遠足」の手まねを活発に前へ進ませて行く。(ロ) 進む(技術の上達)。「上達」の手まね。(ハ) 文化が進む。「進歩」の回の手まね。

ステッキ 「杖」をつく身振り。

既に 五指の指頭を下にさし掌を内側にだらりと垂れた両手(幽霊の垂れた手)を素速やに左右に振る、「ええ?、もう?」と驚いた身振り。

素的 大へん良いと云う意味なのだから、「良い」の手まねを両手に大袈裟にする。即ち、両手を前後に重ねて、「てんぐ」を更に高く表わす。

ストライキ 「戦う」と同じ手まね。

素直 「正直」と同じ手まね。

凡て 掌を下に向け五指の指頭を前方にさ

した両手を左右につけ合わせ(両手の親指が付く)てから、両手を左右に離し何れも下へ弧を描いて降して行き(自然に両手の掌は上向きになる)再び下で両手を合わせる(両手の小指が付く)即ち両手で一つの全き円を描いたことになり、「凡て」「みんな」となる。

統べる 五指の指頭を前方にさし、掌を下に向けた両手。夫々左右斜め前方にさし出してから、徐々に左右から相寄らしめながら、掌を向い合わせ(右の掌は左側にし、左の掌は右側に向け)それと共に両手の五指を折り曲げて行って最後に握り拳にして、胸の前で上下に重ねる。凡てのものを集め束ねることになる。(イ) すべすべする。五指の指頭を上

にさしに掌で頬を塗り上げる。(ロ) なる。左の手甲の上を右手の掌をのせ前へ送り出させる。

スポン 両手で一方の脚を円筒形に囲み上

へ穿くように上げる。

住居 「住む」(居る)——家。

すまないことをした 「御免御免」と同じ
手まね。

済む 「終り」と同じ手まね。

済ます 左手掌の上に、右手の人差指の指
頭で字×を描く。

速やか 「少し」の手まねの手の姿態のま
まで(掌を上向け小指薬指中指の三指を折り
曲げ、指頭を上にした人差指の先僅か下に
親指の指頭をつけ)手首を軸にして掌を上
下に早やく動かせる。

住む 「居る」と同じ手まね。

相撲 握り拳にした両手で、左右夫々の膝
を交互にたたく。

炭 「黒い」の手まねをして、人差指と親
指で輪にした両手を左右に間隔をおいて並ら
べてから左右に離して行き横に棒状形を描

く。

掃るい 「狡猾」と同じ手まね。

刷る 「印刷」と同じ手まね。

坐る 右手の人差指と中指で人間の二本の
脚としてその二指を左手掌の上で坐るように
曲げて置く。

セ

税 収入——部(左掌の上斜めに右人差指
の指頭で線を描く)——役所——金を出す。

誠意(誠実) 正直——心——さし出す(両手に
て前に捧げる身振り)。

正確 間違いない——はっきり。

性格 心——癖。

生活 生きる——毎日。

精勤 一生懸命——働く(仕事)。

生計 毎日——食べる——金銭。○絵を描いて

生計をたてる。絵—売る—金銭—毎日—食べる。

成功 「腕前」の手まねをして、鼻頭の上に拳を持って行って、「鼻高」即ち「天狗」
「よし」を表わすがこの場合左右両手の拳で更に鼻高にするがよい。



政治（政府）五指の指頭を右にさした左手掌を下に向け、胸の右脇辺りにびったりつけて、その手甲の上に右腕の肘を載せ、その右手五指の指頭を上

にさし掌を左側に向ける。「掌どる」と云う意味。

性質 「性格」と同じ手まね。
聖書 キリスト（十字）——書物。

製造 「造る」と同じ手まね。

生存 生きる——在る。

精神 「心」と同じ手まね。

贅沢 「寛大」の要領で腹を広く見せて、金銭を表わした手を何度か繰り返して前へさし出す。ふんだんに金を使うこと。

成長 右手の掌を右肩に置いてから、上へまっすぐにあげて行く。脊丈が伸びて行く様。

晴天 「明るい」「昼」の手まねの要領で、両手の掌を頭の上辺りで、上向けにしてさっと左右に離す。

生徒 習う—人々

政党 政治—連盟

稅務署 人々—収入—一部（左手の掌の上に斜めに右手人差指の指頭で線を描く）—集める（金銭を表わした両手を斜め前左右から胸もとに引き寄せる）—役所

整理（整頓）五指の指頭を前方にさし掌を

左向にした右手。五指の指頭を前方にさし掌を右向にした左手。この両手を胸の前右寄りに或程度の間隔を置いて平行にならべてから、それをそのまま胸のちょうど前に置き替え、更に左へ置き替えて行く。

乱雑になった物件をきちんと並べ置く身振
生理日 「羽織」の手まねをする。以前大阪市立雙鴨学校の上級の女生徒の間で、何にか約束的に用いられていた手まね。

成年 大人——になる。

青年 若い——人々。

誓約 (イ) 神(人差指で天をさす)——約束
(ロ) 約束——拇印(左掌の上に右手の親指の指頭を押しつける)

西洋 右手の人差指を曲げて指頭を眼に向け、その指をクルリと輪に描く、青い眼を表現したもの。「西洋人」なら、それに「人々」をつけ加えればよい。

勢力 「力」と同じ手まね。即ち拳にした手の腕を曲げて力瘤をして見せる。

世界 五指の指頭を前方にさした掌を左向にした右手、五指の指頭を前方にさし掌を右向にした左手、この両手をかなり広い間隔を置いて平行に向い合わせて、共に五指をまるく彎曲させると一箇の大きな球(地球儀)を両手に持った姿態になる。その両手をそのまま、手首を軸にして前から下へ球を回転させるような両手の運動。即ち地球の自転。

悴 「息子」を見よ。

席 「椅子」と同じ手まね。

石灰 白い—粉。

石炭 黒い—石。

責任 (イ) 右手の五指を彎曲させた掌を右肩の上にかぶせるように置く。肩に負う、即ち責任である。(ロ) この手まねを左右両手で(即ち右掌は右肩に左掌を左肩に置く)表わ

すもよい。

関取 掌を内側にし、五指の指頭を下にさした両手を左右に並らべて腹にあてがい、角力取りのまわしの上につける「下げ」を表わし、左右両手を拳にして、夫々の膝をたたく。——男性

絶縁 (イ) 「関係」の手まねの鎖形に組んだ両手を切り離す。(ロ) 左手の掌を右胸脇下にぴったりつけ、五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を上から左へ斜めに踏切りの遮断機を降すように空間を切り落す。

絶交 「絶縁」と同じ手まね。

絶対 「必ず」のイの手まね。「決まっている」と同じ手まね。

絶望 (イ) 未来—むづかしい—諦らめる。

(ロ) 「がっかり」と同じ手まね。

説明 掌を上向けた左手の上を、掌を左側にした右手の五指の指頭で軽く二、三度たた

くようにする。一般に物事を細く説き聞かせる時に、覺か机の上へする手の身振。

説教 「説明」と同じ手まね。

背広 指頭を上にした両手の親指で夫々胸の左右に背広服の波形の折襟を描く。

善 (イ) 「よろし」の手まね。

(ロ) 道徳—に叶う。

膳 食事(左手の掌を食器として右手で食物を口に運ぶ真似)—机。

詮方なし むづかしい—諦める。

選挙 掌を下に向け五指の指頭を集め合わせた左右両手(左右夫々の手に票を持つ心持)を交互に票を函にさし入れる身振。

先月 月—一つ—過去

洗濯 両手で衣類を持ってもみ合わせ洗う身振。

戦死 戦争—死ぬ。

専心 「一生懸命」の手まねをして、五指

の指頭を前方にさし掌を左側にした右手をま
っすぐに前方へ突き進ませて行く。

前進 (イ) 五指の指頭を上をさし掌を前向
けた両手を左右に並らべて一列横隊の形をつ
くり、そのまま前へ押し出す。(ロ) 五指の指
頭を上をさし掌を左側にした右手、五指の指
頭を上をさし掌を右側にした左手。この両手
を前後に並らべて一列縦隊の形をつくり、前
へ進ませて行く。

潜水艦 掌を上向け五指の指頭を右にさし
た右手を水面として、その手前内側に指頭を
上にさした右手の人差指を下からのぞかし
(潜望鏡) 右へ移動させる。

戦争 (イ) 「争う」の(イ)と同じ手まね。

(ロ) 「争う」の手まねでは、左右の人差指の
二指だけを打ち合わせるがこれを左右両手の
五指で同じ要領で打ち合わせる。(イ)を複数的
に表わしたもの。

全体 「凡て」と同じ手まね。

宣伝 「広告」と同じ。

センター 統べる一処。

船頭 両手で艦を漕ぐ身振り一男性

専門 (イ) 医学専門に勉強する。医学一だ
け(唯一つ)一勉強。(ロ) 耳鼻専門科。耳一
鼻一医者。(イ) 時計専門店。時計一だけ一
店。一全滅 死ぬ一死ぬ一凡て一なくなる(ロ)

ソ

象 掌を前向けて拳にした右手を手首廻り
のところを鼻頭につけ、上下にぶらぶらさせ
る。象の鼻の模写。

相違 掌を下に向けて、指頭を前方にさし
た人差指と親指の両手を間隔を置いて平行に
左右に並らべると同時に掌をくるりと上向け
に反転させる。「同じ」の手まねの場合人差

指と親指の指頭を合わせるのに対して両指の指頭が合わず「食い違ふ」意味を表わす。

相応 「叶う」「適する」と同じ手まね。

造花 紙造る—爐—花。

壮健 「健康」と同じ手まね。

相互 「互いに」と同じ手まね。

葬式 死—拜む—式。

想像 「思い出」と同じ要領で表わす。

相談 「打ち合わせる」と同じ手まね。

そうである(と云うことである) 五指の

指頭を集め合わせた右手を右耳に向ってぱつと五指を開く。話とか噂が耳に入ってきて来ると云うこと。

相当 「適當」と同じ手まね。

聰明 「賢い」と同じ。

僧侶 左手で拜む真似をして、右手人差指で木魚或は鉦を叩く身振りをして—男性。

草履 五指の指頭を前方にさし掌を上に向

けた左手の上に五指の指頭を前方にさし掌を下に向けた右手をびったりと重ね合わせて、僅かに叩たく。左手掌を草履として、右手掌を足裏として、僅かに叩たき合うのは歩行の時の足と草履の状態を表わしたもの。

即位 五指の指頭を右にさし、掌を上に向けた左手(位)の上に、男性を表わした右手を下から載せる。

賊 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手で眼の上(額)を被おい、五指の指頭を右にさし掌を内側にした左手で眼の下(鼻の上)を被うい、覆面を表わす。

そして 「在る」の手まねのように、五指の指頭を上(さし)掌を前に向けた右手を前方右斜めにさし出し僅かに前後に動かす。

祖先 先ず、父母を表わした右手をその位置にとどめ、その上に左手で男女を同時(親指と小指)に表わしたのを、その手首を左右

にこまかく動かしながら徐々に上昇させて行く。

育てる 「愛」の手まね、即ち左手五指を彎曲させ掌を下向け、その手甲の上を右手掌で愛撫させるを運動をそのまま続けながら徐々に両手の位置を上へあげて行く。愛撫して成長させて行くこと。

卒業 両手で証書を持つ心持ちで眼の上辺りに頂く身振。

卒倒 眩い——倒れる。

猜む 「嫉妬」と同じ手まね。

その上に 「更に」「一層」と同じ。

その前(時間) 五指の指頭を前方にさし掌を右側にした左手に向って、五指の指頭を左にさし掌を上向けた右手を接近させて行って左手掌に着くばかりになってその右手の五指を曲げて、右へ引き戻す。「その時間」は左手で表わし、「前」は右手で表わす心得。

蕎麦 褐色(茶色)——うどん。

傍 「近い」の手まねを両手手首を左胸脇にびったりとつけてする。

祖父 父の父として表わす。先づ父の手まねをして、その親指を左の手の人差指にて軽くなで降して(頬を人差指でなで降す肉親を意味するのになぞらえて)その手の親指(男性)を右の親指(父)より高い目にさし上げる。

母方の祖父の場合、この要領で母の父とすればよい。母の小指を左の人差指でなで降し、母(小指)

祖母 父の母として表わす。父の手まねをして、その親指を左の手の人差指でなで降して、その手の小指(女性)を右の親指より高い目にさし上げる。

母方の祖母は、母の母とすればよい。

祖父 父方の場合父の両親(親指の父と

小指の母を同時に」とすればよい。母方の場合、母の両親。

また、父母の両親を表わす時もある。即ち、父母を表わし、折り曲げられた他の三指の上を左の人差指でなで降し、その手で両親を表わす。

○曾祖父母、父母の父母のその父母と三重の手まねをする。即ち系図を逆に上へ描き表わす心得。

空 「青い」の手まねをして右人差指で天をさす。

それから (イ) その後の意味の場合。未来 (五指の指頭を上になしし掌を前に向けた右手を肩の辺りから前方へ押し出す) で表わせばよい。(ロ) として、それからの場合。左手の掌の上に右手の掌を叩き降して (事の完了) 一時の流れ。

算盤 「会計」と同じ手まね。

損 左右両手で夫々「金銭」を表わした人差指と親指でつくった輪を胸の前で開いて (五指を開く) 前へ物を捨てるようにする。

夕

田 左腕を前にさし伸ばし、手首のところまで曲げて、五指の指頭を上になしし掌を内側にし、その腕の関節に、五指の指頭を左になしし掌を内側にした右手をのせてから、右へ引いて行く、左手の掌を田の境として、右手を右へ引くのは、田を区切った畔を意味するものか。

鯛 赤一魚。(黒鯛もあるが一般概念として)

退学 「学校」の手まねをして、左手掌上に右手の集め合わせた五指の指頭をつけ、手前へ引き離す。学籍簿から氏名を引き去ること

と。

大学 頭中央前上に両手の前方にさした人差指の指頭をつけ合わせてから左右に離し、頭の上に夫々菱形を後方へ描く。大学の角帽を模写したもの。

退却 「前進」では指頭を上向け掌を前向けた両手を並らべ一列横隊の形をつくり、そのまま前方へ押し出すのに返して、その横隊を手前左方斜めに引き寄せる。

体験 「経験」と同じ。

大工 胸の稍々右寄り前で、五指を彎曲して掌を下向けた左右両手を前後にならべ鉋を持つ姿態をつくり両手をそのまま手前へ引き寄せては前に出して、鉋を使う動作―男性。

退屈 「待つ」と同じ手まね。

太鼓 (イ) 小太鼓ならば、左手で太鼓を吊るし持つ真似をし、右手でむちを持って叩たく身振り。

(ロ) 大太鼓ならば、上に吊るされた太鼓を仮想して、右手でむちを持って叩たく身振り。

(ハ) 祭り太鼓のような場合は両手の人差指をむちとして下に置かれた太鼓を交互に叩たくりく身振り。

大根 両手で大根を引き抜く身振りをして――白の手まねをして、掌を前に向け五指を彎曲した両手をならべ左右に引き離して行く（大根の丸く長く長い形状を模写）

退治 五指の指頭を上向け掌を内側にした左手の上から右手掌で押し降す（弾圧、圧制）次に、「全滅」の手まねの「全くなくなる」を表わす。

退職 「退学」と同じ要領。役所或は工場の手まねをして、上向けた左手の掌の上に右手の集め合せた五指の指頭をつけ、手前へ引き離す。即ち籍をぬくこと。

大丈夫 (可能) 掌を右側に向け五指の指頭を左胸に直角につけ(兼指中指人差指の三指の指頭が胸につく)次に右胸につける。

「可能」の意味。「しをすることが出来る」「私にはそれが出来る」の「出来る」

大臣 政治」男性或は女性(稍々高くさし上げて)表わす。

大切 大事な 右手の掌を反対側の左回にすれすれに向わせ(五指の指頭は後方にさし掌は右側になっている。)左右に頬を打つばかりに小さく運動させる。如何にも頬にさわらぬように「大事にする」「大事な」とばかり気を配った表情で手まねする。

大層 大へん 「少し」の手まね(即ち人差指の指先僅かに残したところに同じ手の親指の指頭をつける)をして、親指の指頭を入差指の根元までずらせて行く。

体操 両手を前に突き出したり、左右に突

き出したり等して体操の身振り。

怠惰 掌を内側にした右手の人差指と中指の二指を横にして鼻の下にびったりつけ右頬へ斜めにすり降す。「怠ける」の意味。鼻下を長くして、鼻汗を横なでしただらしなさを表わしたものが。

大体 「大方」と同じ手まね。

滞納 納める(金を前に出す) | 怠ける
| 忘れる

代理 「代り」(変わる) | 人(男性或は女性)

大部分 「大方」と同じ。

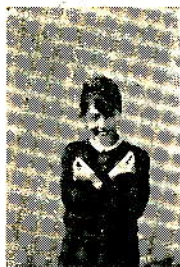
大砲 掌を上に向けて五指を彎曲させた左手を下に、掌を下に向けた五指を彎曲させた右手を上にして向い合わせ左右に引き離して行き(大砲の砲身の円筒状を模写)次に左手をそのままの姿態に置いて、その掌の中へ右手の拳にしたのをさし入れて(弾薬をこめ

る)その拳を左手から前方へ突き出して五指をばっと開く(発射)

大役 厄介な(面倒な)「握り拳で頭のかめかみの辺りを叩く」——責任

太陽 夫々の人差指と親指を半円形に(人差指は上親指は下に)曲げた左右両手を向い合せ(形にして円の大きさを表現したを上の方へさし上げる。

代用 代りー用いる。



倒れる 上向けた左手掌の上に、右手の人差指と中指の二指を指頭で直角に立てて(人が二本の脚で立つ姿)、その手を横倒しにする

互いに 掌を内側に指頭を上にした人差指と親指の両手を

手首のところでX形に交叉して「一緒」「同じ」の手まねの要領で夫々両手の二指の指頭を同時につけ合わす。

沢山 「多い」と同じ手まね。

だけ 「唯一つ」と同じ手まね。

竹 掌を前向け人差指と親指で輪にした右手(他の三指は伸ばしたまま)掌を内側にし人差指と親指で輪にした左手(他の三指は右手と同じ)。この左手を斜め上に、或間隔を置いて右手を斜め下にして、離して行く。途中二度ばかり手の運動をとめては続ける。(竹の幹の細長い形状と途中運動をとめるのは竹の節)

竹藪 竹くさむら叢

章魚 掌を下に向けた左手の手甲の皮膚を右手の五指でつまみ、左手の五指を章魚の足のように不規則に交互に動かす、上の右手は章魚の頭部。

度し 「好き」の手まねと同じ。○本を見たい。本―見る―好き。

足し算 (イ) 合わせる(会合と同じ要領の手まね)―算術。(ロ) 左右両手の人差指を十字に組む(足算の記号)―算術

黄昏 夕方(掌を下向けて五指の指頭を右にさした左手を地平線として、右手の指頭を左にさした人差指と親指を曲げて半円を形どり太陽を表わし、左手の向う側に落して行く、即ち日没)―暗い(この手まねを軽く、うす暗い表情)

尋ねる 「訊く」と同じ。

戦う 闘う 「戦争」と同じ。

唯一つ 五指の指頭を前方にさし掌を右側にした左手に、右手人差指(一の数)の指頭をつけてから上へ弾ね上げる。「一つ」を強調したもの。

畳 掌を下に向けて拳にした左手を右胸脇

につけ、その手の上に拳にした右手の腕を立てた肘をのせ、右手に刀を入れて僅かに左右に動かす。畳屋が畳の縁を縫う身振り。

忽ち 「既に」の手まねと同じ要領で表わす。

立つ 上向けた左手の掌の上に、右手の人差指と中指の二指を指頭で直角に立てる。人の二本の脚で立つ姿。

達人 「女人」と同じ手まね。

脱走 右手掌で口を塞さぎ(黙って)次にを下に向け五指の指頭を右にさした左手の下掌を指頭を前方にさした右手の人差指をくぐらせて、前に出し右斜めに進ませる。

建物 五指の指頭を前方にさし、掌を左側にした右手、五指の指頭を前方にさし掌を右側にした左手。この両手を胸の前左右に平行に向い合わせて同時に上へまっすぐに上げて行き、適度なところで、停止させると同時に

両手の掌を下に向け、左右から相宿らしめて両手をつけ合わす。つまり両手で「」の線を描いたわけ。即ちビルの輪郭。

建てる 造る——建物。

妥当 「適する」と同じ手まね。

たとえ——でも 仮りに——しかし。

例えば 「仮りに」と同じ手まね。

頼む 右手拳で左手腕の上を叩たいて右手を開いて拜む。

煙草 人差指と中指で煙草を挟さんだ恰好

で口許に二指を持って行き吸う真似。

足袋 掌を上向けた左手の手の首のところ

で、右手で足袋のこはぜをかるけ真似。

旆 指頭を上にした人差指と中指の両手

を顔の左右から同時に前方へ小刻さみに進ませる。

度々 「屢々」と同じ手まね。

多分 (1)「多分にある」とか「多分に頂き

まして」の場合。「多く」「沢山」の手まね。
(2)「多分……でしょう」の場合。と「思う」の手まね。

狸 狸の腹鼓を表わす。即ち掌を内側にした両手で、交互に腹を叩たく身振り。

多忙 「忙しい」と同じ。

他人 掌を内側にして、五指の指頭を左に

さした右手を右頬に直角につけ、前へ弾ねるように離す。骨肉(頬)とは拘りがなくこと

脱線 五指の指頭前方にさし掌を右側にし

た左手の上(親指の背の上)に、これも五指の指頭前方にさし掌を左側にした右手を(小

指の背か下の左手の親指の背に)載せ、上の

右手を左手の上をまっすぐに這らせて行って

(軌道の上を車が這って行く)途中で、その

右手を左手から左の方へそらせ落す。即ち軌道から外れたこと。「墮落」と云う意味にも

なる。

騙ます 掌を下に向け五指の指頭を右にさした左手の手首辺の下から指頭を上にした五指を彎曲して掌を前に向けた右手をくぐらせて前に突き出す。

びっくり箱から何にかを突き出して人を騙まし驚かすのを表わしたもの。

騙まされる 掌を上向けて五指の指頭が夫々の指のつけ根につくように屈折させた手を顎の下直角に手首でつけてから、がくりとそ
の手を下へ落す。騙まされて唖然と顎を落した様。

たまらない (イ) 辛抱——出来ない。(ウ)

諦める——出来ない。

黙る 黙れ 指頭を上にした人差指で口を塞ぐ。

玉 親指の指頭に他の四指の指頭を集め合
わせてつけ、手を丸い姿態にする。玉の形。

卵 「玉」を表わして丸くした手の内部に

出来た丸い空洞を片方の眼で覗き見る。その時その手を僅かにくるくる廻わす。卵の新しさを検らべるのに電灯にかざして覗くことから来た手まね。

為に 「関係」と同じ手まね。

駄目 (イ) 「いけない」「悪い」と同じ手まね。(ウ) 「私は酒が駄目です」の場合の「駄目」。私—酒—飲む—むづかしい。(イ) 「この絵は駄目だ」の場合の駄目。絵を指して、人差指で空間に(ベケ)を書く。

験めす 「試みる」「試験」と同じ手まね

足らぬ (イ) 「貧しい」と同じ手まね。(ウ)

「百には十足らぬ」の場合。百—まだ—十足 (イ) 数(金銭等)——大丈夫。(ウ)

数—ちやうど。

頼よる 任かせる——頼のむ。

墮落 (イ) 「脱線」と同じ手まね。(ウ) 男

性(或は女性)を表わした右手を下へ落して

左手の掌で受ける。

誰 五指の指頭を後方にさし掌を右側にし



た右手の甲を右
頬につける。

達磨 上向け

た左手掌の上
に、指頭を上
にさした親指の右
手をのせたまま

おき上りこぼしがぐらぐら体を揺るように右
を左右に動かす。

タワアー 五指の指頭を前方にさし掌を下
に向けた両手を左右下から上へ上げて行く
(自然に右手掌は左側に向き左手掌は右側
向き)タワアーの高さを表わす。

載れる 「嘘」の手まねをして次に、掌を
下に向けた両手の五指の指頭を左右夫々の頬
に直角にさして、その両手を同時に前後水平

に動かす。

短気 小心——直ぐ——憤る。

団子 左手の親指と人差指で輪をつくり、
その輪の上に右手人差指を十字にのせ、団子
の串形を表わし、それを(右の人差指
にして食べる真似)。

短縮 五指の指頭を集め合わせた両手
頭で左右に広い間隔を置いて向い合わせ、次
にぐっと接近させて僅かな間隔をおいてとめ
る。広く張ったゴム紐を短く縮める心持ち。
誕生日 生れる一月日(両手を上下にし
て、「いくつ」とばかり五指を親指から順次
に折り曲げて行く)。

箏筒 両手の掌を上向けて、箏筒の引出し
の環を掴んで手前に引く。この身振を上から
下へ位置を変えて二三度繰り返す。

断然 「決心」と同じ手まね。但し、「決
める」の左手掌に右手掌を打ちつける動作を

強くする。

だんだんに「次第に」と同じ手まね。

談判 「争う」の回と同じ。

談話 五指を集め合わせた両手を指頭で向
い合わせて、交互に何にかを投げつけるよう
に五指を開く。言葉を吐き合わせることに。

反物 五指を彎曲した両手を（円棒の両端
を両手で持った姿態）前方下へ回転せる。

（反物を巻き上げる身振）

鍛錬 「稽古」の手まねを大きく力を入れ
て表わす。

チ

血 頬又は腕の一ヶ所を僅かに、人差指
で切る真似をして、そこから人差指と親指の
指頭を合わせて、下へ伝たわらせ（流れ落す
こと）——添。

遅延 遅い—時間（或は月日）—過ぎる。

智恵 「賢い」と同じ手まね。

近頃 少し—過去—から（時間の流れ）

地下鉄 掌を下向け五指の指頭を右にさし
た左手を地面として、その地下に「電車」の
手まね。

近い 「少し」の要領で両手で表わす。即

ち両手（掌を上向け）夫々の指頭の上にさし
た人差指の僅か下に親指の指頭をつけ（これ
で「少し」の手まね）両手の間隔を短くし
て、同時に両指を弾ねるように開く。両者の
間が少し即ち

「近い」と云う
こと。

誓い 天（人

差指で天をさ
し）—約束。

違ふ 「相違」



と同じ手まね。

力落し 「がっかり」と同じ手まね。

地球 「世界」と同じ手まね。

遅刻 「遅い」「遅くれる」と同じ手まね。

知事 国（府県州）—政治—男性（少し上にさし上げる）

恥辱 「恥」と同じ手まね。

乳 かぎに曲げた人差指を（乳豆として）口にくわえ吸う真似。

父母 父 先ず、前提として、右の頬を指指と人差指にて軽くつまみ、その手で男性の指（親指）指を出して、それを眼の上にさし上げる。この前提の手まね、即ち親指と人差指にて頬肉をつまむのは、肉親を意味する。これを唯に人差指だけで頬を少しまで降してもよい。

母 前提の手まねは父と同じ。次に女性の

指（小指）を眼の上にさし上げる。眼の上にさし上げるのは、つまり、眼上の人を意味する。

父母（両親）を一度に表わすには男性の親指と女性の小指の二指を同時に表わせばよい。

実験 実際—経験—試みる。

茶 左手掌の上で、右手薬指と中指の指頭でものをかき廻わす真似—右手で土瓶を傾けて注ぐ真似—飲む（左手の五指で湯呑茶碗を持つ恰好で。）

茶色 「煙草」の要領。煙草の色即ち茶色。

注意 「気をつける」と同じ手まね。

中学校 掌を内側にした左手の指頭を右にさした人差指と親指をコの字形に平行にして、それに指頭を上にした右手の人差指をつけて、「中」の字形をつくる。—学校。

「中学生」は、中——生徒。

仲介 指頭を上へさした右手の親指を口許にして、それを右へさし出しては口許に返らせ往復すること二三度、二人の間に立って口を利き合うこと。

忠告 (イ) 注意する——よろしい——云う。(ロ) いけない——やめる——よろしい——云う。(ハ) 怠ける——いけない——云う。等々、一々事によつて具体的に手まねする。

仲裁 「まアまア」とばかり両手で制止するように仕える身振りして、「仲介」と同じ手まねをする。

中止 「やめる」と同じ手まね。

忠実 真面目（一生懸命）——正直。

中断 その前——中止。

中途 「まだ」と同じ手まね。

注文 買う——約束云う。

蝶 五指の指頭を前方にさし掌を下に向け

た両手を左右にならべ、互の親指を曲げて、つなぎ合わせて両手の掌を交互に上下に動かす。蝶の羽根を表わしたもの。

調印 決定——捺印（左手の掌の上に右手の彎曲した五指の指頭をつけ、大きな印判を押す真似）

調合 両手夫々の人差指と親指で輪をつくり試験管を持った心持で、右手試験管から左試験管に注ぎ入れ、左手の方を振って混ぜ合わせる身振。

調刻 左手にのみを持ち右手で槌を持った手の姿態をして、少し身体を斜めによじらせてのみを打って木を彫る身振。

吊辞 「悲しい」の手まねをして、両手で巻紙を左右に開いて行く身振りして読む（云う）

長所 よ美しい——性質。

長女 初め（第一）——生れる——女性（葉

指)

頂度 「一致」「同じ」と同じ手まね。

ちよつと 「少し」と同じ手まね。

帳場 事務一部屋(或は「所」)

長男 初め(第一)―生れる―男性(中指)

帳面 掌を上に向け五指の指頭を右にさした左手、その指頭に掌を左側にし五指の指頭を上をさした右手の手首をつけ、その右手を横に長い帳面の表紙のつもりで、左手の掌上に合わせる(表紙を閉じる)大形の帳面を表わすには、掌を上に向け五指の指頭を右にさした左手の指頭に、掌を左側にし五指の指頭を上をさした右手の腕の肘をつけ(右手の肘までを表紙として)表紙を閉じるつもりで、右腕を左腕の上に重ね合わせる。

著名 「名高い」と同じ手まね。

地理 「地球」と同じ手まね。

沈黙 指頭を上をさした人差指で口を塞ぎ。

ツ

遂に 「終り」と同じ手まね。

就いて 「しに關して」の意味であるから

「關係」の手まねをする。

通学 学校―往き帰り(指頭を上をさした人差指を学校を表わした位置へ左右に往復させる。)

通勤 工場―往き帰り
役所

通訳 「仲介」と同じ手まねをする。

通用 (イ) 金銭の通用。「高い」と同じ要領で金銭を表わした両手を上下にして交互にぐるぐると廻わす。(ロ) 世に通用する。「叶う」「適する」と同じ手まね。

杖 右手で杖を持って突く身振。

使う (ハ) 金銭を使う(金銭を表わした手を前に出す) (ウ) 人を使う。人々―仕事―命令(云いつける)

使い (ハ) 「用事」と同じ手まね。(ウ) 代り―用事―行く。用事が具体的に解って居れば、例えば「買物」「相談」「物を持って」等で表わすがよい。

疲れる 左手腕の上を右手掌で叩たいてがっかりとしたように両手を下に垂れる。

使い果たす 金銭使ひ―なくする。(左手掌の上に右手掌を十字に叩たき合わせて右へさっとすり離すいわゆるすってしまふの意味)。

月 月を表わす手まねに次の(ハ)(ウ)の二様式がある。(ハ) 掌を前向け、指頭を前方にさした親指と人差指の二指を広く開いて、三日月形を描くつもりで空間に縦に弧を描いて三日

月の下部を閉じるように、二指の指頭を合わせる。(ウ) 掌を内側にして五指の指頭を左にさした右手の親指と人差指で輪をつくりそれを頬に直角にあてがい(親指の爪の背を頬につける)、そこで人差指を前に弾じくようにして輪を開らく。

(ハ) の月は「何か月」の月にも、「何月」の月にも使われる。

「四ヶ月」とするには、(ハ)の月を手まねしてから「四」を表示する。

「四月」とするには、先ず四を表示してから(ハ)の月を手まねする。

尚、この(ハ)の月は天体の月そのものを意味する。

(ウ)の月は唯に「何ヶ月」の月にのみ使う。頬に指をあてがうのは、頬肉をさしたもので、肥、肌、肘等の文字の扁を「肉月」と呼ぶことからこの月の手まねが出来たものと思

えばよい。

机 掌を下向け五指の指頭を前方にさした
両手を前でびったりと並らべ合わせてから、
左右に両手を水平に離して行き（机の天板）
次に両手を直角に（右手の掌は左側に左手
の掌の右側に向く）両手を平行に下へ降して
行く（机の両脚）

造る 左手でのみを握り、右手で槌を握り
持った姿態で（左手掌は右側にした拳、右
手掌を左側にした拳）、左手拳の上に右手拳
を打ち降し二三度叩たく。物を工作する身
振。

繕う

こわれる（やぶれる）
造る——よく——
繕う。

漬物 両手で重い石を右傍から持って来て
下へ押しつける身振（漬物の重石）——左手
掌を狙として、右手を鉤丁として物をぎさむ
真似。

都合 (イ) 「都合がよい」 「幸せ」の手ま
ねをする。(ロ) 「都合が悪い」 運——悪
い。

拙い 「下手」と同じ手まね。

鼓 左手で左肩の上に鼓を持つ姿態をし
て、右手掌で鼓を打つ真似。

綴方 作文と同じ手まね。

土 掌を内側にし五指の指頭を下にさした
両手の夫々の親指と他の四指の指頭をこすり
合わせる。手の中にある土を少し宛下へ撒き
降す身振。

恙がない (イ) 相変らず。過去——同じ——同
じ。過去を表わして即ち右手掌を右肩越しに
後方へ押しやって、その位置から、その手の
人差指と親指の指頭をつけ合やす（「同じ」
の手まね）その指の運動を繰返しながら、そ
の手を前方へ返して行く。(ロ) 「健康」（丈
夫）の手まね。

堤 掌を上向けて五指の指頭を左にさした右手の五指をこまかく波打たせて右へ移行させ即ち水面を表わし、同時にその水面を囲うように、掌を内側にして五指の指頭を右にさした左手を右から左へと堤を描く。

常に「毎日」「いつも」と同じ手まね。

燕 「鳥」を表わして、掌を下に向け五指の指頭を左にさした右手で素速やに飛ぶ燕の運動を空間に描く。

妻 「夫」と同じ要領で女性（小指）を一方の人差指で指す。

爪弾じき 掌を上向けて五指の指頭を前方にさした左手の上に、掌を内側にして五指の指頭を下にさした右手を直角につけ、その指頭を左手の上にある物を掃き捨てるように前方へ弾じき出す。「排折する」と云う意味にもなる。

つまらない 掌を右側にした左手の指頭を

前方にさした人差指の上に、掌を下向けにし



五指の指頭を左にさした右手をたたき降して、上から左手を被うように五指を彎曲させる。

先が僅かに前に出る。「なんと、それだけしかないのか……つまらない」との意味。

任 罪 (イ) 悪い——行い。(ロ) 悪い——責

詰襟服 両手の夫々人差指と親指の間を詰襟の高さにひろげ、その指頭を頸の後から左右夫々前へ廻し、咽のところで、ボックをかける真似。(左手の人差指と親指を小さく輪にした中へ右手の人差指をさし込む)、次に左右何れかの手の人差指と親指を輪にしたの

を、ぼたんを表わすつもりで、胸の上部から下へ所々につけて行く。

冷たい 「寒い」と同じ手まねをして、両手を口許にもって行きかじかんた手を温めるように息を吐きつける。

露 朝——草——葉——水——玉。水玉は右手人差指と親指で小さく輪にしたのを、左手「葉」の上の所々に置いて見せる。

梅雨 (イ) 六月、七月——毎日のように——雨。
(ロ) 梅——雨。

強い 拳にした右手の腕を肘で、たてに曲げて力縮を入れる身振り。

貫く (イ) 掌を前向けた左手の人差指と親指でつくった輪の中に右の人差指を突き通らせる。(ロ) 志(思い)を貫く。右手の人差指で腹部を指し(志)次にその手の五指の指頭を前方直角にさし掌を左側にして、まっすぐ前方へさし出して行く。

釣 指頭を前方にさした両手の人差指を一つの直線になるようにならべ(長い釣竿)魚を釣り上げる身振。

均合う 「叶う」「似合う」と同じ手まね
釣鐘 種木から垂らした綱を両手で肩の辺で握り、鐘をつく身振。

鶴 口許で掌を前に向け指頭を前方にさした人差指の(僅か下に上部第一節のところ)親指の指頭をつけ、烏のくちばしの形をつくり、鶴の首の長さを表わすために、肘をたてに曲げてその手を少し上へ上げて、次に両手で羽ばたく身振。

雙つんば 全雙の場合。両手の掌で左右夫々の耳を塞ぐ。(ロ)難聴の場合。右手で右耳たぶを後から囲み、首を右に傾しげて聞こうとする身振り。

テ

出会う 指頭を上にした人差指の両手を
向い合わせて、左右から接近させて、両手
つけ合わせる。

手洗い トイレット (イ) W.C. 指頭を上
にした人差指と中指と薬指の三指の間を稍
々ひろげるとWの形になる。次に親指を下
に、他の四指を上にして、その間を開いて五
指をまるく曲げてCの形をつくる。

(ロ) 両手をこすり合わせて洗う真似をす
る。

定価 掲げた(「揭示」の手まね) — 金銭
— いくら。

庭園 一旦「家」の手まねをして、左手を
その姿態のままにして残し置き、その前の空
間に、右手の下向けた掌をぐるりと前に弧に

廻して—池—山

庭球 右手でラケットを持って球を打つ身
振。

低級 「下等」「下品」と同じ手まね。

抵抗 右腕肘を曲げて右へ突張る(肘鉄砲
の形)

亭主 (イ) 家—主人。(ロ) 夫

体裁 「表向き」と同じ手まね。

訂正 添削 「校正」と同じ手まね。

邸宅 家の大きさを表わす。即ち「家」の
手まねをして、両手の指頭をつけたまま、両
手を上へ張り家の屋根を大きくさせる。

町重 (イ) 「大切」と同じ手まね(町重に
扱ふこと) (ロ) 作法—叶う(町重な行いの
こと)

定例 毎月(いつも—月) Vきまり(或は
毎週(いつも—週))

約束) 曜日
曜

手落ち 「漏らす」と同じ手まね。

手を引く 掌を内側にし五指の指頭を下にさした両手を前から胸もとへ斜めに引き寄せる。〇〇から手を引くの意。

手紙 「綴方」と同じ手まね。

手柄 腕前——名を挙げる（名高い）と同じ手まね。



敵 掌を内側にし五指の指頭を右にさした

左の甲に、掌を前向け五指の指頭を左にさした
右手の甲をびったりとつけ合わせてから、右手を前方へ左手を手前へと引き離す。「別」の手まねにもなる。

適中 「云いあてる」と同じ手まね。

適度 「ちようど」（一致）と同じ手まね

適当 適する 「叶う」と同じ手まね。

手頃 「適度」と同じ手まね。

出来ない 「造る」の手まねの要領で、下の掌の上にたたき降したままの右手拳を前方へずらして離す。「造る」を否定したこと。即ち「出来ない」である。

出来る 「大丈夫」と同じ手まね。

手数 骨折り（右手拳で左の腕をたたく）

一面倒（右手の拳で頭の右上をたたく）

出鱈目 掌を内側にし、指頭を上にした

人差指と中指で交互に下口唇をたたく。

手伝い 骨折り——与える（右手掌を上にして物を与えるように前にさし出す）

徹夜 夜——終日。

鉄砲 「銃」と同じ。

手筈 考え——計画。

手本 「揭示」と同じ手まねをする。

手本 「揭示」と同じ手まねをする。

手毬 両手の掌で丸い球を撫でさする真似をして、女の子の毬突きの身振り。

手まね (イ) 指頭を左にさした右手の人差指、指頭を右にさした左手の人差指、この両指を平行にし、糸巻するように上下に互に上下に廻わす(ロ) 人差指で表わす(ハ)の要領で五指を開いたままの両手で互に上下に廻わす。

寺 左手で拝み、右手人差指で木魚或は鉦をたたく真似をして——家。

照らす 掌を前向けた手の五指を集め合わせて、前方へ突出しながら五指をぱつと開く。(射光)

「照らされる」の受身にするには、掌を内側にした手の五指を集め合わせて自分に向けて、ぱつと五指を開く。

テレビ 掌を前方に向け五指を屈めた両手(テレビの二つのダイヤルを持った手の姿態)右手は右へ左手は左へとダイヤルを廻す

身振り。

田圃 「田舎」の手まね。

天気 (イ)晴—雨—曇—いろいろ。

(ロ) 「天気がよい」の場合は「晴」の手まね。また、「雨」なら「雨」「曇」なら「曇」で表わせばよい。

電気 「稲光」と同じ手まねで表わす。

天狗 「自慢」と同じ手まね。

天才 (イ) 生れる——「緒人^{智恵}達人^{この}」の「一緒」の手まねは、生れたままの意味。即ち生れながらのこと。(ロ) 天—貰う^{智恵}人^{達人}

天災 地震—洪水—風—恐しい—いろいろ

電車 (イ) 掌を下に向けた左手の指頭を右にさした人差指と中指を電線として、その電線に二本の電車のポールを這べらせるように、掌を左側にした右手の指頭を上にした人差指と中指の指頭を左手二指の下につけ右へつたわらせて行く。(ロ) 両手の人差指と中

指の二指の指頭を互に山形につけ、下に両手の親指の指頭を逆さ山形につけて一つの菱形をつくる。即ちパンタグラフの形、そのまま前へ移行させて行く。

電信 電報 上向けた左手の掌の上を、電信機のキーを打つように右手の人差指と中指の指頭で交互のたたく。

伝染 病氣——ひろがる（掌を上向けた両手を前から左右に振って行く）

転宅 「家」を稍々前右寄りの位置で表わし、その「家」を左方へそのまま移す。

電灯 掌を下に向け五指を集め合せた左手の甲の上の皮を右手五指でつまんでから、下の左手五指をバツと開く。

転覆 五指の指頭を前方直角にさし掌を左側にした右手を前へまっすぐに進ませて途中で掌を上向に寝かせる。

転落 墮落——落ちぶれる。

展覧会 掌を上向け五指の指頭を前方にし

た両手を前で左右に並らべてから左右に離して行く（いろいろの物を展げること）。次に「探す」と同じ要領の手まね。即ち、人差指と親指とで輪をつくったのを（他の三指は伸ばしたまま）眼の前にして、ぐるぐると左右に上下にその手を廻わす。眼を見開いて見て行くこと。

電話 右手拳を右耳もとでぐるぐる廻わし、左手の拳（送話機）を口もとに持って行く。

ト

と（云う） とのこと だうそうな 五指を集め合わせた右手を右耳に向ってぱつと五指を開く。耳に入ったとのこと。

戸扉 (ハ) 引き戸。両手で戸を左へ引き

開ける身振り。(例) 唐戸。掌を前向け五指の指頭を上にした両手をびったり左右に並らべて両手掌を同時に内側に向き返らせて両手を左右に開く。(例) 扉(ドア) 五指の指頭を上にしたし掌を前に向けた左手の甲(親指の背辺り)に右手でハンドルを持つ心持ちで右へくるりと廻わすと同時に左手掌を内側に向き返らせる。

塔 「家」の手まねをそのまま上へ上へと三度ばかり重ねて表わし最後に左手をそのままの姿態で残し右手の指頭を上にした人差指(塔の五輪)のつけ根を左手の中指の指頭につける。

遠い 「大層」の手まねを、その腕の前に伸ばして表わす。

とうとう 「遂に」「終り」と同じ手まね

問う 「訊く」「尋ね」と同じ手まね。

銅 茶色—金属

答案 「答え」と同じ手まね。

同意 (例) 考え—同じ。(例) 「賛成」と同じ手まね。

統一 「統べる」と同じ手まね。

討議 「議論」と同じ手まね。

峠 山—道(くねくねと上り道を表わして、次に下り道を表わす)

動作 「行い」と同じ手まね。

倒産 「家」の手まねをして、その両手の掌をびしゃりと合わせる。家がつぶれたこと

同志 心—味方。

同時 時—一緒。

党首 政党—主(男性を表わした親指を少し上に上げる)

投手 指頭を前方にさした左手の人差指に、指頭を左にさした右手の人差指と親指を少しまるめて曲げてその指頭をつけてPの形をつくる。ピッチャーのPである。

同情 「思いやり」と同じ手まね。

当选 「選挙——勝つ」。

当然 「きまり」と同じ手まね。

同窓 掌を前向けて、五指の指頭を集め合
わせた両手を左右にびったりと並らべてか
ら、左右に離し次に両手を平行に下へ降す。

「同」の字の「冂」の形を描いたもの。「同
窓会」はそれに「会」の手まねをつけ加える
銅像 銅—造る—人の像（両手で空間に人
体の輪郭を描く）

盜賊 盜む—賊。

燈台 「照らす」の手まねをしてその手を
前方から左へ右へと動かす、四方に照らすこ
と。

盜難 「盜む」の受身、即ち盜まれた（人
差指をかぎ形に曲げたのを自分の体に向け前
方へ引き出す）

同輩 同僚 「味方」と同じ手まね。

當番 「責任」と同じ手まね。

豆腐 「白」の手まねをして、掌を上向け
た左手の上に、右手（五指の指頭を前方にさ
し掌を左側にした）を鉤丁として豆腐屋が豆
腐を縦に横に切る身振。

動物 獸—鳥—虫いろいろ。

逃亡 「脱走」と同じ手まね。

透明 五指の指頭を上にして掌を内側に
した左手を（透明体）前にして、掌を下に向
け人差指と中指の指頭を前方にさした右手を
眼もとにつけて（視線）から、左手に向って
その指の間に右手の二指を突き通うらせる。

同盟 「連盟」と同じ手まね。

統領 統べる—主（男性を表わした親指
を少し上にさじ上げる）

時 時の流れ 時間時代の経過 右手（手
甲を上向けた）の指頭前方直角にした人差指
を右から左へ空間に線を描いて移行させる。

過去は右、未來は左と心得えて時間の動きを表現するもの。

時時 「時間の流れを」表わす手まねをして（即ち掌を下に向け指頭を前方にさした右手人差指を右から左へ線を描いて行く）その途中人差指の指頭をくるっと上にさし（その掌は内側を向く）またその指をもとに戻して左へ移行してはまた指頭を上になさして、これを二三度繰り返して行く。

解く 研究—考える—解る。

徳 人々—幸せ—与える—いろいろよい行い。

得する 「儲ける」と同じ手まね。

毒 五指を集め合わせたその指頭を鼻さきにもって行く。

匂いをかぐ。

得意 (1) 得意顔。「自慢」の手まね。(2)

〇〇が得意「上手」の手まね。

読書 本—見る。「本」を表わした両手

のうち左手をそのままその位置に残して置いて、掌を下向け指頭を前方にさした人差指と中指の右手を眼もとにつけて（これを視線として）二指の指頭を左手に向け、指頭を上下に動かす。視線が上から下へ、下から下へと本の文章の行を追うこと。

独身 結婚—まだ—独り。

特別 特に 掌を下に向け五指の指頭を集め合わせた右手を掌を下に向けた左手の手首の上辺りから腕にかけて人形を描く。明治時代の兵隊の特務曹長の袖につけた章しるしから来たもの

独立 (1) 親から独立。自分（独り）—食う—生活。(2) 独立国家。自身（独り）—政治—国。

時計 右手の親指と人差指、その親指の方を左手に握らせて（左手の親指と人差指の間

に右手の親指をさし入れた状態）時計のネジ



を巻くように握られた親指を軸にして、人差指を廻転させる。右手人差指を時計の針としたものか、或はまた

時計のぜんまいを巻くことか。

何処 右手の指頭を上にした人差指を左右に振りながら、その手を右へ移行させる。

所 五指を彎曲させた手の掌を下向けてぐらりと小さい輪を描いて、その輪の中心と思われる位置に手を止め僅かに下へ押し降す。

登山 掌を下向けて五指の指頭を右にさした左手で右から左へ「山」の形を描いて、その腕を立てたままにとどめ、その腕から手の上へ、右手人差指と中指で歩いて登って行く

年 年を表わすには、左手の親指と人差指で輪をつくり（他の三指は伸ばしたまま指頭は前方直角）右の人差指でその輪を一つぼんとたたいて、輪の上をぐるりと一周させてそれに数の一を出すと一年となる。

この年の手まねのなりたち（語源）はつまりらかでないが、樹木の年輪を表現したものと見えよ。

三年ならば、年一三。

平号で年を表わすには、明治十年ならば「明」の文字を人差指で空間に書き、「十」の数を表わす。

大正ならば「大」。昭和なら「昭」と。（もし、明治の場合、明治天皇の特長のある鬚を模写手まねして、年の数を表わしたものであるが）「大正」「昭和」も地方によって約束された記号手まねがある。

今は主として、西暦で年を表わしている

が、これは、右の人差指と左の人差指を十字に交叉して、キリストを表わし、一九六〇と上から下へ順に数を表わして行けばよい。キリストの手まねは省いてよし。

齡 五指の指頭を前方にさし掌を左側にした右手を顎の下につけ、「いくつ」(數)の手まね。即ち親指から順次に折り曲げて行く。美味しい(顎)雑煮を食べた數。「十五歳」と表わす場合。齡——十五とする。

齡寄り 「齡」を表わしてから、その顎の下で掌を下に向け五指彎曲した右手、その下に掌を上に向け五指を彎曲した左手を相向わせて、右手を上へ左手を下へ離して行く。數鼠(齡)のポリュームを表わしたこと。

どちら 「較らべる」と同じ手まね。

土地 土——所。

突然 「急に」と同じ手まね。

とても 「むづかしい」と同じ手まね。そ

れに小首を振るがよい。

整ろ 「整理」と同じ手まね。

とに角 「それはそれとして」と一般に誰れもする身振り。即ち五指の指頭を上さにさし掌を前に向けた両手を前右寄り斜めに下へ押しつけるように出す。

賭博 (イ) 両手でカルタを繰る身振。(ロ)

両手を上下に合わせてまるくふくらませて手の中にある賽ころを振る身振。

薦 茶—鳥(この場合両手で羽ばたきせず)に静止して身体を左右に向ける、薦の空中滑走。

止まる 指頭を下にさした人差指と中指で「歩く」の手まねをして、二指を揃えて停止させる。

止める (イ) 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を右から左へ移行させて行くのを、五指の指頭を前方にさし掌を右側にした

左手を上から落して右手の運動を遮断する。

(例) やめ—命令。

友 左右両手で握手の形に絶び男性

供する 掌を前に向けた右手の指頭を上女性

にした親指のその後稍々下にこれも掌を前に

向けた左手の指頭を上にした親指を従わせ

て両手を前へ進ませる。

伴トナリに行く 掌を前に向け指頭を上にした

右手の人差指と中指を右肩廻りから前へ進ま

せる。二人連れだてて行くこと。

土曜日 土 胸の前で、両手の五指を下に

向け、手の中の土を少しづつ、撒き落すよう

に、親指の指頭と他の四指とでこすり合わせ

る。「土」「砂」の手まね。

当惑 困る—感う。

虎 右手の人差指と親指の間を広く開いて

その指頭で胸の上に左から右へ平行線を描い

て(虎の縞)——獸。

鳥居 指頭前方にさした人差指と中指の両
手を前で背中合せにびったりと並らべあ合せ
てから左右に離して行って次に両手をそのま
ま下へ降して行く。鳥居の輪郭を描いたも
の。

鳥 人差指の指先から少し下に親指の指頭
をつけ鳥の嘴の形を造って口許につけてか
ら、左右両腕の肘を夫々胸脇にびったりつ
け、手を上下に動かして羽ばたきの身振り。

取替える (例) 「変える」の手まね。(例)

掌を下に向けて五指の指頭を集め合わせた両
手、右手を左へ左手を右へ交叉する。右の物
を左へ左の物を右へと取替えること。

取りきめ 相談—決める。

取引 相談—商い。

度量 (例) 「度量が大きい」は「寛大」と
同じ手まね。

(例) 「度量が小さい」は「小心」と同じ手

まね。

徒勞 骨折り―損。

努力 「しっかりする」と同じ手まね。

泥棒 「賊盜」と同じ手まね。

とんぼ 「蝶」の要領で両手の親指を曲げてつなぎ合わせ、両手の人差指と中指（この場合他の三指は折り曲げてある）を上下に動かす、とんぼの羽根。

トンネル 掌を下に向け、親指と人差指の間を開いて五指を彎曲させた左手（トンネルの穴の形に）その中を掌を内側にし五指の指頭を左にさした右手を通過させる。

ナ

名 名前 「氏名」と同じ手まね。

ない 手首を軸にして五指の指頭を上にした両手の掌を左右にくるくるとさせる。誰

れもがするように手になにもないことを示す身振。

内密 一般に誰れもが内証話をするようにする時に、五指の指頭を上にし掌を同じく右側にした両手で左頬から口もとを隠くす。

尚 「その上」と同じ手まね。

治る 「消える」と同じ手まね。病気の痛苦が消えること。

長い 掌を左側にして五指の指頭を集め合わせた右手。掌を右側にして五指の指頭を集め合わせた左手。この両手を左右に互の指頭でつけ合わせ、一方の手を前へ離してそのままつすぐに長く引いて行く。長い糸を繰り出すように。

仲直り 改めて―仲よし。

仲間 「同輩」と同じ手まね。

仲悪い 五指の指頭を上にし掌を右側にした右手、五指の指頭を上にし掌を左側に

した左手。この両手の手甲をびったりとつけ
合わせ（背中合わせて）上下にこすり合う。

仲よし 「友」と同じ手まね。

なくなる (イ) 「消える」と同じ手まね。

(ロ) 掌を上向けた左手の上に、掌を下向けた
右手を軽く叩たたき降してから、その右手を前
へ近づけて、左手からまっすぐに離して行
く。「使い果たす」と同じ手まね。即ち「す
ってしまった」である。(ハ) 掌を下に向け、
親指の指頭を下にさし、他の四指の指頭を前
方にさした両手を少しの間隔を置いて左右に
並らべて、同時に親指と他の四指の指頭をつ
け合わせて閉じる。

仲人 仲介一人（男性或は女性）

濱 海岸と同じ手まね。

泣く 「悲しい」と同じ手まね。(ロ) 掌を

眼にあてがい涙を拭く身振。

情 (イ) 「情をかける」の場合。同情—愛

する。(ロ) 「情深い」の場合。心—柔らかい

(イ) 「情知らぬ」の場合。心—冷い。

情ない 「悲しい」と同じ手まね。

馴染 (イ) 会う—会う—会う—顔知ってい

る。(ロ) いつも—来る—仲よし。

何故 理由—何に。

名高い 名前—掲げる。

夏（暑い） (イ) 流れる汗を表現する心持

で、両手の五指の指頭で夫々の左右のこめか
みから頬をなで降す。(ロ) 右手を扇か団扇を
持っている姿態にしてあおる身振り。

捺印 左上上向けた掌の上に、右手を大き

な持印判をついた姿態にして捺印する身振り。

なつかしい 「思出」と同じ手まね。

納得する 「解る」と同じ手まね。

納得いかない 「不満」と同じ手まね。

何に 五指の指頭前方にさし、掌を左側に
した右手を前へさし出して行く。この手まね

は、「……ですか」の疑問の「か」ともなる
何程 「いくら」と同じ手まね。

生意氣 指頭を上にした親指の背で鼻頭
を左右にこする。

波 掌を上向け五指の指頭を左にした右
手を左から右へと波動を描く。

涙 「泣く」の何の手まね。

滑めらか 五指の指頭を上にしたし掌を左側
にした右手で頬をすり上げる。頬の滑めらか
さを暗示する。

悩む 頭をかかえて悩む身振。即ち掌を内
側にして彎曲させた五指の指頭を前額部に押
しつける。

習う 掌を内側にして、指頭を上にした
人差指を少し曲げて、前方から鼻に向けて行
く。「教えを受ける」即ち教えるの受身。

倣う 「真似する」と同じ手まね。

習わし 掌を下に向けた左手の手首の上

に、掌を内側にし五指の指頭を左にした右
手をのせると同時に、五指を拳に掘る。何度
も「習わし」になって手についていること。

成る 掌を内側にし指頭を上にした人
差指の両手を左右から相寄りして両腕をX形
に交叉する。右のものが左へ、左のものが右
へ変る即ち「成る」である。

並らぶ (何) 両手何れも五指の指頭を上
にし、右手(掌は左向け)と左手(掌は右向
け)を前後に並らべ一列縦隊の形をつくる。

(何) 両手何れも五指の指頭を上にして掌
を内側にした両手を左右に並らべて一列横隊
の形をつくり隊列の長さを表わすために、両
手を左右に離して行く。

成程 うなづいてから「ほんとう」の手ま
ねをする。

難解 五指の指頭を上にして掌を内側に
して鼻頭をその中指で二、三度打って小首を

傾げる。

難儀 むづかしい 悩む

何度 何遍 またーいくら。

何月何日 いくつー月 何ーいくつ

右の手で「いくつ」即ち右の手の親指より順に折って行って、(4) の月を表わして、その下に更に「いくつ」を手まねする。この場合、「月」の表現を省いてよい。右の手を上、左の手をその下にして、同時に「いくつ」をすればよい。勿論上の右の手は月を下の左の手は日の心得。

○三月五日 三ー月(4)ー五。また、「月」を省いて、右手で「三」を表わし、その下に左手で「五」を表わす。

○元旦(一月一日) 一ー月一ー。または一ー

二

似合う 「適する」 「叶う」と同じ手まね

課やか 「公園」と同じ要領で表わす。人

々の往来はげしいこと。

憎む 肘をたてに曲げてた手を強く握り拳

にして、空間を叩たくように運動さしながら

前に突き出す。

肉身 頬肉を人差指と親指で二度ばかりつ

まみ、二指の指頭を合わせて前方へ引き出す

逃げる 「脱走」と同じ手まね。

虹 右手の掌を下に向け指頭を左にさした

親指と人差と中指の三指(七の数即ち七色)

で左から右へ弧を描く。

贗物 嘘造るー物(いろいろ)

日限 約束ー何月何日

日常 普通ー毎日

日没 「黄昏」と同じ。

日曜日 左の掌の上へ右の手甲を上にした拳をぼんと叩たき降す。

日光 太陽―照らす。

日当 一日(終日)―骨折―収入。

二倍 「一層」「その上」と同じ手まね。

二枚舌 右手の掌を左側にし指頭を上にした人差指と中指。人差指の方を口唇に十字

につけてから、くると掌を内側にして二指共に口唇につける。

荷物 (イ) 荷物を片手に掲げる身振。(ロ)

荷物を背負う身振。

入学 「学校」の手まねをして、「就職」

と同じ要領、即ち左手掌の上に五指の指頭を集め合わせた右手のその指頭をつけ、両手をそのまま前へ出す。

入費 必要―金銭

似る 同じ―ような。

二墨手 「一墨手」と同じ要領で右手の人

差指で「二」を表わす。

庭 「庭園」と同じ手まね。

鷓 五指の指頭を上にしたし掌を左側にした

右手の親指の指頭を額につけ、五指の指頭を上にしたし掌を右側にした左手の親指を額につけ(右手は鷓のとさか)―鳥

俄かに 「急に」と同じ手まね。

認可 「許可」と同じ手まね。

人氣 男性或は女性を表わしたその位置に向って、掌を下に向けた五指をさし両面をそれへ集めて行く。人々の注意、人氣が集まる

の意。

人間 人 「人間」「人」と云う人格的観

念の場合、人差指で「人」と空間に文字を書くがよい。これは文字とは云え、模写身振の手まねである。また、右の人差指と左の人差

指で、「人」の文字形に交り合わせるがよい

人情 普通——人々心。
任務 「責任」と同じ手まね。

又

縫う (イ) 両手で縫物を持って縫う手振り
(ロ) ミシン縫い。右手でミシンのハンドルを廻し、左手五指を前方にさし掌を下に向けたのを縫物として、前方へ出して行く。

盗人 (イ) 「盗賊」と同じ手まね。(ロ) 盗む一人。

盗む 人差指をカギ形に曲げたのを前から引き寄せる。

主 男性(或は女性)を表わした手を稍々高い目にさし上げる。

沼 「池」と同じ手まね。

塗る 左手掌の上に、右手五指を刷毛とみ

なして塗る真似。

ネ

値上げ 「金銭」を表わしたそのままの手を、横へゆるい弧を描いて上へあげて行く。

値打ち 「適当」「叶う」と同じ手まね。

○「これは千円の値打ちがある」これ——千円——適当。

願う 「頼む」と同じ手まね。

猫 掌を前に向け五指の指頭を上にした手を握り拳にして同じ側の頬につけ前方から後へ小さい円を描いて頬をこする。猫の習性を真似たもの。

ねずみ 掌を下に向け、指頭を前方にさした人差指と中指の両手を口の夫々左右につけ二指を交互に小さく動かす。ねずみのひげを表わす。

妬む 「嫉妬」と同じ手まね。

値段 金銭—いくら。

熱 掌を下に向け、指頭を左にさした人差指と中指の右手を左胸脇につけ二指の指頭を合わせてから、二指を上下人差指は上へに徐々に開く。体温計の水銀が上昇すること。

熱心 「一生懸命」と同じ手まね。

眠い 掌を下に向け五指の指頭を両眼に向けてさして五指の指頭を集め合わせ。臉の重さを表わす。

眠る 右手の掌を左側にし、指頭を左にさした人差指と親指の眼前近くにして、二指をびったりとつけ合わせ。眼を閉じること。

年賀 一月一日—祝う。

年賀状 一月一日—祝う—郵便。

年忌 死ぬ—何年（五年或は十年と）—同じ—月日—拜む。

年中 一年—毎日。

農業 掌を下に向け、指頭を前方にさした五指を彎曲した両手を前後にならべて、鋤鍬で土を掘りかえす身振。

農夫 農業—人々。

ノート 「本」の手まねをして、左手をそのまま残し、それへ右手（ペンを持った姿）で文字を書く身振。

能力 「腕前」「腕利き」と同じ手まねのがれる 握り拳にした両手の腕を肘を曲げて立てて、共に左の方から右胸脇へ引き、同時に上体も少し右へ曲げる。体をかわしのがれること。

編 両手で鋸を引く身振。

残り 掌を内側にし五指の指頭を右にさした左手に、掌を内側にし五指の指頭を左にさ

した右手をつけて（左手の掌に右手の甲をつける）下へすり降す。「除き落す」の意味。従って「残り」となる。

除く「残り」と同じ手まね。

後程 少し—未采。

「のでし」「關係」の手まね。そのままですし左へ移行させる。「ために」「故に」と同じ手まね。

長閑 「静か」と同じ手まね。

延ばす 延びる 「延期」と同じ手まね。

野原 「草」の手まねをして、野原の広さを表わすために掌を下に両けた右手を左胸前から前方から右へ大きく弧を描く。

逆せる 掌を上には五指を彎曲した両手を額の上で交互に上下させる。

暢氣 腹が大きい（「寛大」と同じ手まね）—怠ける。

ハ

葉 「青」を表わしてから、五指の指頭を前方にさし、掌を下向けた両手を胸の前稍々上に位置し、片方ずつ前に出す。

俳優 (ハ)演劇—一人（男性或は女性）(ハ)映画—演劇—一人

排斥 「爪弾き」と同じ手まね。

配達 掌を上に向けた右手を、左胸脇から左へ物を投げる身振、次に胸の中央前から前方へ、続いて右胸脇から右へと物を投げる身振り。

バイオリン 左にバイオリンを持ち、右手で弦を持って、奏なでる身振。

ハイカラ 人差指（上に）と親指（下に）の指頭を肩寄りの類につけ、上の人差指を上へ開く。カラーの高いことを表わす。

売春婦 「娼婦」と同じ手まね。

敗北 「敗ける」と同じ手まね。

羽織 両手の人差指と親指の指頭を夫々の肩の下辺りにつけ、そのまま胸から下へ降して羽織の襟を表わし、胸もとで紐を結ぶ身振。

馬鹿 「阿呆」と同じ手まね。

葉書 「郵便」を表わし（即ち左の人差指と中指の二指に右の人差指をつけて「丁」形をつくる）次に、指頭を前方にさした両手の人差指の指頭をつけ合せて左右に離してから下へ平行に降してまた二指を相寄らして指頭を合わせる。つまり二指で「口」形を描くわけである。

墓 死―石―次に、「葉書」の場合の要領で「口」を描いたように、両手の人差指で墓石の輪郭を描く。

袴 左手を前に、右手を背後殿部にして、

両手を上へすり上げ袴を穿く身振をする。

秤 (1) 竿秤。右手で竿秤についた紐を持って秤を吊り上げる身振をして、左手で分銅の紐の位置を左右に動かす身振。(2) 機械秤。掌を右側に左手を握り拳にした上に、指頭を上にした人差指の右手をのせ、メーターの針が動くように、人差指を微妙に左右に動かせる。

博士 掌を上に向けた左手の上に、掌を内側に指頭を左にさした人差指・中指・葉指・小指の四指（四の敷）の右手をのせる。○○博士の四字を示したものが。

爆撃 「飛行機」の手まねをしてから左手をそのまま残して置いて、右手の掌を下に向け五指の指頭を集め合せて、左手真下から下に向けて落して行き五指をぱっと開き、次に両手の掌を上に向け五指の指頭を集め合せてから、活発に五指をぱっと開いて上へあ

げて行く。

薄情 心一冷い。

白米 大へんー白いー米。

博覧会 「展覧会」と同じ手まね。

化物 掌を内側に五指を下に垂らして、幽霊の手つきをする。

励む 「一生懸命」と同じ手まね。

箱 掌を上に向け五指を彎曲した左手の上に、掌を下に向け五指を彎曲した右手を被ひかぶせる。上の右手は蓋、下の左手は箱の身。

缺 人差指と中指の二指をびったりついたり離したりして缺の運動。

破産 「倒産」と同じ手まね。

橋 掌を左側に指頭を前方にさした人差指と中指の右手。掌を右側に指頭を前方にさした人差指と中指の左手、この両手の腕を前へ伸ばし平行にして、両手を同時に手前胸もと

の方へ上に弧を描いて引き寄せせる。太鼓橋の形を描いたもの。

恥（恥じる） 「赤」を表わしてから、掌を内側にして顔を撫で廻すようにする。顔一杯赤くなったこと。

梯子 梯子を登る動作、即ち両手を交互に上へ上へと梯子の棧（子）を觸む身振。

初め（初めに） 掌を下に向け五指の指頭を左にさした右手を右へ引くと同時に人差指を残して他の四指を折り疊む。即ち「一」の数を示したことになる。「第一」「一番」の意味。

始める 「開く」と同じ手まね。

走る 走る時下に垂れた両手を交互に前後に運動させる身振。

恥かしい (イ)「恥じる」と同じ手まね。(ロ) 掌を下に向け五指の指頭を右にさした左手の下に、掌を左に向けた右手の上にさした親指

の指頭をつけ（他の四指の指頭は前方をさしている）そのままくりと右手の掌を内側にする。子供がてれて恥かしがる時、よく頭を垂れてする手の表情。

はずれる (イ) 掌を上向け指頭を右にさした左手の人差指の第一節（上部より）の上に、掌を下向け指頭を前方にさした右手の人差指の第一節をあてがひ十形をつくる。これまでは「叶う」「適する」「あてはまる」の手まねになるが、そこで右手の人差指を左手人差指から、はずして下へ落す。(ロ) 又は右手の人差指を上へはね上らせる。

旗 左手の指頭を上にした親指の上に、掌を内側にし五指の指頭を左にさした右手を手の首のところにつけて、その手をそのまま前後にふる。左手は旗竿、右手は旗布、前後にふるは風にはためくこと。

畑 「田」と同じ要領で表わす。

働く 「仕事」と同じ手まね。

罰 天（人差指で上をさす）——叱られる（「叱る」の手まねを受身にする。即ちその親指を自分の頭に向ける）

罰金 自分—悪い—責任—金銭を出す。

はつきり 「明らか」と同じ手まね。両者は「明確」に分けること。

鳴 人差指を胸の上部につけてから、その指で前方弧を描いて降して行き、腹部につける。（鳩胸の輪郭を描く）——鳥。

花 合掌した両手をまるく、ふくらませて花のつぼみの形をつくり、手首をつけたまま、花が開くように両手の掌を左右に開く。片手掌を上に向け、五指の指頭を集め合わせ（つぼみ）てからぱっと五指を開く。

話 「手まね」と同じ。嚙啞者の場合、話は手まねであるから、話即ち手まねである。

省く 「除く」と同じ手まね。

浜辺 「海岸」と同じ手まね。

晴れ 「晴天」と同じ手まね。

林 「木」の手まねをして、五指の指頭を上にし、掌を内側にした両手を前後に重ねて、左右に離して行く。木のたくさん並らんでいる様。

春（暖い） 掌を内側にして五指を稍々ゆるやかに屈めた両手を胸の前で、空気を掻き寄せるようにする。ほこほこと暖気が身に感ずる表現。

針 人差指の指頭で頬を突く。

叛逆 主 政府 V 反抗—戦う。

反抗 肘を曲げて右腕を右へ突っ張る。

番号 「数」を表わした右手を左肩につける。

判事 裁判—人（少し高い目にさし上げる）。

半身不随 五指の指頭を上にし、掌を左に

向けた右手を鼻梁の上にびったりとつけ、そのまままっすぐに胸に降して、片方の手を不自由そうにぶらぶらさせる。

反省 「思い忍ぶ」の手まねの運動の手の途中から下へ腹部に向って弧を描いて降して行く。わが心に「思い」を致すこと。

犯人 具体的に表現をする。即ち、盗んだ—人。殺した—人。となる。

半分 掌を上に向け指頭を右にさした左手の人差指の上、ちようど中頃に、右手人掌指を十字に組み、左手人差指を半分に切るように手前の方へ引く。

煩悶 「悩む」と同じ。

判明 はっきり—解かる。

叛乱 叛逆—戦争—乱れる。

日 「太陽」と同じ手まね。

火 五指の指頭を上にしし掌を左側にした右手、五指の指頭を上にしし掌を右側にした左手、この両手の五指を僅かに屈がめて、手首を軸に掌をぐるぐる振りながら交互に上下させる。焰の立ち上る様。

悲哀 「悲しい」と同じ手まね。

ピアノ 両手の五指でピアノのキーを叩たく身振。

冷える 「寒い」と同じ手まね。

光り(光る) 五指の指頭を上にしし掌を左側にした右手を活発に素速く横振りさせながら上へあげて行く。ピカリと光る様を表わす。

悲観 むづかしい—思う—悲しい
あきらめる

比較 掌を内側に指頭を上にしした両手の人差指を対立させて、交互に上下させる。「どちらがどう？」とくらべる事。

ビール (イ) 五指の指頭を集め合せて輪にした左手(ビール瓶の口もとを握った姿態)の上に、右手で栓抜きを持って栓を抜く身振り。(ロ) ジョッキ或はコップのビール。左手でジョッキ或はコップを持つ姿態をして、その上に右手の五指を彎曲して掌を下に向けて、泡の吹き上る状態を表わすように五指をこまかく運動させる。

悲運 悲しい—運命。

ひがむ 「ひねくれる」と同じ手まね。

引受ける わかった—責任負う(責任)

引算 残る—算数

卑怯 「猾るい」と同じ。

日暮 「黄昏」と同じ。

否決 「賛成」の手まねの手を挙げようと

して強く反動的に下へ降して左掌の上に右手人差指の指頭で×字を書く。

飛行機 (イ) 五指の指頭を左にさし掌を下に向けた右手。五指の指頭を右にさし掌を下に向けた左手、両手を僅かな間隔をおいて上下平行にして(昔の復葉飛行機の形)そのまま前方へ進ませる。(ロ) 五指の指頭を右にさし掌を下に向けた左手掌(飛行機の翼)の手前に右の人差指をグルグル廻わしながら(プロペラー)前に連ませる。

久しい 「長い」と同じ手まね。

密かに 「内証」と同じ手まね。

ひたすら 「一生懸命」と同じ手まね。

美談 感心——話。

筆談 左手の掌の上に右手でペンか鉛筆を持って文字を書く真似をしてから、左手を前にさし出し、それを引込めると、これも掌を上に向けた右手を交替に前に出す。文字を書

いた紙を交換し合うこと。

人(人々) 親指(男性)と小指(女性)

を同時に出し、他の三指は折り曲げられている。その両手の姿態のまま胸の前辺りに位置させてから、宛う首を振るように、両の手首をグルグル動かして左右に離して行く。

これは、「人」と云う単数よりは寧ろ「人々」と云う複数を意味している。

ひどい (イ) 「大へん」と同じ手まね。(ロ) 心——冷い——大へん——行い(酷い仕打ち)

独り 胸に人差指の指頭をつけ、それを上へはねて、胸から離して、その指頭を上になさす。自分独りの意味。

ひねくれる 「心」(または「考」)の手まねをして、両手の集め合わせた五指の指頭を左右につけ合わせてねじる。

日延べ 「延期」と同じ手まね。

必要 「入用」と同じ手まね。

等しい 「一縮」「同じ」と同じ手まね。

秘密 「内証」と同じ手まね。

暇 (イ) 仕事—ない—休む (両手の掌を上に向け、夫々両膝に置く)。 (ロ) 「退屈」と同じ手まね。

病氣 頭痛の時にするように、拳で額の上を叩たく。

病院 「医院」と同じ手まね。

開く 「開ける」「始める」と同じ手まね。

昼 五指の指頭を上にかしし掌を前向けにした両手を顔の前で交叉してそれを左右に勢よく左右に離す。「明るい」の手まね。

日和 「晴れ」と同じ手まね。

平等 「普通」「平均」と同じ手まね。

貧苦 貧しい—悩み。

フ

不安 「心配」「恐れる」と同じ手まね。

不運 運—悪い。

笛 両手で横笛或は立管(たてに吹く笛)をつ夫々の手の姿態をして、五指の指頭で笛の穴を塞さぎ開く運動をして、口で吹く真似。

風習 一般(掌を下に向けた右手を左胸脇辺りから前方へ弧を描いて右へ)—習わし。

風船 掌を向い合わせた両手の五指(凡てまるく屈めたのを夫々互の指頭でつけ合わせ、両手で一つの球状をつくり、それへ口をつけ息を入れ、球状をふくらませるように両手を左右に拡げて離す。

夫婦 右の男性(親指)と左の女性(小指)を胸の前辺りで合わせる。

○結婚 この男性の指と女性の指を左右に離しておいて、それを静かに相寄せると、結婚となる。

部下 「家来」と同じ手まね。

深い 「大層」の手まねをそのままの人差指の指頭を下にさす。

不快 五指の指頭を左にさし掌を内側にし、た右手を胸にあて、強い調子で前方へ弾ね返す。「胸くそ」の悪いこと。

不可能 「出来ない」と同じ手まね。

不機嫌 「機嫌」の仰の手まね。

福祉協会 幸せ—協会（連盟）

復讐 「五分五分」と同じ手まね。

不景気 商い（金銭の回転）—悪い。

不潔 「汚い」と同じ手まね。

不幸 孝行—適しない（はずれる）

富囊 「金持」と同じ手まね。

不在 「家」を表わした手まねの左手をそ

のまま残して置き、その下で五指の指頭を前方にさし掌を左側にして右手を素速く掃き取るように掌を内側に向ける、家の中にはいないことを表わしたものだ。

不作法 作法—はずれる（適しない）

無事 「相変らず」と同じ手まね。

武士 指頭を前方斜め上にさした人差指の両手を左腰に重ね（二刀帯び）—男性

不自由 「不可能」と同じ手まね。

不信 掌を内側にし指頭を上にした親指と折り曲げた四指の間即ち人差指との間で顎を挟み突き上げるようにする。「一杯喰う」の反対の動作。

無精 「怠ける」と同じ手まね。

不正 「猾い」と同じ手まね。

防せぐ 掌を内側にして五指の指頭を自分の胸にさして寄せて来る（攻め手）右手を、五指の指頭を上にした掌を前に向けた左手で

遮え切り押し返えす。

不相応 適当でない。

不正直 「意地悪る」と同じ要領の手まね。

不思議 五指の指頭を上にしし掌を左側にした右手の人差指を口唇に十字につけると同時にその人差指をそのままにして他の四指を折り疊む。その時両頬をふくらませ、首をかしげる。

不足 「足らぬ」と同じ手まね。

普通 掌を前向けて指頭を前方稍々上にさせた人差指と指頭を前方稍々下にさせた親指（つまり両指間がひろく開かれて）の両手をびったり左右につけてから、両手を左右水平に離して行く。両手の人差指の線と親指の線が平行線をなす。「平均」「平行」「平等」の意味ともなる。

普通人 聲啞者に対する普通人のことで、

耳が聞え物言うことを表わす。即ち、指頭を上にした右手人差指を右から耳もとへ往復させ、これも指頭を上にした左手人差指を前方から口もとへ往復させる。この両手の運動は同時に行う。

仏教 仏一拜む一教え。

ぶどう 掌を下に向け五指の指頭を右にさせた左手をぶどう棚として、その下に、掌を上向け五指をまるく彎曲させた右手をくるくる廻わしながら、下に降して行く。ぶどうの房を表わした身振。

ふと 「急に」と同じ手まね。

布団 自分の左右何づれかの肩の上に布団を持って被せせる身振。

不似合 似合う——ない。似適しない。

舟 五指の指頭を前方にさし掌を上に向け、両手を左右につけ合わせ掌をまるくして舟の形をつくる。

吹雷 雪一風。

不滿 掌を内側にした手の上にさした人差指の指頭を口につけ頬をふくらませて小首を傾しげる。「納得いかない」こと。

不明誓 「恥かしい」と同じ手まね。

冬 「秋」の身振りを強調して表わす。即ち拳を強く握りしめ肘を腹脇につけた腕と全身の身ぶるいを強く。

不用 必要——ない。

舞踊 (イ)両手を腰にあて、上体をリズムカ
ルに左右に動かし踊る身振。(ロ)両手を交互に
上げ下げして踊る身振。

無頼漢 掌を上向けて握り拳にした手の手
首のところを鼻の下につけ突き上げるように
して両手で尻をまくる真似をして男性を表わ
す。

不利益 「損」と同じ手まね。(ロ)儲け——
ない。

不良 悪るさ——墮落。

風呂 (イ)「湯」「温泉」と同じ手まね。(ロ)
タオルを握った拳の形で、頬をこすり洗う身
振。

不和 「仲違い」と同じ手まね。

憤慨 「憤る」と同じ手まね。

文化(文明) 智識——一般(掌を下に向
けた右手を左胸脇から前方へ弧を描いて右
へ)智識が一般に行きわたること。

文学 掌を上向けた両手を十字に重ね互の
指の交叉したので原稿用紙を形どり、右手で
文字を書く身振。

紛失 五指の指頭を集め合わせ下に向けた
右手を右腰につけ、その手を下へ落すと同時
に五指を開く。腰につけていたものを落す身
振。

分数 掌を下に向け指頭を右にさした左手
の人差指を分数の「一」線としてその下に右

手で数を表わし（分母）次にその上に数を表わす（分子）

分配 上向けた左手の掌の上に五指の指頭を前方にさし掌を左側にした右手を降して物を二つに分けるように切る身振をしてから、その右手も掌を上に向けて両手を前方にさし出す。「別けて与える」である。

分類 両手の指頭を上にした人差指を指頭で人形につけ合わせて左右に離して両指で夫々下に小さい弧を描く。即ち括弧へを描くわけである。

へ

閉会 会合——閉じる。

平気 掌を下に向け五指の指頭を自分の方に向けた右手を右から左へ顔の上をすれすれに、掃くようにさつと通過させる。

平均 「平等」と同じ手まね。

塀 「家」の手まねをして左手をそのままに残し、その周囲を、掌を内側にして五指の指頭を左にした右手を左から右へぐるりと囲むような運動させる。

平静 一般——静か。

兵士 「軍人」と同じ手まね。

閉店 店——閉じる手まね。

平和 仲よく——一般——静か。

平凡 普通——つまらない。

下手 「上手」の反対の手の運動。即ち五指の指頭を前方に掌を下に向けた左手の手首の上辺りに掌を下に向け五指の指頭を左にした右手を叩たきつけて上へすり上げる。

へちやら (1) 掌を上に向け五指の指頭を前方にさした手を口許に持って行き、その掌の上を一吹き息を吹きつける。「そんなことは、ぼんでもない、一吹きでとんでしまう」と云

うこと。(例)「簡単」と同じ手まね。

蛇 指頭を上にした親指を蛇の鎌首のよう
に曲げ伸ばししながら、その手の腕をうね
らせて前方へ出して行く。

部屋 「室」と同じ手まね。

減る 「除く」と同じ手まね。

勉強 励み—稽古。

偏屈 「ひねくれる」と同じ手まね。

弁解 「説明」と同じ手まね。

弁護する 「通訳」「中介」と同じ手まね。

弁護士 裁判—弁護—役(責任) 男性。

返事 「答え」と同じ手まね。

便所 (例)「WC」即ち掌を前に向け指頭を
上にさした人差指・中指・薬指の三指をW字
形にひらき、次に掌を右側にし五指の指頭を
上にさした左手の親指と他の四指との間を開
いて共に指頭を右にさしまるく曲げてCの字
形をつくる。(例)はつきりとを分けてWC表わ

すのを省略して、Wの形にした三指をまるく
まげてその手をくるくる廻わす。(例)両手で手
を洗う身振。「お手洗い」の意味。

便利 「幸せ」と同じ手まね。

ホ

ボート 両手でボートの艦を漕ぎ、上体を
前後に運動させる。

ボイスカウト 親指を折った他の四指で
拳手の礼をして—若い人々。

貿易 五指の指頭を前方にさし掌を上に向
けた両手を夫々舟形にまるくして、交互に前
方に出しては引き寄せる(出舟、入舟)—商
い。

報恩 恩—互いに—返えず(掌を上に向け
た両手を前にさし出す)

妨害 「防せぐ」と同じ要領の手まね。

忘却 忘れる——なくなる。

傳給 「金錢」を表わした手を額の前に頂く。

帽子 (ハ)中折帽。帽子の山をつまんで被ねる身振。(ウ)学生帽、鳥打帽等。ひさしを持って被むる身振。

帽章 親指と人差指で輪にしたのを、びったりと額の中央につける。

寶石 高価な——光る——石。

放送 五指の指頭を前方にさし掌を下に向けた両手を口もと近くで左右に並らべ、五指をこまかく波打たせながら、両手を前方左右斜めに出して行く(電波を方々へ送る)

忘年会 年——忘れる——会。

方法 掌を下に向けた左手の腕(下膊部)に掌を下に向けた右手を十字に軽く叩いて——考え。

報復 「五分五分」と同じ手まね。

法律 国——いろいろ——規則。

亡霊 「化物」と同じ手まね。

帆かけ船 「舟」の手まねをして、左手をそのままに残しその上に、五指の指頭を上にして、掌を内側に向けた右手を帆の形にして載せる。

朗らか 心——明るい——愉快。

牧師 キリスト——説教——男性。

誇る 「自慢」と同じ手まね。

星 掌を下に向け五指の集め合わせた両手を頭の上で、交互に指を開いては閉じる。空にまたたく星。

捕手 (ハ)「C」を表わす。即ち掌を右側にし、五指の指頭を上にした左手の親指(下に)と他の四指(上に)との間を開いて五指をまるく曲げてCの形をつくる。(ウ)捕手がボールを受ける身振、左手にミットをつけた姿態で、右手拳をボールとして、前方からミ

ットにおさめる動作—男性。

補助 「応援」と同じ要領の手まね。

螢 掌に下向けた右手の左にさした五指の指頭を集め合せては開き、また五指を閉じ（指頭を集め合わせ）開き閉じしながら右の方へ上下さして移動さす。螢が光りを放ち飛ばす様。

没落 「おちぶれる」と同じ手まね。

仏 仏の手印、即ち掌を上向け五指の指頭を右にさした左手を腹の上につけ、五指の指頭を上さし掌を前向けた右手を右肩の前にかさす。この両手の夫々親指と人差指で輪をつくるもよし。

殆ど 「凡て」と同じ手まね。

焰 「火」と同じ手まね。

骨折り 掌を下に向けて拳にした左手の腕（下膊部）の上を右手拳で叩たく。

ほぼ 「大方」と同じ手まね。

保養 「病氣」の手まねをして掌を内側にした左手を胸につけ、その手甲の上を掌を内側にした右手で愛撫する。

ほら吹く 掌を上に向けて、五指の指頭を左にさした左手の五指を彎曲して螺貝を持った姿態にして口許につけ、その前の位置にこれも掌を上に向けて五指の指頭を右にさした右手の五指を彎曲して並らべてから、貝螺旋形を表わすために、右手の掌をそのままぐるりと下に向ける。両頬をふくらませて口で吹く。

捕虜 降参—兵士

惚れる 掌を上に向けて指頭を前方にさした五指をその指頭が夫々の指の根もとにつくばかり曲げて、その手首のところで顎の下につけてから、下へ落す。顎がはずれること。

亡るぶ 衰えて落す（亡る）

本 合掌した両手を本を開くようにする。

本気 (1) 本気になる。両手掌に唾をつけ両手をすり合わせる。「さア、やるぞ」と云う身振。(2) 本気で云う。ほんとうー心ー云う。

本家 本一家

凡人 考えー腕ー普通ー人々。

ほんとう 五指の指頭を上になしし掌を左側にした右手を額



の「真実」。

の上に直角に一度二度打つ。これは片手で押んだ手を口もとにもって来た身振。「拝む」心

マ

毎度 (1) 「毎日」と同じ手まね。(2) 「度

々」と同じ手まね。

毎日 人差指(上に)と親指(下に)を弧形にまるく開いた両手を前方で少しの間隔を置いて向い合わせ大きい円形をかたどり(太陽)それをそのまま上へ手前の方へ弧を描いて、下へまた前方へとこの運動を二三度繰返す。日が出て日が入りと繰返す毎日。「いつも」 「常に」の手まねにもなる。

参る (1) 行く。(2) 行くー拝む。(3) 降参。

任かす 「責任」の手まねをして、その手をそのまま前方へさし出す。責任を先方へ渡す。

負ける 五指の指頭を上になしして、内側にした掌で鼻頭を押える。負けて鼻がべしやんこになるの意。

孫 息子(中指) 女性(中指) 息子(中指) 娘(中指) 生れるー女性(中指) 息子(中指) 或は娘を表わした位置から更に下方へ生まれる男性(中指) 或は女性(薬指)を示す。生

れるが二重になるわけである。

真心（誠）「誠意」と同じ手まね。

優さる (ハ) 五指の指頭を上になしし前に向けた左手の掌に、指頭を上になしした人差指の右手をつけ、その手をそのまま上へすり上げて人差指が左手の五指から上に頭角を現わす。(ウ) 「較らべる」の手まねをして次に左右何れかの手をそのまま静止しておいて、その手の上で一方の手の五指を開いて、軍配を挙げるような身振をする。何れかが「優る」こと。

真面目 「一生懸命」の手まねをして、「心」を表わして、両手の夫々集め合わせた五指の指頭で左右につけ合わせて、両手に力を入れて前に僅かに押し出す。「心」がぎっしりと固まっていること。

麻雀 人差指と親指の両手でたち並らべた麻雀の牌を前に倒おす真似。ロンした時のように。

益々 (ハ) 「更に」と同じ手まね。(ウ) 「次第に」と同じ手まね。

貧しい 指頭を上になしした親指を顎の下につけ心持顎を上へ突き上げる。貧しくて口が干上るの意味か。

又 掌を下に向けて、指頭を前方になしした人差指と中指の手を、くるりと掌を上向けに返す。

亦 掌を内側にし、指頭を上になしした人差指の左手。その人差指の隣りの折り曲げられてある中指を右手で持って伸ばす。「人差指」に更に「中指も亦」と、もう一本の指を出させた訳である。

また 五指の指頭を前方になし、掌を右側にした左手に向って直角に、五指の指頭を左になし掌を内側にした右手を接近させて、僅かな間隔を置いて左手の手前で停止させる。この右手の指頭が左手掌につけると、「終り」

の手まねになる。即ち、「終り」の手前を表わしたことになるから、「まだ」である。

町(街) 家—家—家—家—と左の方から右の方へ表わして行く。家の多くたちならんでいる様。

間違ひ (1) 掌を前に向け指頭を上にした人差指と中指の手を、一方の眼に十字につけて、その掌をくると内側に返へす。(2) 掌を内側にした両手の集め合わせた五指の指頭を左右夫々の眼もとにしてから右の手をそのまま左の眼もとに、左の手を右の眼もとに位置を変える。左右を取り違えて見た間違ひの意。

待つ 五指の指頭を左にさし掌を下に向けた右手の甲を顎の下につけ、少し



心持上へ顎を押し上げるようにする。首を長くして待つこと。

松 掌の下に向けた手の人差指と中指の二指の指頭で頬を突き刺すようにつける。二本の針葉を表わしたものの。

末期 死—終り。

真先き 右手掌を下に向け指頭を左にさした人差指を左胸上部につけ(番号の一番を表わす)次にその人差指を前方にさしたまま、まっすぐに進ませる。

真直ぐ (1) 掌を右側にし五指の指頭を前方にさした左手の上に、掌を左側にし五指の指頭を前方にさした右手をのせ(左手の親指の上に右手の小指が重さなる)左手を軌道として、その上を右手がまっすぐに進んで行く。(2) 掌を左側にし五指の指頭を前方にさした右手をまっすぐに前方にさし出して行く。

全く 「凡て」と同げ手まね。

松茸 掌を内側に上にさした五指の指頭を集め合わせた左手の上に右手掌を傘のようにして被ぶせる。松茸の形をつくる。

まで 「終り」と同じ手まね。
的 「揭示」と同じ手まね。

惑う 心——迷う。

免る 逃がれる——やれやれ。

真似 五指の指頭を上にさし掌を前向けにした右手を、前方から五指の指頭を集め合わせながら額の方に引き寄せて、最後に額の上につける。他人のする事を頭に入れて真似すること。

学ぶ 習う——勉強。

招く 「呼ぶ」即ち、手招きする身振。

豆 親指と人差指で輪をつくって、他の三指の指頭を前方にさした両手の掌を向い合わせて、交互に両手を上下させる。

迷う 五指の指頭を右にさし、掌を前向け

にした右手。五指の指頭を左にさして掌を前向にした左手、夫々左右の腹脇のところから交互に左右に出して往復させる。右にしようか、左にしようか迷う姿。

稀れ 「少し」と同じ手まね。

万一 (1)「仮りに」「若しも」と同じ手まね。(2)数の「万」を表わし、次にその下に「一」の数を表わす。

満足 「あきらめる」と同じ要領の手まね。即ち、五指の指頭を上にさし掌を右側にした右手を左胸上につけ、そのまま斜め下にすり降して行く。

慢心 心——自慢。

万年ペン 右手でペン軸を持った指の姿態で、上下にふって(イントを出す)文字を書く真似。

満腹 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手。五指の指頭を右にさし掌を内側にし

た左手、その両手を腹の前にして、腹のふくれる様を表現するために両手を前へ出す。

III

身内 「親戚」と同じ

味方 五指の指頭を右にさし、前向けにした左手掌に、五指の指頭を左にさし内側にした右手掌をびったり胸の前でつけ合わす。

見切る むつかしい―諦らめる。

見事 感心―腕前。

未婚 結婚―まだ―独り。

湖 「池」の手まねの表現を大きく。

見知らぬ人 「他人」と同じ手まね。

水 (イ)五指の指頭を左にさし掌を上向けた右手の五指を波打たせながら左から右へと流して行く。(ロ)五指の指頭を上をさし掌を左に向けた右手を右頬すれすれにして、前後に僅

かに動かす。

店 五指の指頭を前方にさし、掌を上向けた両手を前で左右につけて並らべてから、両手を左右に離して行く。物品を前に展げたこと。

未成年 齡―二十一―未滿―人々。

晦日 (イ)月―終り。(ロ)年―終り。

乱れる 掌を上向けた左手に、掌を下向けた右手の両手を上下に向い合わせ、交互にぐるぐるとかき廻わす。乱れ混雑の状態。

道 五指の指頭を前方にさし掌を左に向けた右手、五指の指頭を前方にさし掌を右に向けた左手、この両手を平行にして前方へ道のくねりを表わして行く。

未知 (イ)「全く知らぬ」の手まね。(ロ)「未知の人」「他人」と同じ手まね。

道程 道―遠い―いくら(数)。

皆 「凡て」と同じ手まね。

孤児こなし 両親—ない—子供。

港 掌を左側にし指頭を前方にさした人差指の右手、掌を右側にし指頭を前方にさした人差指の左手。この両手を平行にして共に人差指をかぎ形に曲げる。港の防波堤の形。

見習 (1)見る—真似—勉強。

見張り 「監督」と同じ手まね。

未満 五指の指頭を右にさし掌を下に向け
た左手の下に、五指の指頭を上をさし掌を内
側にした右手を、僅かの隙をおいてT字形に
する。その線(左手)に、達しないこと。

土産 五指の指頭を右にさし掌を上に向け
た左手のかなりの上方で、五指の指頭を集め
合わせて掌を下に向けた右手を物をぶらさげ
た心持で両手を僅かに上下させる。紐でくく
った土産物を左手にのせ、右手でぶらさげた
姿。

明後日 二の敷(指頭を上をさした中指と
人差指)を肩の辺りから前方へ押し出す。
「二つ未来」のこと、または「寝る—二つ未
来」

明日 「明後日」の要領。一の敷(指頭を
上にさした人差指)を肩の辺りから前方へ押
し出す。「一つ未来」のこと。または「寝る
—一つ—未来」

身寄り (1)たよる人々。(2)親戚—友人。(3)
「身寄りが無い」は「孤独」の手まね。

未来(今後、以後) 五指の指頭を上をさ

し掌を前向けに
した右手を右肩
辺りから前方へ
押し出すように
する。鉢より前
方を未来とする。

ミルク 「乳」と同じ手まね。



未練 諦らめる——むつかしい。

ム

無益 (無駄) 「損」と同じ手まねをする。

無学 「本」の手まねをして、五指の指頭を右にさし掌を内側にした右手で両眼を塞さぐ。

昔年——過去。

麥 「米」の手まねの「白」のかわりに「茶色」で表わす。

昔馴染 過去——から(時の流れ)——友。

報いる 「五分五分」と同じ手まね。

無効 「損」「無益」と同じ手まね。

無罪 悪い——責任——ない。

虫 小指を曲げ伸ばしして、その手を横に移動させる。

無邪氣 心——赤ちゃん——適當。

柔盾 理由——合わない(適しない)。

無情 心——冷い。

息子 生まれる——男性(中指)

娘 生まれる——女性(薬指)

無雜作 骨折り——簡單。

無斷 「黙る」と同じ手まね。

無智 「馬鹿」と同じ手まね。

無茶 「出鱈目」と同じ手まね。

むつかしい 親指と折り曲げた四指で(即ち人差指との間)同じ側の頬を深くつまむ。

無念 「残念」と同じ手まね。

無能 腕前——知識——ない。

無用 必要——ない。

村 農業——家——家——家。「家」は位置を離して二つ三つ表わす。家がまばらに建っている様。

紫 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手を指頭で右頬につけ、後方へ掃くように

離す。

無理 「不可能」と同じ手まね。

無理やり 「出鱈目」と同じ手まね。

無論 「決っている」と同じ手まね。

メ

姪 兄(弟)姉(妹)ノ娘、兄、弟、姉、妹の何れ

かの手まねをしてから生れる一女性(薬指)

名士 (名高い一人(男性或は女性))。

名所 名高い一所。

迷信 出鱈目一信心。

冥土 死一人々一國。

命日 死一同じ一月日。

明白 「はっきり」と同じ手まね。

盟約 「連盟」と同じ。

名目 (イ)「表向き」と同じ手まね。(ロ)五指

の指頭を右にさし掌を内側にした左手の手甲

に、掌を前に向けた右手の人差指と親指で輪にしたのをびったりつける。この輪を左胸上につけると「名前」となる。それをとって表向き「名前だけ」と云う意味。

名譽 「光荣」と同じ手まね。

命令 「云う」の手まねを強調する。

迷惑 困る一不機嫌。

目方 秤一いくら。

妾 曲げた人差指で一方の眼をひっかける

真似をして一女。

盲 掌を内側にした手の指頭を上にした

人差指と中指で両眼を塞さぐ。

目覚め 人差指と親指の指頭をつけ合わせ

たのを眼もとで、両指を開く。

目下めとん 男性或は女性を表わした手を、腹部

前辺りに降す。

召使 掌を左側にして五指の指頭を斜め左

下方にさした右手、掌を右側にして五指の指

頭を斜右下方にさした左手、この両手を腹部前で中指の指頭でつけ合わせV字形をつくる（主人の前に立ってかしまってする手の姿態）。——男性或は女性。

珍らしい 掌を内側にした手の集め合わせた五指の指頭を眼の前にしてから、ぱっと五指を開く。眼ざめるばかりの意。

目出度 五指の指頭を左にさして掌を内側にした右手、五指の指頭を右にさし掌を内側にした左手、この両手を胸につけ「嬉しい」の手まね（胸を上下にさす）をして、次に両手の掌を上に向けると直ぐに五指を閉じては五指をぱっと開きながら上へあげる。

目上 男性或は女性を表わした手を目の上辺りにさし上げる。

眩まい 掌を内側にし集め合わせた五指の指頭を眼の前にして、その手をぐるぐる廻わす。

面会 「会う」と同じ手まね。

免職 男性或は女性を表わした左手の上を五指の指頭を前方にさして掌を上向けた右手で横に切る真似をして、「退職」と同じ手まねをする。

免除 免許——省く。

面識 顔——知っている——人。

面倒 握り拳で頭を叩たたき「骨折」の手まね。

面目 (1) 面目を施す。「自慢」と同じ手まね。(2) 面目ない。「恥しい」と同じ手まね。(3) 面目を潰す。「敗ける」(鼻べちや)と同じ手まね。

モ

鑑ける 掌を前に向け、指頭を上にした五指を少し屈めた手を、手前へぐっと手前に

引き寄せる。「金儲け」の場合、初めに「金銭」を表わす。

申訳 「弁解」と同じ。

燃える 「火」と同じ手まね。

もう一度 改めて—また。

目的 「考え」或は「行く」などの手まねをして、次に、五指の指頭を右にさし掌を内側に向けた左手をかなり前方に位置させて、その左手に向って、指頭を直角にさした右手の人差指を進ませて行く。

木曜日 握り拳にした両手の腕（下膊部）

Vを字形に交叉して拳をクルリと半回転させる。木の幹の股のねじれた様態を表現。

模倣 「真似」と同じ手まね。

若しも 「仮りに」と同じ手まね。

悶える 左右に交叉した両手の掌を胸にあ

て、悶える表情。

餅 左手掌の上で、右手で餅をまるめる身

振。

用いる 「必要」と同じ手まね。

勿論 「無論」と同じ、即ち「決まってい

る」

勿体ない 「大切」と同じ手まね。

最も 「初め」と同じ手まねをする。即ち五指の指頭を左にさし掌を下に向けた右手を右へ引くと同じに人差指を残して他の四指を折り曲げる。つまり「一」の数になる。

もつとも（真） 「ほんとう」と同じ。

尤も 「勿論」即ち「決っている」と同じ手まね。

元 「初め」と同じ手まね。

専ら 唯一つ——一生懸命。

物語 「話」と同じ、即ち「手まね」を表わす。

桃 合掌した両手をそのまま甲をまるくふくらませて、桃の実の形を模写する。

紅葉 赤——葉。

木綿 「綿」の手まねをして、袖の上をさする（ざらざらした感じを出す）

貰う 両手を重ねて物を頂く身振。

森 「林」と同じ手まね。

漏れる 掌を上に向けて五指を彎曲した左手の下からこれも掌を上に向け五指を彎曲した右手を上下させる。左手（器物）の中から物が漏れる様。

門 「開く」「閉じる」と同じ要領の手まねで表わす。

問題 考え 相談 V 揭示。

ヤ

やがて 少し——未来。

野球 (1)左手の親指と人差指で輪にしたのを（ボール）右手人差指（バット）で打つ。

(2)両手でバットを持ち球を打つ身振。

役 「責任」と同じ手まね。

役員 「委員」と同じ手まね。

妬く 「嫉妬」「猜む」と同じ手まね。

厄介 「面倒」と同じ。

役者 芝居——人。

役所 「政治」と同じ手まね。

約束 両手の小指を結び合わせて「指切り」をする。

役目 「責任」と同じ手まね。

野心 (1)がめつい——心。(2)「野心作」傑作——工夫。(3)野心を持つ。偉い人 持 V なる——考える。

優しい 心——やわらかい。

安い 「金銭」を表わしたそのままの手を下にさげる。

易い 「簡単」或は「へちやら」と同じ手まね。

休み (ハ)「閉じる」と同じ手まね。戸を閉じて休業するの意味。(ロ)「欠席」と同じ手まね。

家賃 家―借りる―金銭。

やっと 遂に―やれやれ。

やつれる 掌を下に向けた両手を拳にした指の背で、左右それぞれ頬につけ、下へすり降す。頬肉がやせこけた。

宿替 「移転」と同じ手まね。

宿屋 寝る―金銭―家。

柳 指頭を上にした左手の親指の上に右手の下向けた掌をまるく被せて、その五指を上下に揺らせる。柳の枝の揺れる様。

野蜜 拳にした左手の腕を(手首の辺り)をくわえ噛む真似。「人喰人種」を表わした手まね。

山 掌を下に向けた両手或は片手にて、山の輪郭を前の空間に描く。

病 拳にした手で額を叩く。頭痛のこと。
疼しい 反省―すまないこととした。

闇取引 秘密―商い。

やめる 掌を

上に向け五指の

指頭を右にさし

た左手の上へ、

五指の指頭を前

方にさし掌を左

側にした右手を直角に叩き降す。

やりくり 不自由―金銭の回転(商いと

同じ要領)

やれやれ 掌を内側にし五指の指頭を左に

さした右手を額の上左から右へさすってその

手をだらりと下へ降す、「やれやれ」と額の

冷汗を拭うこと。

やわらかい 片手でやわらかいゴムまりを

持って中の空気を五指で圧さえる身振。ふわ



ふわとした感覚を表わす。

やんちゃ 指頭を上にした親指の背で鼻頭を左右にこする。

ユ

遺言 死ぬ—前—云う。

夕方 「黄昏」「日没」と同じ手まね。

結納 「結婚」「約束」と手まねして、次に両手で水引を結ぶ真似をして、物を前へさし出す身振。

憂鬱 「不機嫌」と同じ手まね。

有益 (竹) 智識—得る (儲けるの手まね)

(何) 幸福—得る (儲ける)

遊廓 娼婦—町。

勇氣 握り拳にした両手の腕を左右に張って、そのまま両手を交互に活発に二三度前に出しては引く。

夕立 急に—雨。「稲光」の手まねを加えてもよし。

輸出入 「貿易」と同じ手まね。

遊蕩 「耽溺」と同じ手まね。

郵便 左手掌を内側にして指頭を右にさした人差指と中指に右手指頭を上にした人差指の指頭をつけ「丁」形をつくる。

猶予 延朝—待つ。

有名 「名高い」と同じ手まね。

優劣 掌を内側に指頭を上にした両手の親指を前に対立させて、交互に上下させる。

「較らべる」「勝負」と同じ要領。

故に 「関係」の手まねのまま、少し左へ移行させる。

所以 「意味」と同じ手まね。

愉快 「嬉れしい」と同じ手まね。

雪 「白」を表わして、五指の指頭を上にした掌を前向けにした両手を前に左右に並ら

べ、こまかく両手を左右にふるわしながら下へ降して行く、雪の降る様。

強請る 尻まくりの真似して、右手を「貰う」とばかりさし出す。

譲る (1)「任かせる」と同じ手まね。(2)「与える」と同じ手まね。

許す かまわない——寛大。

夢 掌を上向け五指をまるく屈めた右手を顔の近く前にして、手首でぐるぐる廻しながら斜め左上へあげて行く。絵やまん画に夢を見ているのを描いた煙様のものを模倣したもの。

三

酔う 「眩い」と同じ要領の手まね。顔の表情によって区別する。

用意 「整頓」と同じ手まね。先に整えて

おくこと。

用件(用事) 「必要」と同じ手まね。或は「相談」と同じ手まね。

洋行 西洋飛行機船 \vee 行く。

養子 \wedge 貰う上げる(与える) \vee 息(娘)

洋食 掌を下に向け指頭を左にさした人差指と中指の右手。掌を下に下向け指頭を右にさした人差指と中指の左手、一方をナイフ、一方をフォークとなぞらえて料理を切る真似。

用心 「注意」と同じ手まね。

様子 五指の指頭を上にしし掌を前に向けた両手で、何にか或物の輪郭を模倣する身振。

幼稚園 遊戯をしているように両手を叩いては両手を左右に出して手をつなぎ合う真似をして—学校。

養父母 ほんとうに産むでない（違う）
父母。

洋風 西洋に適する。

ような 「如き」と同じ手まね。

予科 掌で膝を叩たく。脚即ち土台をつくることからか？

予期 「想像」と同じ手まね。

預金 「金銭」を表わした手を前にさし出してから、掌を上向けた左手の上に郵便局の消印を握った姿態の右手を叩たき降す。

翌一日、月、年 日、月、年——一つ未来。

浴場 「風呂」「温泉」と同じ手まね。

欲心 がめついで——心。

余計 多い——過ぎる。

像算 「象」と同じ手まね（「像」の文字のつくりから起った手まね）——会計。

善し（良し）拳にした手を鼻頭につけ鼻高を表わす。

予習 その前に——勉強。

寄算 両手の人差指で十字を形どり——算術。

術。

予想 「想像」と同じ手まね。

予定 「用意」「整頓」と同じ手まね。

世の中 「人々」を表わしてから、掌を下に向けた右手を胸左脇辺りから前方へ弧を描いて右へ。

予報 (1)「予報する」考えこてる——云々。

(2)「予報」外れる。「あて外れ」同じの手まね。

読む 新聞（或は「本」「手本」）を表して

から、掌を下に向け指頭を前方にさした人差指と中指の手を眼もとにして（視線）、二指を視線が文字を追うように、上下させる。

夜 五指の指頭を上になし掌を前向けた両手を顔の前で交叉しては左右に僅かに離しては交叉して前方を模索する身振り。「暗い」

の手まね。

ラ

雷雨 稲光―雨。

ライオン 掌を前に向け五指の指頭を上にした両手を夫々左右頭に親指の指頭でつけて、ライオンの乱れ髪を表わすように五指を下へ屈がめて、次に掌を下にして五指を角ばって屈めた両手（爪を立てた前肢）を胸の前に前後斜めに位置させる。

来月 月―一つ―未来。

ライト 右翼手のR、人差指の爪の上に隣りの中指の指頭をつける。英語のアルハベットの「R」。

来年 月―一つ―未来。

楽 「楽しい」の手まねをして、掌を上に向けた両手を膝の上に置く。

楽観 心配―しない―待つ。

落第 (1)指頭を上にした左手親指の上に右手の掌をつけ下へ押し降す。(2)「敗ける」と同じ手まね。

落胆 「がっかりする」と同じ手まね。

落雷 「稲光」を表わして、五指を集め合わせて掌を下に向けた右手を左手掌の上に降すや否や、その右手の五指を上向けてぱっと開く。

ラジオ 掌を下に向け五指の指頭を左にした右手、掌を下に向け五指の指頭を右にした左手、その両手を左右から頭の両側に向かって五指をこまかく波うたせながら近づける。電波が送られて来ること。

羅針盤 右手傘の上に、指頭を前方にさした人差指の右手をのせ、その人差指を左右に磁石の針のように動かせる。

乱心 「狂う」と同じ手まね。

濫費 出鱈目—買う。

リ

利益 儲け—幸せ。

理解 「解る」と同じ手まね。

理解に苦しむ 五指の指頭を上にしし掌を内側にした手の中指で鼻頭を叩たく。

利害 儲け—損。

離婚 「夫婦」の両指を左右に離す。

理屈 「意味」の手まねをして、両手の集め合わせた互の五指の指頭で上下に突つき合わせる。理屈をこねること。

陸軍 掌を内側にして五指の指頭を集め合わせた両手を右胸に上下に（左手は下）つける。銃をになう第一の姿勢。

陸地 「土」を表わして、掌を下に向けた右手を左胸脇辺りから前方へ弧を描いて右へ

（広さを表わす）

力量 「腕前」と同じ手まね。

利己 「吝ちんぼ」と同じ手まね。

利巧 「賢い」と同じ手まね。

理想 (1)完全—立派—一致。(2)好き—思う—一致。(3)未来—幸福—造る—想像。

利子 「金銭」の手まねをして、五指の指頭を右にさし掌を上に向けた左手の上に、指頭を前方にさした右手の人差指で一つの線を

手前の方へ引く。

律義 「正直」と同じ手まね。

立身出世 男性を（或は女性）を表わした手を下から徐々に上へあげて行き「有名」（名をなす）の手まね。

立派 「善い」の手まねを大きく表わす。

立腹 「憤る」と同じ手まね。

理由 「意味」と同じ手まね。

流行 (1)「ハイカラ」の手まねをして、掌

を上向けた両手を胸の前から前方斜め左右に
さし出して行く（拡ろがるの意味）。(例) 病氣
（或は風邪）―拡ろがる。

旅行 「旅」と同じ。

了解 「解る」と同じ。

漁師 魚―釣る―人々。

良心 (例) ほんとうに―正直―心。(例) 仏（或
は神）―叶う―心。

両方 「較らべる」と同じ要領の手まねを
して、「二」の数を表わす。

料理 (例) 美味しい―いろいろ―造る。(例) 食
べる―物（いろいろ）―炊く（「火」の手まね）
―切る（左手掌を俎にして右手を包丁として
切る真似）。

旅館 「宿屋」と同じ。

旅費 旅―必要―金銭。

理論 「研究」と同じ手まね。

隣家 「家」の手まねをして左手をその姿

態のまま残し置き、右手もその姿態のまままで
左手の手甲にそのの手甲をびったり背中合せ
にしてから、左手を左へ移つして、両手で再
び「家」の形をつくる。

格闘 「嫉妬」と同じ。

臨終 終り―死。

倫理 「道德」「修身」と同じ手まね。

ル

類 両手の人差指の指頭をつけ合わせてか
ら左右に離し、夫々下へ僅か心持ち弧を描い
て（即ち「の形」―いろいろ）。

ルール 「規則」と同じ。

留守 「不在」と同じ。

ルンペン (例) 「失業」と同じ手まね。(例) 指
文字の「ル」即ち指頭を上にした親指と人
差指と中指の三指（掌は前向）の手をぐるぐ

る前で廻わす。

レ

例外 「特別」と同じ手まね。

礼儀 「作法」と同じ手まね。

冷酷 心一冷い—大へん。

例年 毎年—同じ。

礼拝 「合掌」或は「式」と同じ手まね。

零落 「落ちぶれる」と同じ手まね。

賢い 「賢い」と同じ。

歴史 親指と小指(男性と女性を同時に表



わす)の両手を
手首のところ
びったりつけ合
わせ、左手はそ
のままにして右
手を手首で左右

にぐるぐるさせながら、下へ降して行く。つ
まり子孫と同じ要領の手まね。

レフト 野球の左翼手のL。英語の指文字
のLで表わす。即ち親指と人差指をLの形に
する。

恋愛 「恋」と同じ。

連関 「関係」と同じ手まね。

連合 両手の人差指を曲げて、左右にかけ

合わす。

連日 「毎日」と同じ。

連盟 「連合」と同じ手まね。

ロ

雙啞 一方の手の掌で耳を塞さぎ、他方の
手の掌で口を塞さぐ。

労働組合 働く—人々—組合(連合)

老人 (男)男性ならば親指を曲げ、女性なら

ば小指を曲げ僅かに上下させながら移動させる。同時に一方の手の手甲を腰の後につける。(例) 齡—多い(顎の下で掌を下に向けて五指を彎曲した右手、その僅か下に掌を上向けて五指を彎曲した左手を上下に向い合わせ、右手の方へ上へあげる。量のふくれ上ったこと)

浪人 「失業者」と同じ。

勞力 働く—腕前。

露店 家—なし—店。

口ハ 金銭—なし—かまわない。

論文 研究—文章。

ワ

張せつなこと 掌を右側にした右手を拳にして右頬を一二度打つ。

賄賂 右手で「金銭」を表わしたのを左手

の手首の下から袖に入れる身振(「袖の下」のこと)

和解 改めて—仲よし。

若い 五指の指頭を左にさし、内側にした右手の掌で額を左から右へ撫でる。額にしわがないこと。

我儘 「やんちゃ」と同じ手まね。

解らない (例)「知らない」と同じ手まね。

(例)「理解に苦しむ」

解る 掌を内側にした五指の指頭を左にさした右手を胸にあて撫で降す。胸(心)におさまったこと。

取 「意味」と同じ手まね。

分ける 掌を下に向け、五指を屈めた両手を前で左右につけ合わせてから、物を引き分けるような身振で、左右に離す。

技 「腕前」と同じ手まね。

災 突然—不幸—受ける。

僅か (イ)「少し」と同じ手まね。(ロ)「つまらない」と同じ手まね。「僅かですが……」の場合。

忘れる 拳にした右手を頭の右側につけて



から、ぱっと五指を開いて上へ上げて行く。頭の中にあつたものが、放散して行くこと。

和製 日本—造る—物(いろいろ)

綿 五指を屈めて掌を左右に向い合わせた両手でふわりとした綿の塊を持った姿態で、それを少し左右に引き伸ばす身振。

詫びる 「謝やまる」と同じ手まね。

和服 「着物」と同じ手まね。

笑う 五指の指頭を左にさし掌を内側にした右手。その五指を屈めて、頬の左側につけ

口を被うようにして口を開いて笑う表情。

割算 左手の掌を内側にし指頭右に差した人指差(「一」の形)を上下に挟むように、右手の掌を前向け指頭を前方にさした人差指と親指をコの字形にして囲む。即ち前から見て「の」記号の形をつくり—算術。

割引 金銭—引く(省く)

悪い 指頭を上にした右手の人差指で鼻頭の上を右から左へささつかずめる。善い(鼻高)の鼻を切ったこと。

悪るかった (イ)「謝まる」と同じ手まね。

(ロ)「御免御免」と同じ手まね。

悪賢い 「猜るい」と同じ手まね。

悪口 悪い—云う。

悪るさ 「やんちゃ」と同じ手まね。

悪者 (イ)悪い—人(男性或は女性)。(ロ)意

地悪(不正直)—人。

数詞

0

親指と人
差指で輪
をつくる
(他の三
指は伸ば
したまま)



一
人差指



二

人差指と
中指



三

人差指と
中指に薬
指

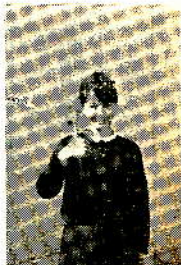


四

右の三指
に小指。



五 親指一指
にて表わ
す。



六 親指に人
差指



七 右二指に
中指



八 七の二指
に薬指



九 右四指に
小指



◎ 四つ珠の算盤の様式と思えばよい。算盤の機の上の珠(五)を親指となぞらえ、機の下の方の四つ珠を人差指・中指・薬指・小指とした心得。
十 (1) 親指と人差指の指頭をつけ合わせて丸く輪をつくる(但し他の三指は伸ばした



まま。
何 指頭を上
さした人差指を
曲げ伸ばしす
る。

二十 「二」を表わした二指を曲げ伸ばし
る。

三十 「三」を表わした三指を曲げ伸ばし
する。

四十↓九十 二十、三十の要領でそれぞれ
表わした指を曲げ伸ばしすればよい。

百 十份に更に中指の指頭を親指の指頭に
つける。

千 「百」に更に薬指の指頭を親指に。
万 「千」にまた小指を。

◎ 千、万の場合、人差指で空間に千域は万
の文字を描くのもよし。

ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
							
イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
							
ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
							
	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
							
ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
							

指
文
字

パ	バ	ダ	ザ	ガ	ン	ワ	ラ
ピ	ビ	ヂ	ジ	ギ	ー	キ	リ
プ	ブ	ヅ	ズ	グ		ウ	ル
					★		
ペ	ベ	デ	ゼ	ゲ		エ	レ
					★		
ポ	ボ	ド	ゾ	ゴ		ヲ	ロ
					★		

「竜の落し子」誕生のことは

元来、「竜」は私達人間がつくりだした想像上の靈的な動物である。その竜の子どもが「竜の落し子」だとしている。それは「竜の落し子」全体の形が竜によく似ているからであらう。この「竜の落し子」をろう者に関係つけてつかうようになったのは、昭和二十三年二月からである。

その当時私はろう者の代表的な洋画家である大原省三氏と二人で同室の生活をしていた。その時氏が始めて「竜の落し子」なるものを絵にあらわし、私に意見を求めたことに始まる。こうしてできあがったのが所謂ろう者のマークとしての「竜の落し子」なのである。以来「竜の落し子」はろう者を代表し、ろう者の「耳」をあらわすものとしてろう者に親しまれ、ろう者に関係のあるものの代弁者の役割を何回か果たしてきたのである。それは次のような理由により私達がつくりだしたからである。

(一) 「竜」と「鱉」とはよく似た漢字であること。

(二) 「竜の落し子」には耳がないと常識的にいわれていること。(実際にはセキツイ動物であるからその聴覚器は頭部内にある。)

(三) 人間の耳の形と「竜の落し子」大変よく似ているばかりではなく、漢字の「耳」という

字そのものにもよく似ているということ。

(四) その生息は常に海底であるということ。

などからである。ところで、実際の「竜の落し子」なるものは実在するセキツイ動物で、硬骨魚類の一種であり、体長は六糎乃至八糎の小魚なのである。その棲息している地域は、日本（三崎、高知）朝鮮南部などに多く住んでおり、「竜子」「リュウノコマ」「ウマノコ」または「海馬」などの別名で呼ばれているものである。食用にはならないが、中国の南部、台湾などでは乾燥して薬用に使っているそうだし、日本では安産のお守りにされている。

市 村 栄

編著者略歴

松永端

- 一九〇〇年 大阪府生れ
- 一九二二年 早稲田大学露文科中退
- 一九二三年 映画、新派劇作者
- 一九二五年 大阪市立ろうあ学校教員
- 一九四七年 相愛学園文書課長
- 一九五八年 日本聴力障害新聞に「手まねの郷愁」を連載
- 一九六一年 「手まねの研究」を連載

手話辞典

昭和三十八年四月十日
昭和三十八年四月二十日

初版印刷
初版発行

定価 三〇〇円
送料 五〇円

監修者 藤本敏文

編著者 松永端

発行者 市村栄

印刷所 三盛印刷株式会社

発行人 日本特殊教育協会

東京都世田谷区玉川局私書函十一号

振替東京 五七〇六七番

市村 榮著

ろう者の心理学

新書判 二五〇頁 五二五〇 千五〇

昭和三十八年七月発行

現在まで著者がろう教育に十七年、そして全国のろう者団体にも関係し、しかもろう者をとって文字通り日夜ろう者と共にあり、そうした生活経験を基盤として書かれたもので、日本では初めて公にされる「ろう者らしい」とは何か、というろう者の心理を知るための唯一の書である。

文学博士 大西雅雄
東京教大教授 萩原浅五郎他

言語理論

ろう教育とは何か、ろう者の言語とはどんなものなのか、そうしたことについての原理を追究したもので、ろうに関係のあるすべてのものが一読しなければならぬ書である。

昭和三十八年十二月発行
A五判 四〇〇頁 箱入

五五〇〇 千五〇

市村 栄著

昭和三十七年六月発行

B六判 一三〇頁 ㊦二〇〇 ㊦三〇

手真似（写真入り）

推薦者

松田竹千代 中山マサ先生
萩原浅五郎 山下春江

この書は日本で初めて書かれた手真似の本で、手真似の理論編である。

文学博士 大西雅雄 監修

著者（順不同）

北野藤治郎 鳥居英夫 松沢 豪

始閣精太郎 猶村鋭彦 林 次一

櫃田祐也 昭和三十八年九月発行

読話と発語（上巻） （下巻）

今日のろう教育は相手の口形を見て話しを
読みとる口話教育（読話と発語）である。
各巻 ㊦五〇〇 ㊦五〇

本書は、そうした面の真髓をこの教育の第一人者達によって公にされるものである。この書によってあなたもろう教育の専門家になれます。

藤本敏文監修

松永 端編著

手話辞典(写真入り)

昭和三十八年四月発行

A五判 二五〇頁 箱入

定価、送料共 三五〇円

この書は、ろう者の手話約三〇〇〇語の内、二〇四〇語が集録してあり、手真似の実際編ともいうべきものである。また、編著者は日本における手話の第一人者もある。この書によれば、誰れでも手話の専門家になれる。

東京都世田谷区玉川局私書函十一号

発行所 日本特殊教育協会

振替 東京五七〇六七番





